

171-418

續千山萬水

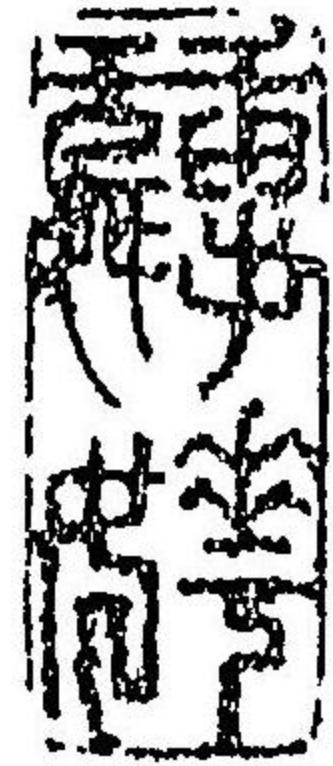
大橋又太郎



題乙羽山人綴千山萬水併送其游歐羅巴三首

國府東

探盡皇州海際奇。舟車橋樑築相隨。樓雲映雨岐蘇路。
 鯨汐颯潮筑紫隄。菡萏花開嶽頭雪。珊瑚竿拂日邊枝。
 四方尙有未看城。乙羽山人截筆之。
 日沒之邪萬里航。椰桑有客去觀光。列強形勝龍盤地。
 新國風雲虎據塲。巴里春都紅葉旂。萊因芳岸野薇香。
 山河訪遍名都趾。爲醉椒漿古帝王。



山

大前位侯爵伊藤博文先生題字

心

樂

竹 韻



河東在河
陰山在河

物不新得競

爭有思古者哉

上此藏波義

母少奇

秘の秘代題

之
まま



序

仙家に縮地の術ありといへども、近江八景も瀟湘八景も一皿へ盛りならべてハ景色に飽くべし、乙羽氏の遠遊の癖ある山の奥谷の底景地勝跡足かならず實地を踐む。往つ返りつ上りつ下りつ辛苦艱難容易にあらずと。屋根から少し飛んで見やうかとおもふ仙術修業中の我輩、貳萬分の一、五萬分の一の地圖を擴げて頬杖突き、

此から斯う行て此へ廻り此に遊びて斯う褒めて
と縮地ですます足惜みからみれば、俗士の道途
に勞るゝ事よ、生立ながら片羽を貸し申さんと
云たきほどなり、志かるに乙羽氏また一大幻術
あり、其の一望一景古へを懐ふに足り今を賞す
るに足るところに到れば、一個の怪しき小箱を
取出し、不思議の手付をなすと等しく、天下の
名山大川の忽ちに吸取られて其箱の中に在り、

あだかも西遊記中の金角大王が大千世界を一胡
蘆のうちに盛り入れ終るに似たり、こゝに至り
ては我が仙家の縮地の術の遠く及ぶところにあ
らず、此の幻術の上にまた、筆端より雲霧を生
じ、妙文たちごころに花を點く、見る者讀む者
駭然として、身もたい其箱の中に吸入られたる
が如し、嗚呼乙羽氏もごより大いなる羽ありて、
人を乗せて大千世界を瞰下としめんとするなり

けり、我術いよく及ばず我羽ますく用をな
さず、羽を剝つて筆に結ひ、此序をこゝに書く
こと爾り

四

響庭篁村

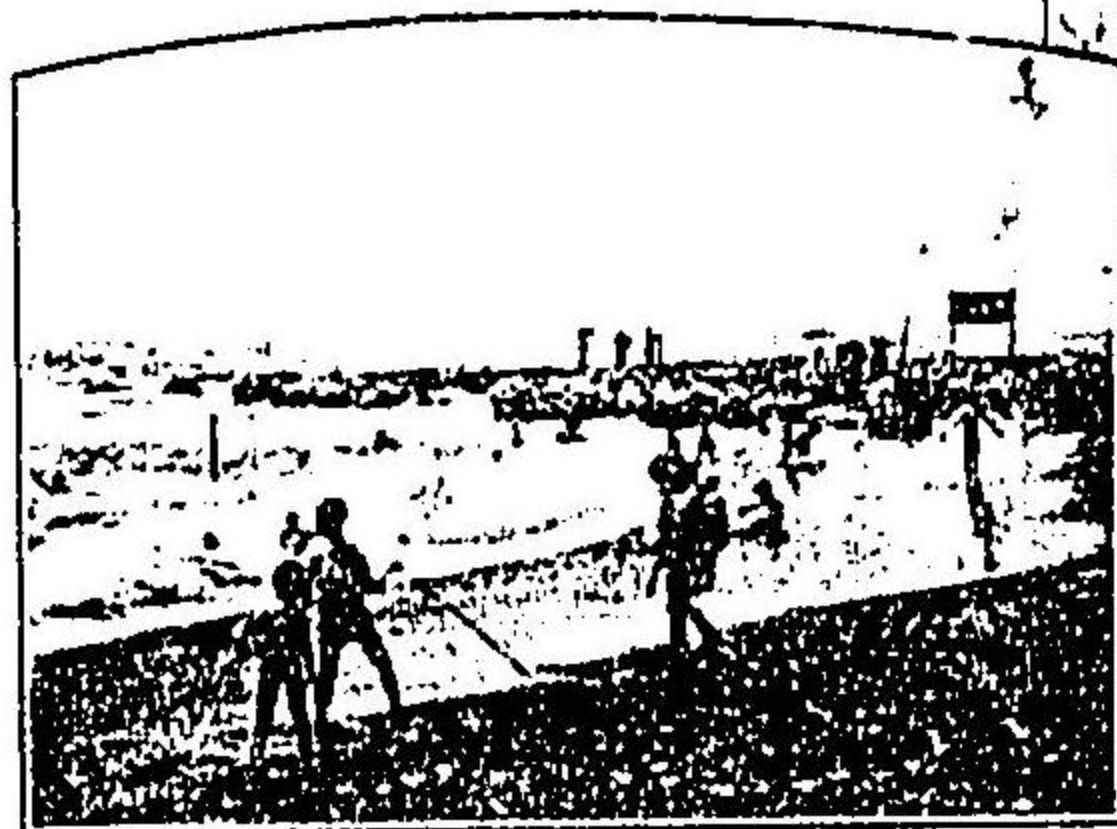
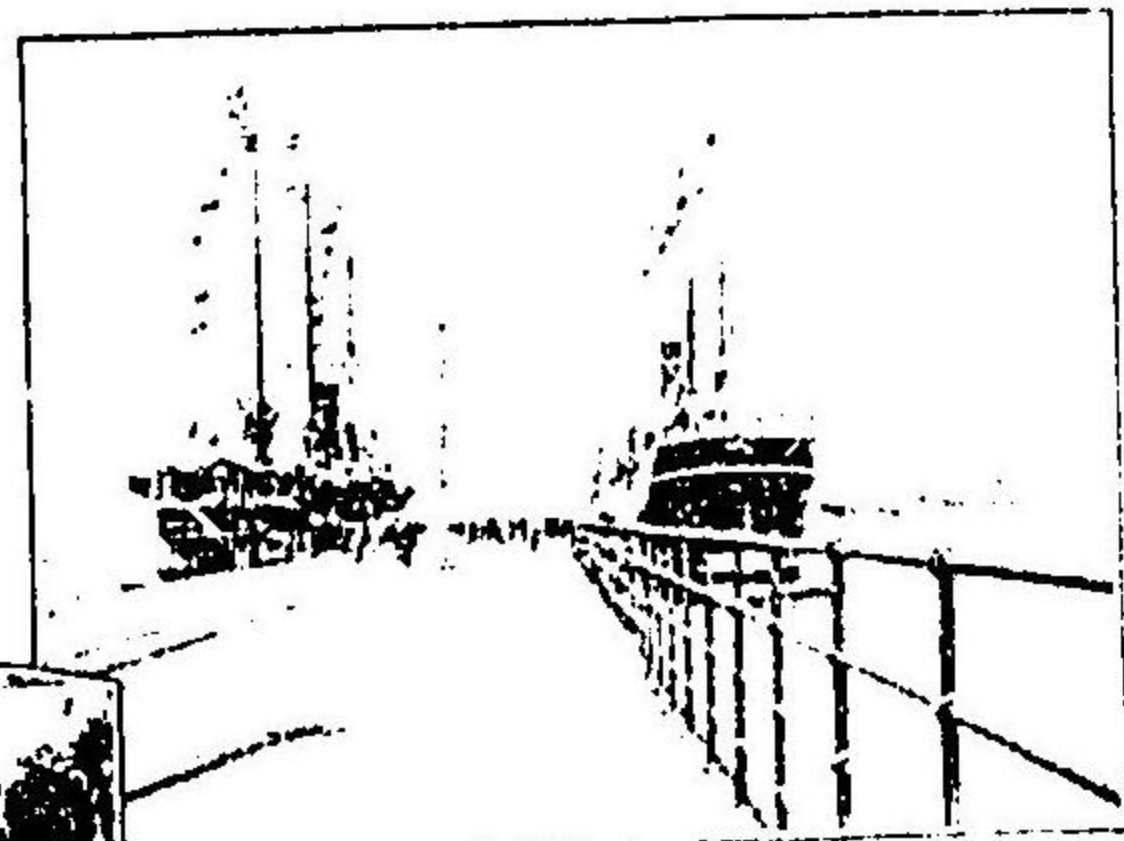
一に富士、二は愛鷹山、三こそ何に下野の那須野
といはれ、それは初夢の判じ物、これは百聞一見
に如かずとて、年が年中、旅から旅を飛び歩く氣
まぐれの男あり、お歳はど問はれて、三十をと天
窓掻きながら、なほ好きの道は忘れず、われ
にはゆるせと、敷島の和歌の浦より、小舟を行る
に、さくら波にひよろくの松が枝、夕雲に鳥の
立つは、葦手の繪にもあるらむ景色に、冠着けぬ
身を悔むも可笑しく、また恥を柿の下の栞戸開け

て。羅漢寺の番僧に、耶馬溪の秋を問ふも、悟道の門なるべし。雲邪山邪、悲か將基か、雨の日に長逗留して、角兵衛と合宿せるも面白く、獅子心中の話を聞いては、上方にもそんなものあるかと問へば、鳥にも膳の懸あり。行燈の針の穴、誰を待宵の情ぞや、斯道ばかりは親不知子不知、淨世は實に双六の最明寺、ふらは泊に枕擡げて、夢の中の屋氣樓は、こりや歐羅巴か。なんだ、これちやア矢張日本の方がいゝ。

子ごの二月

著

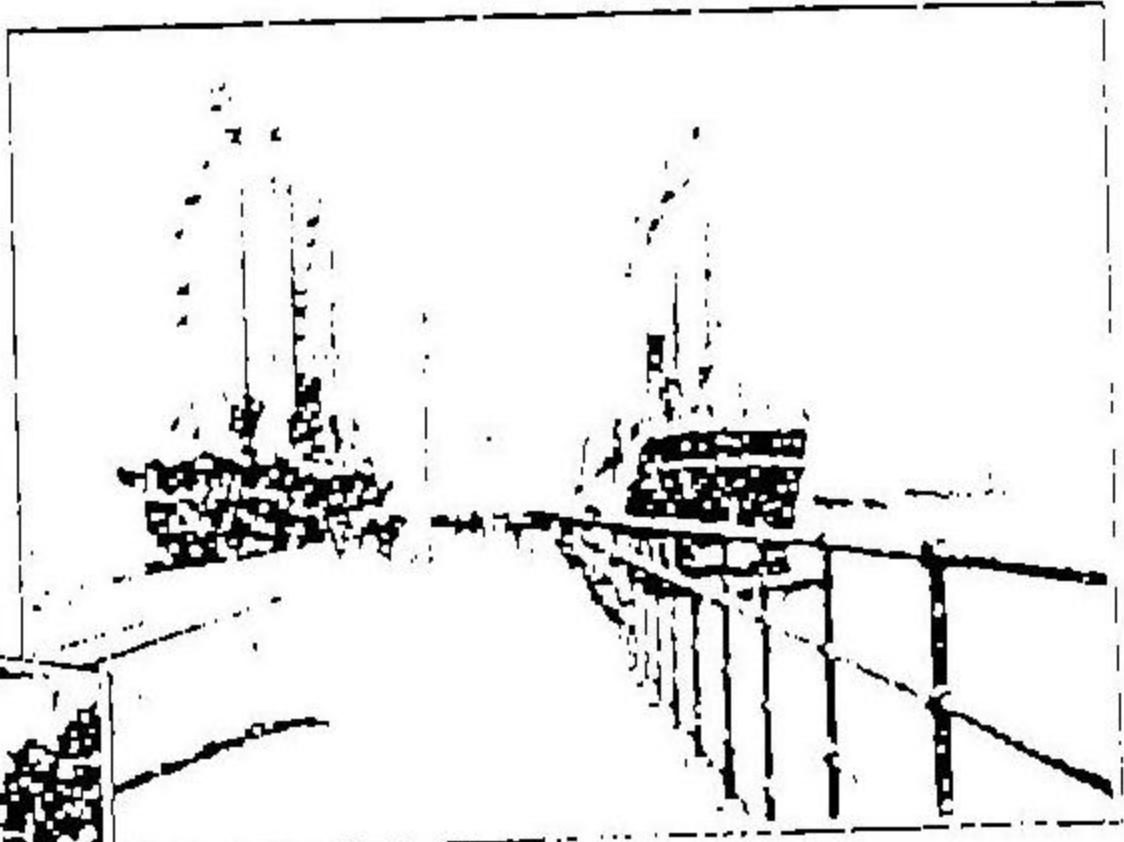
者

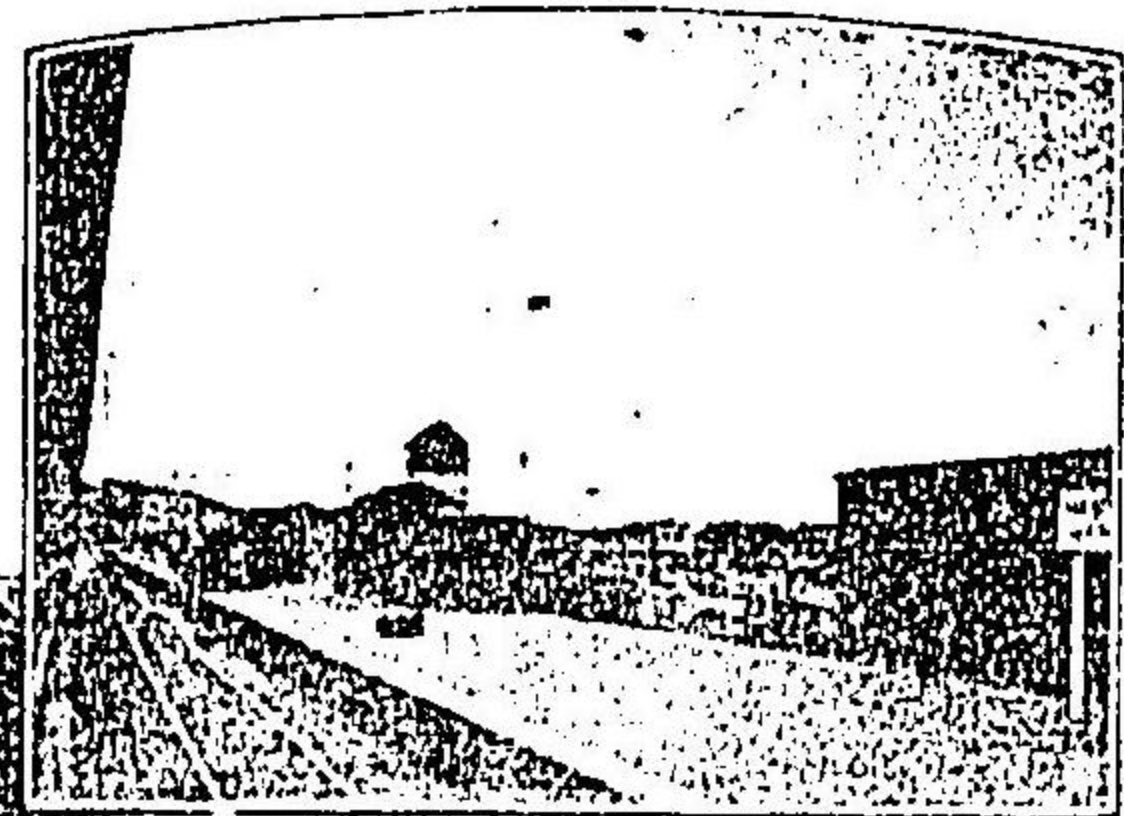
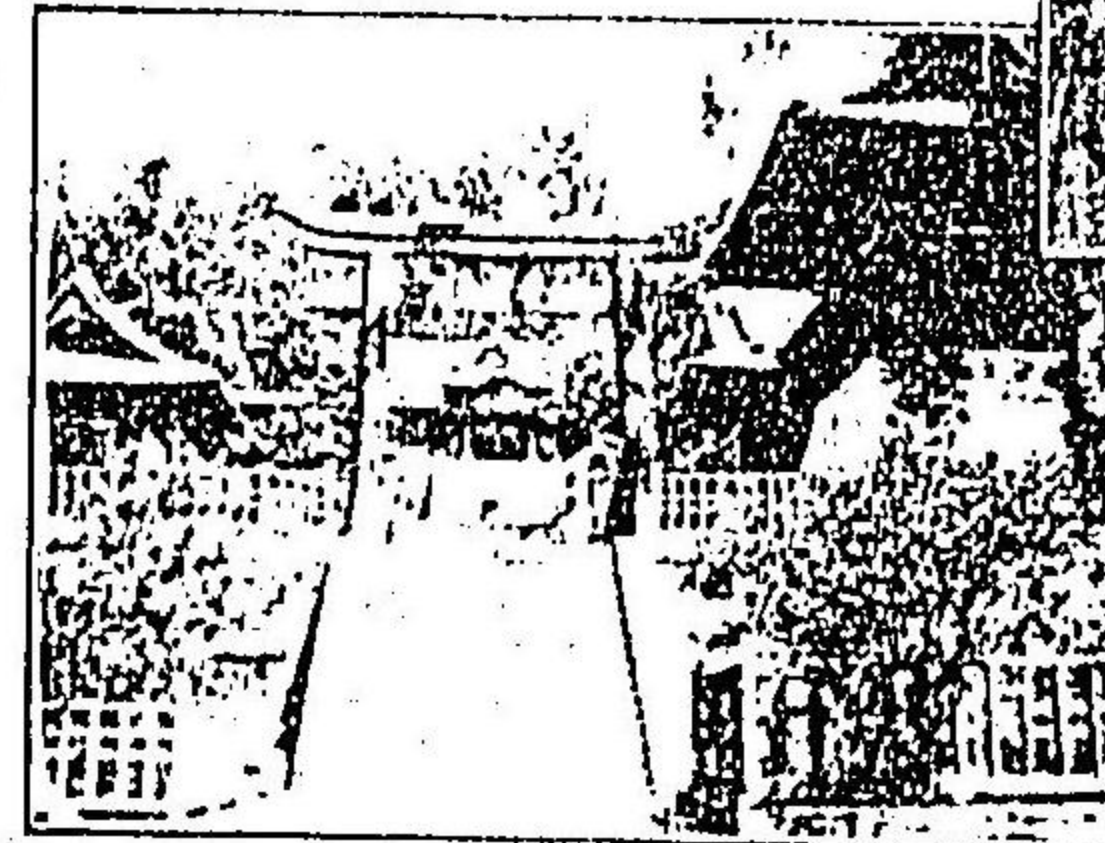
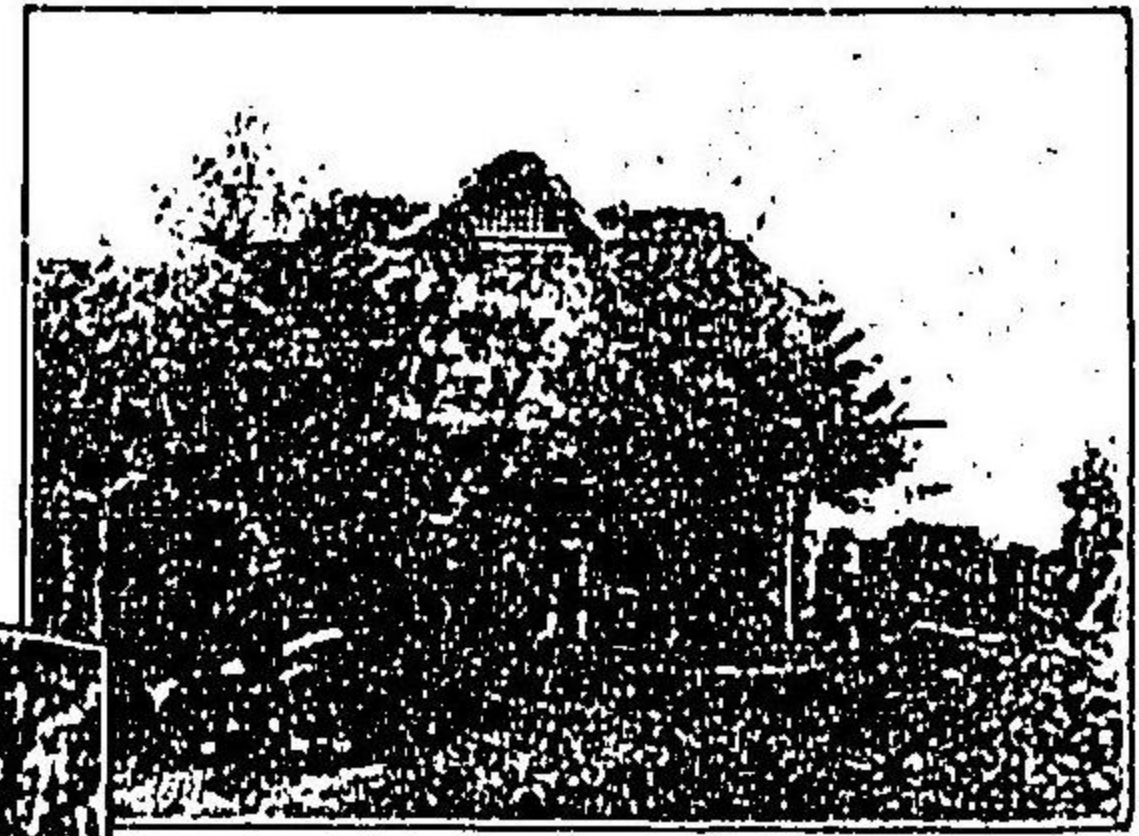
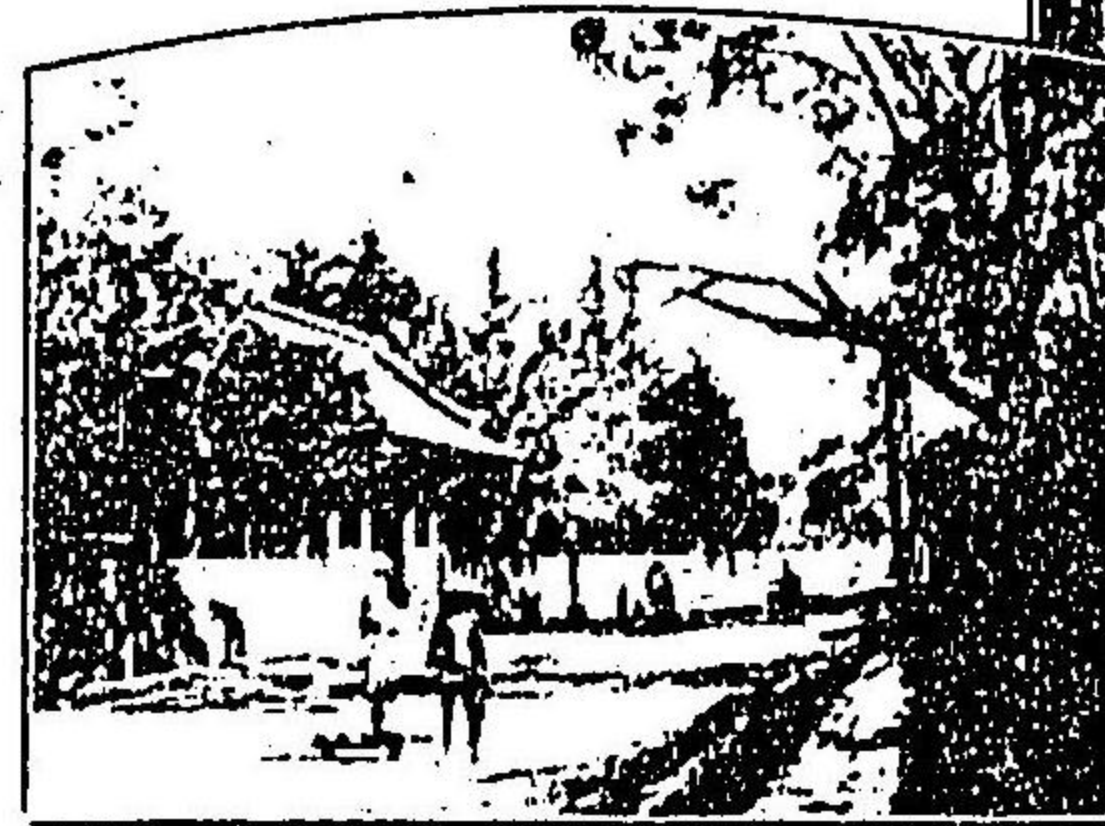
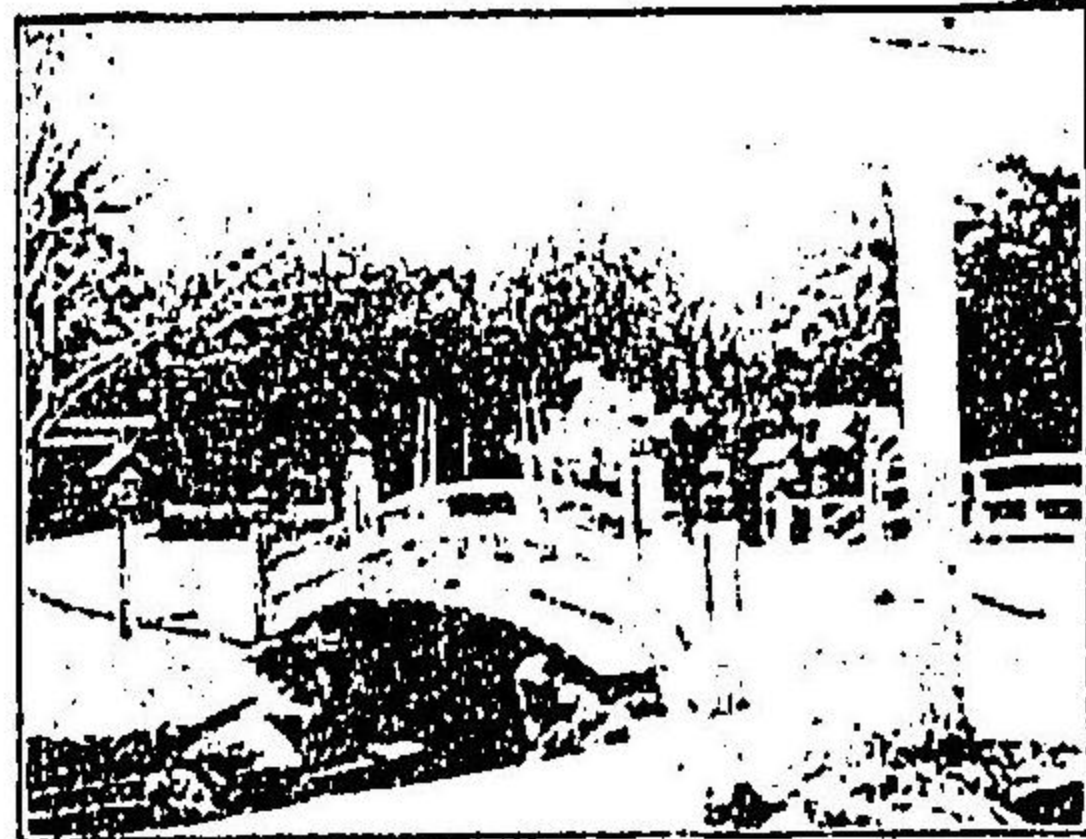
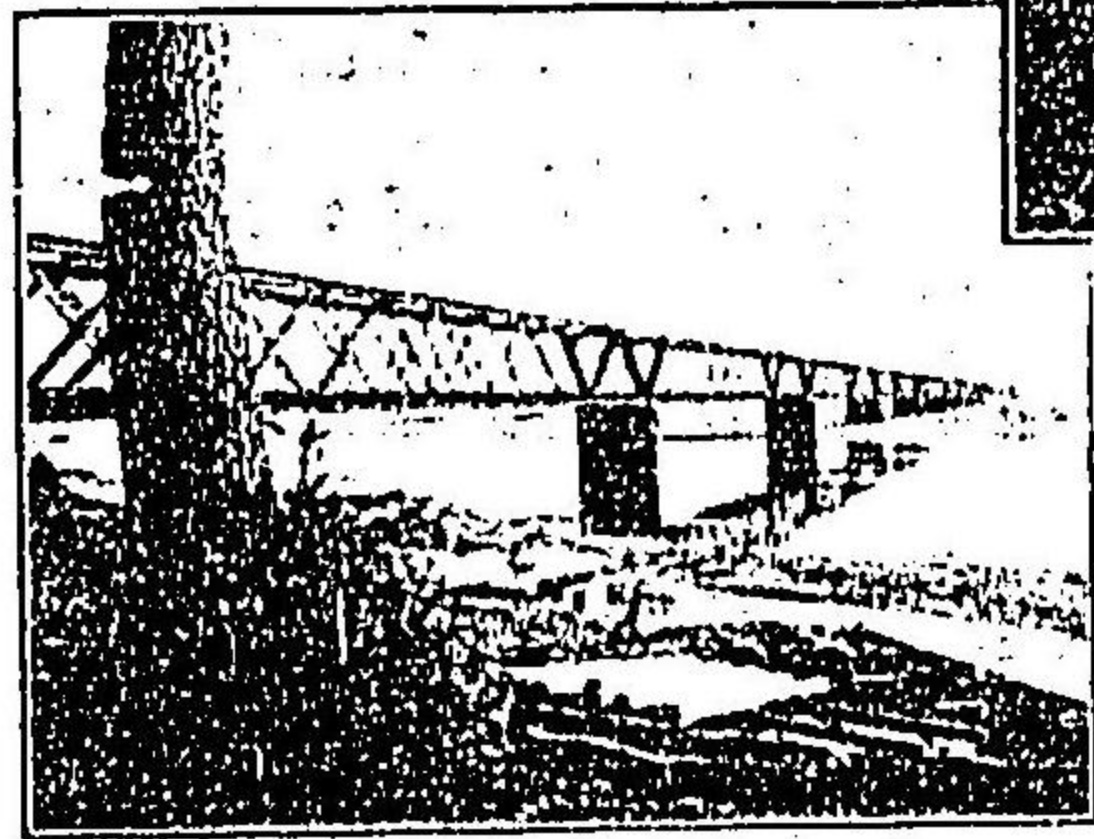


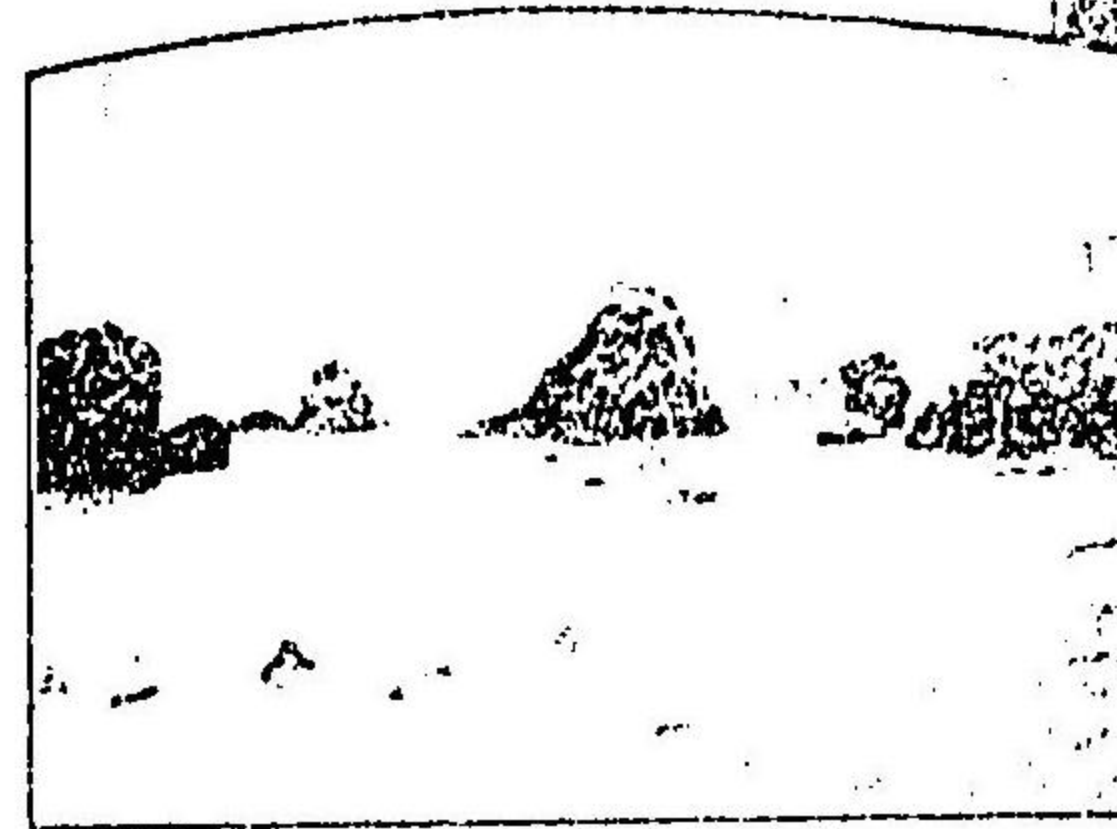
て、羅漢寺の番僧に、耶馬溪の秋を問ふも、悟道の門なるべし。雲邪山邪、暮か將暮か、雨の日に長逗留して、角兵衛と合宿せるも面白く、獅子心中の話を聞いては、上方にもそんなものあるかと問へば、鳥にも鳩の戀あり。行燈の針の穴、誰を待宵の情ぞや、斯道ばかりは親不知子不知、浮世は實に双六の最明寺、ふらは泊に就擽げて、夢の中の盛氣樓は、こりや歐羅巴か。なんだ、これちやア矢張日本の方がいい。

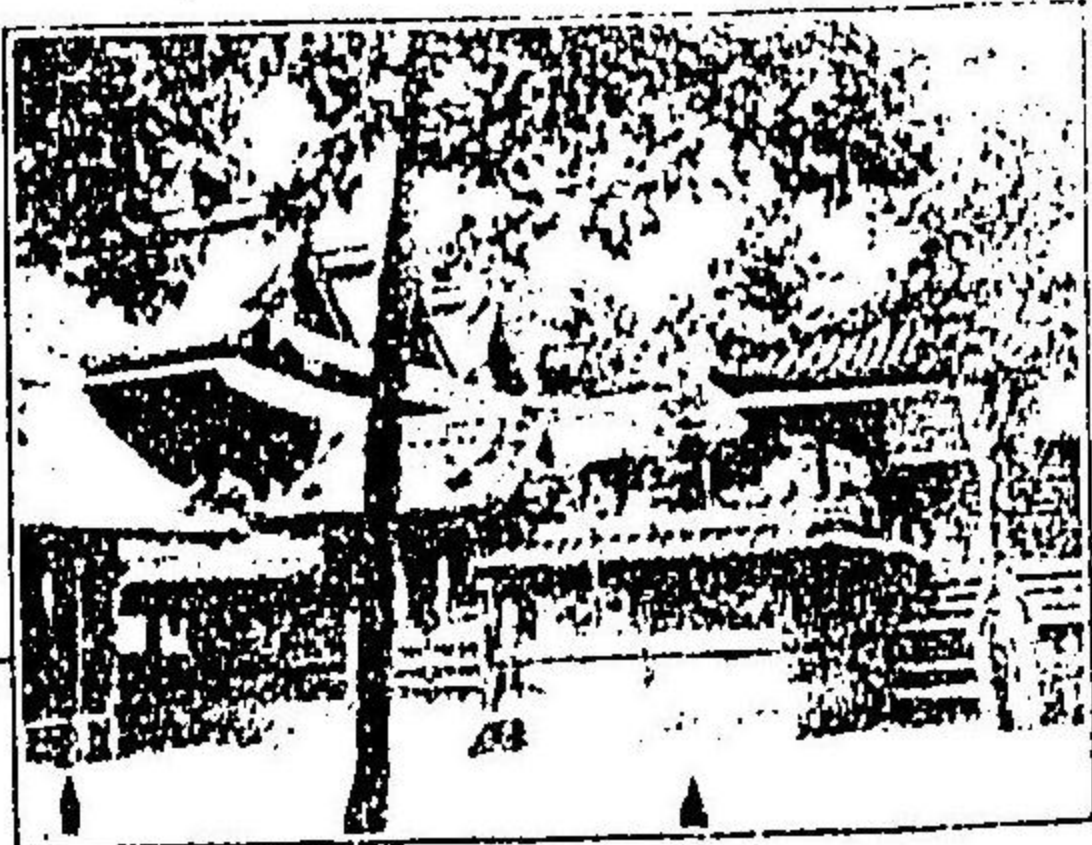
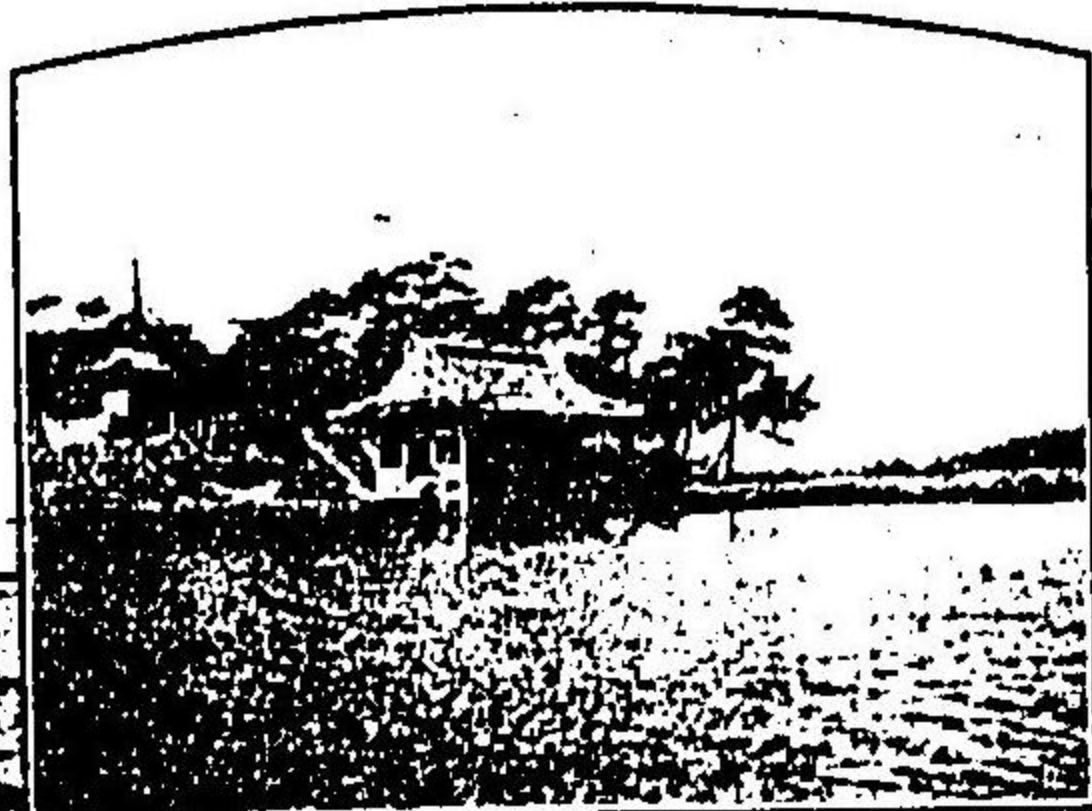
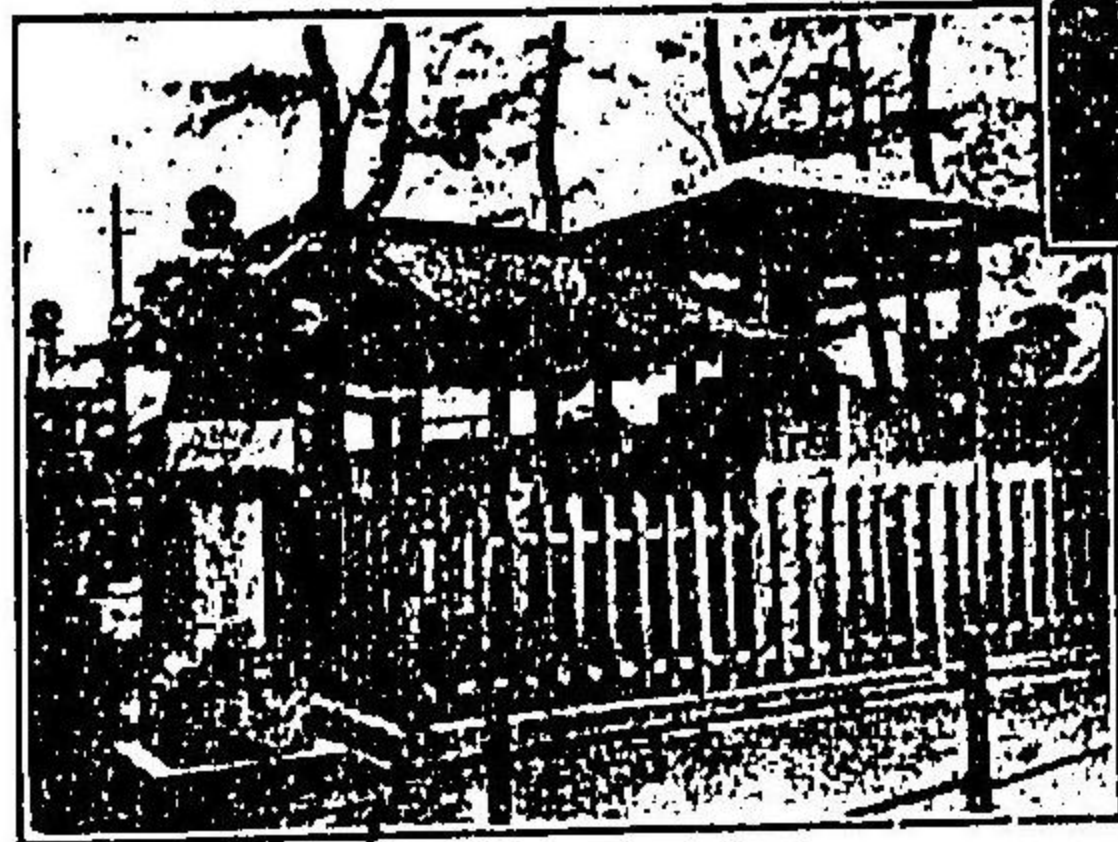
子ミミの二月

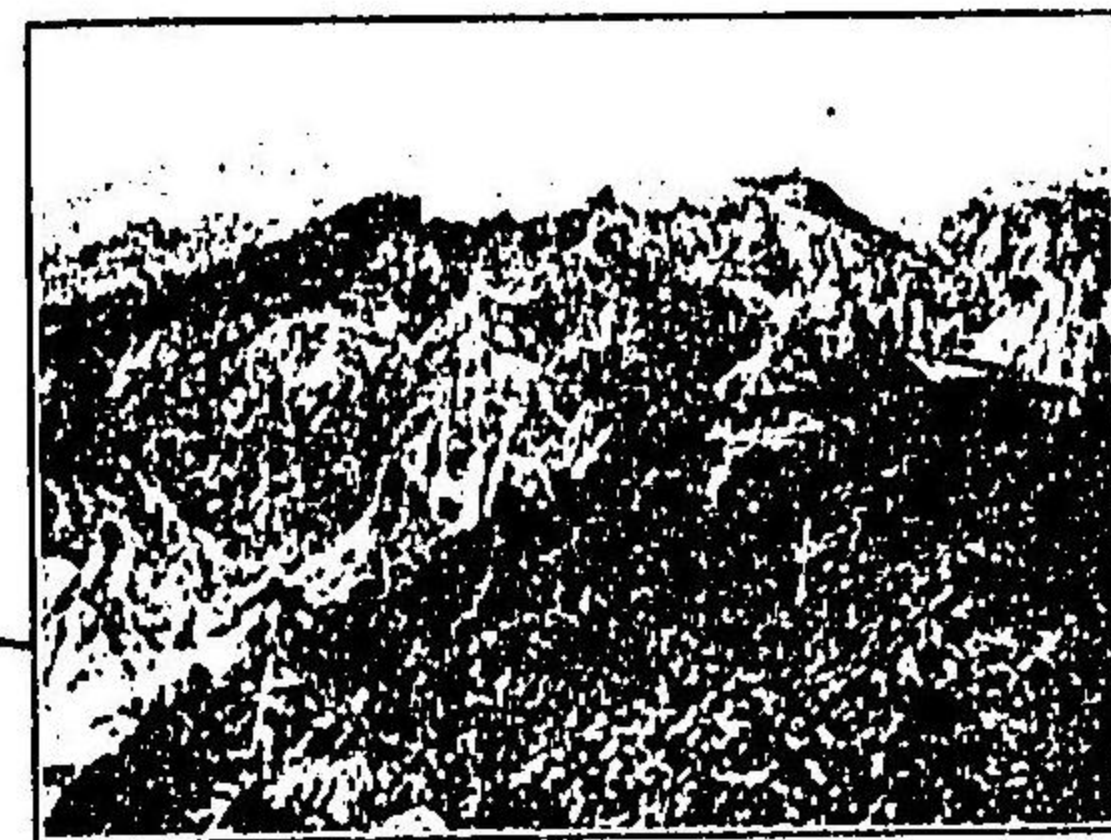
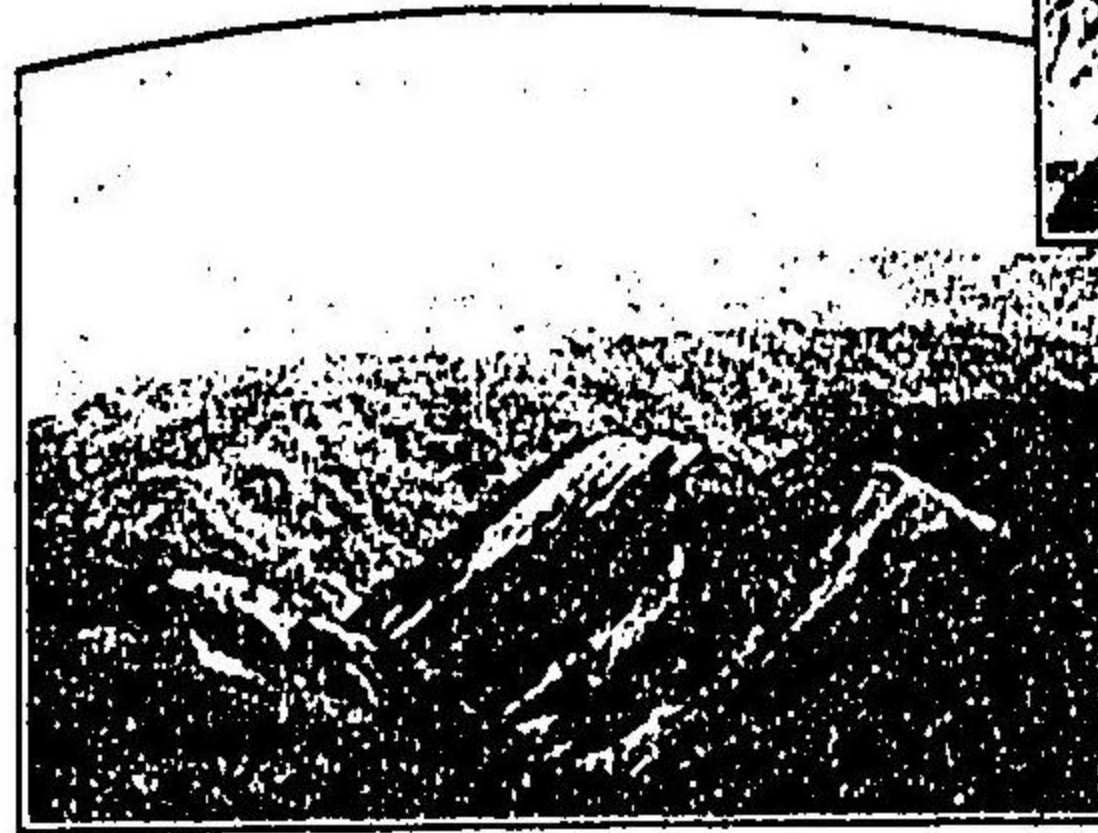
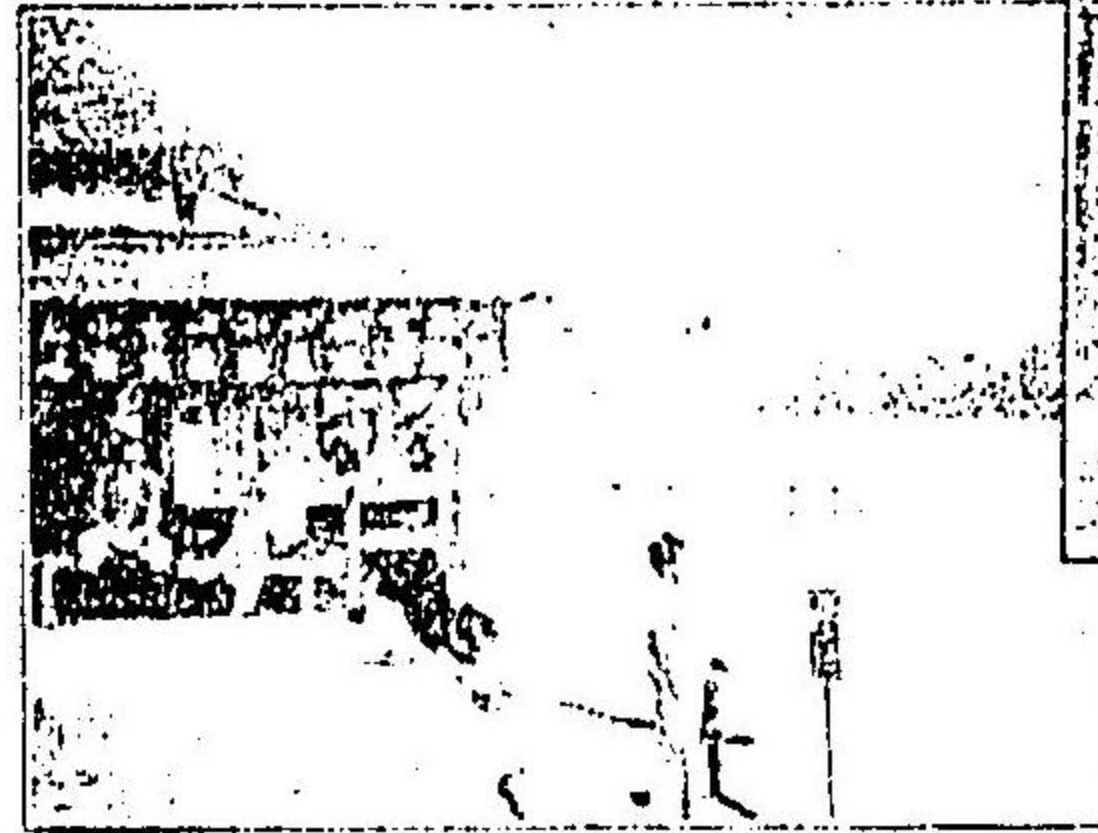
著者

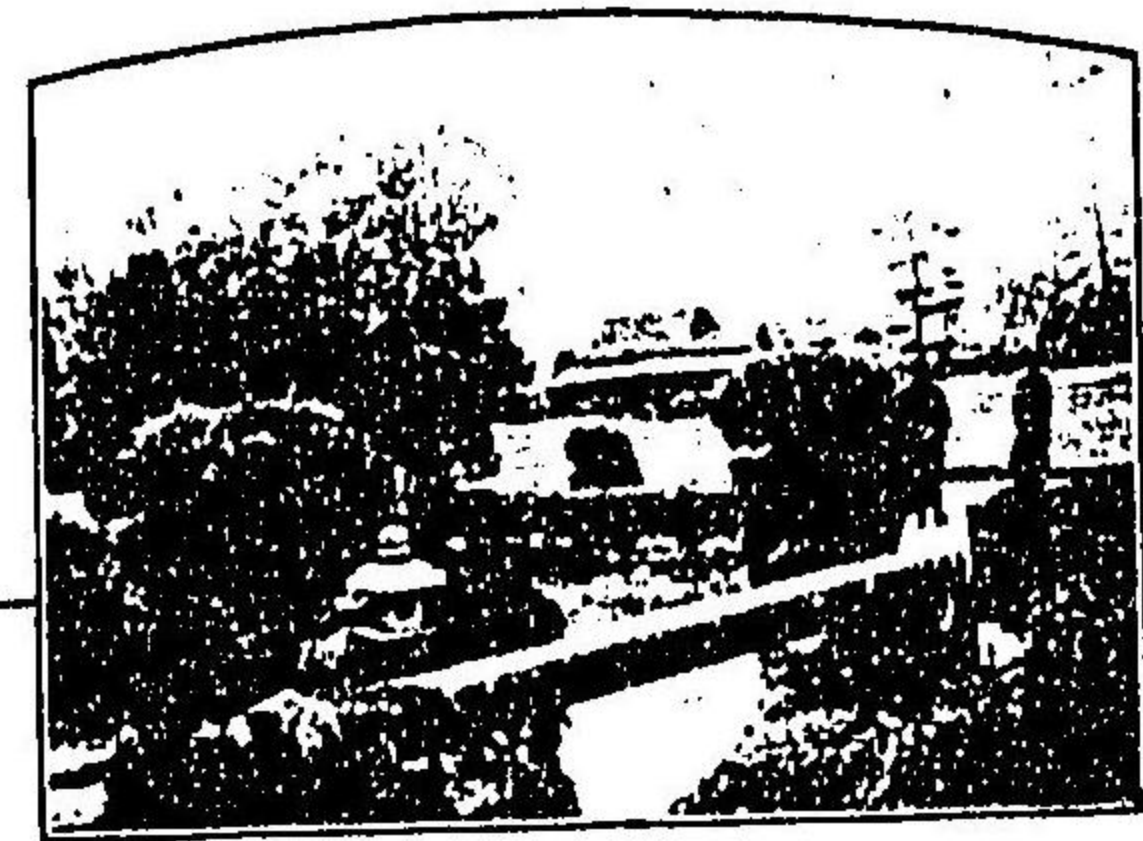
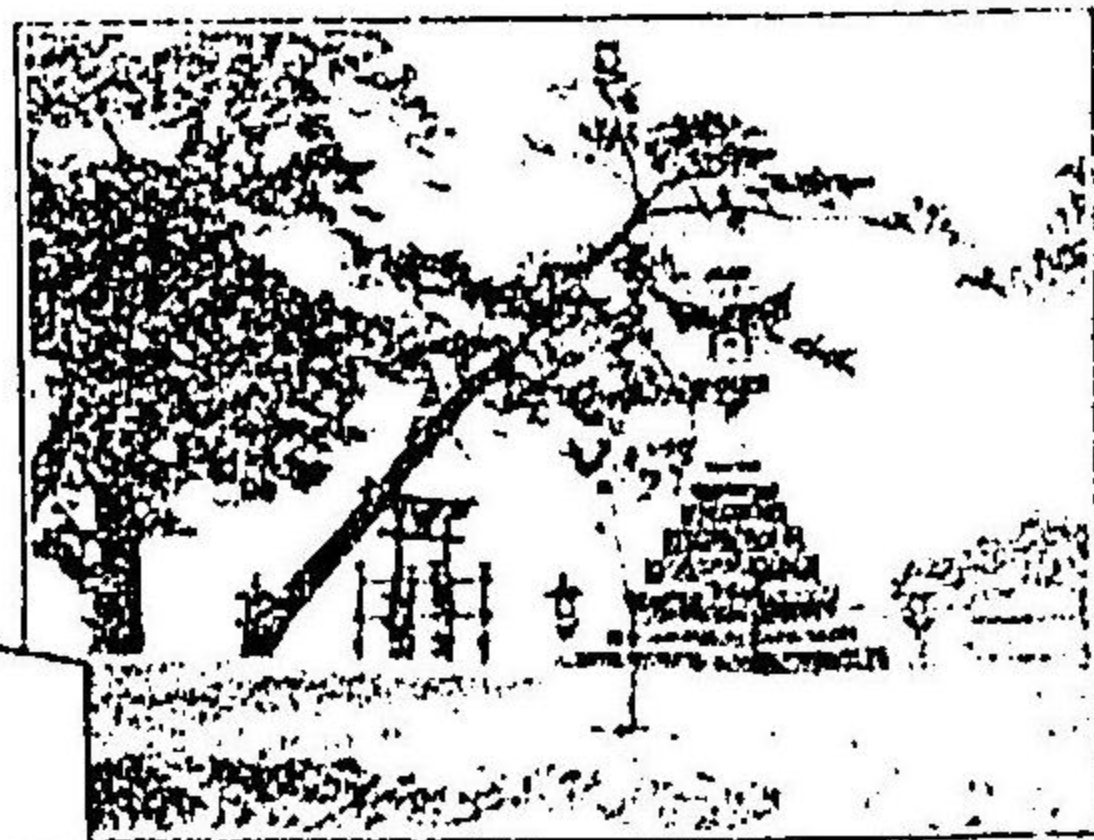
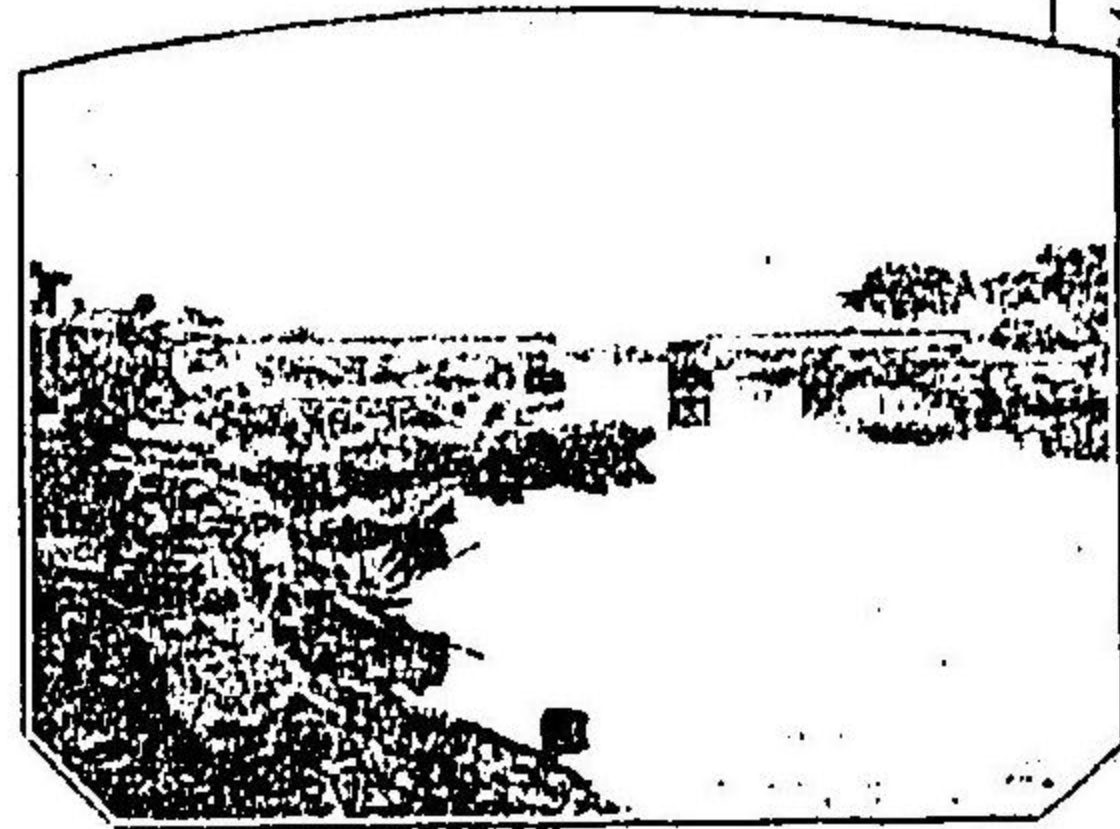
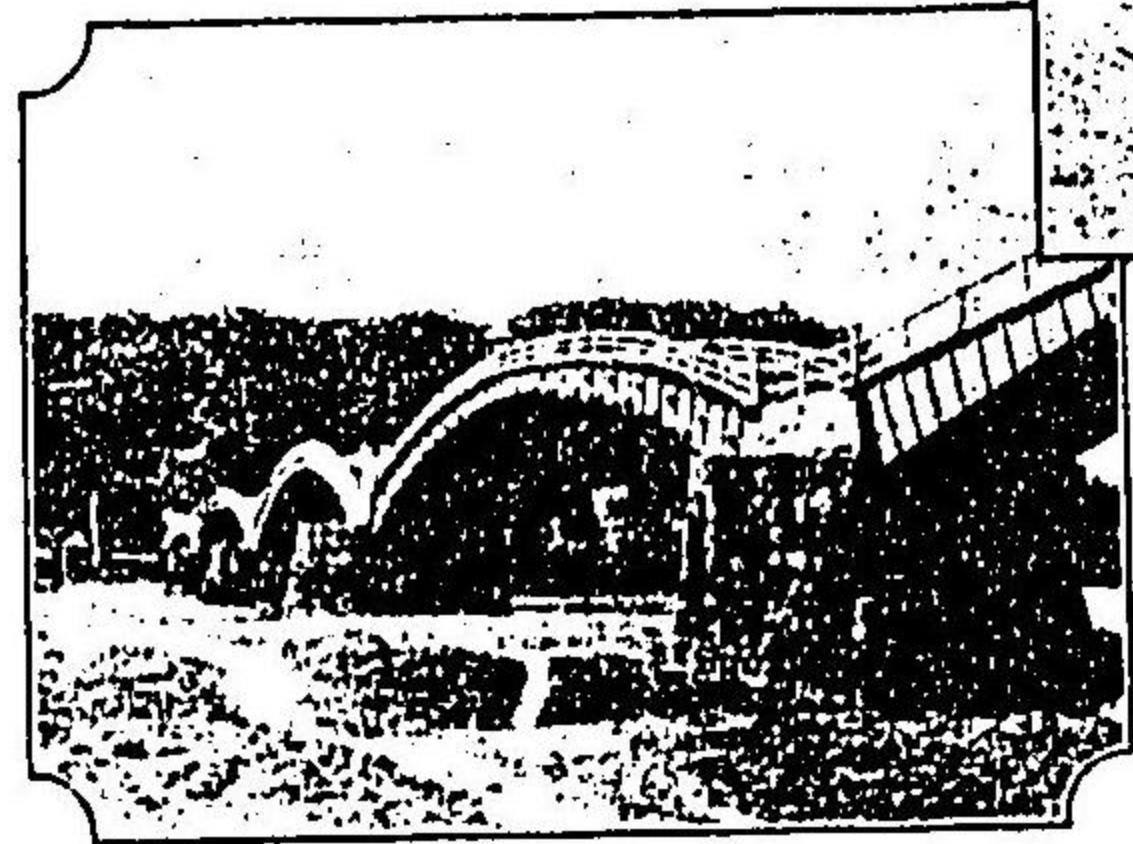


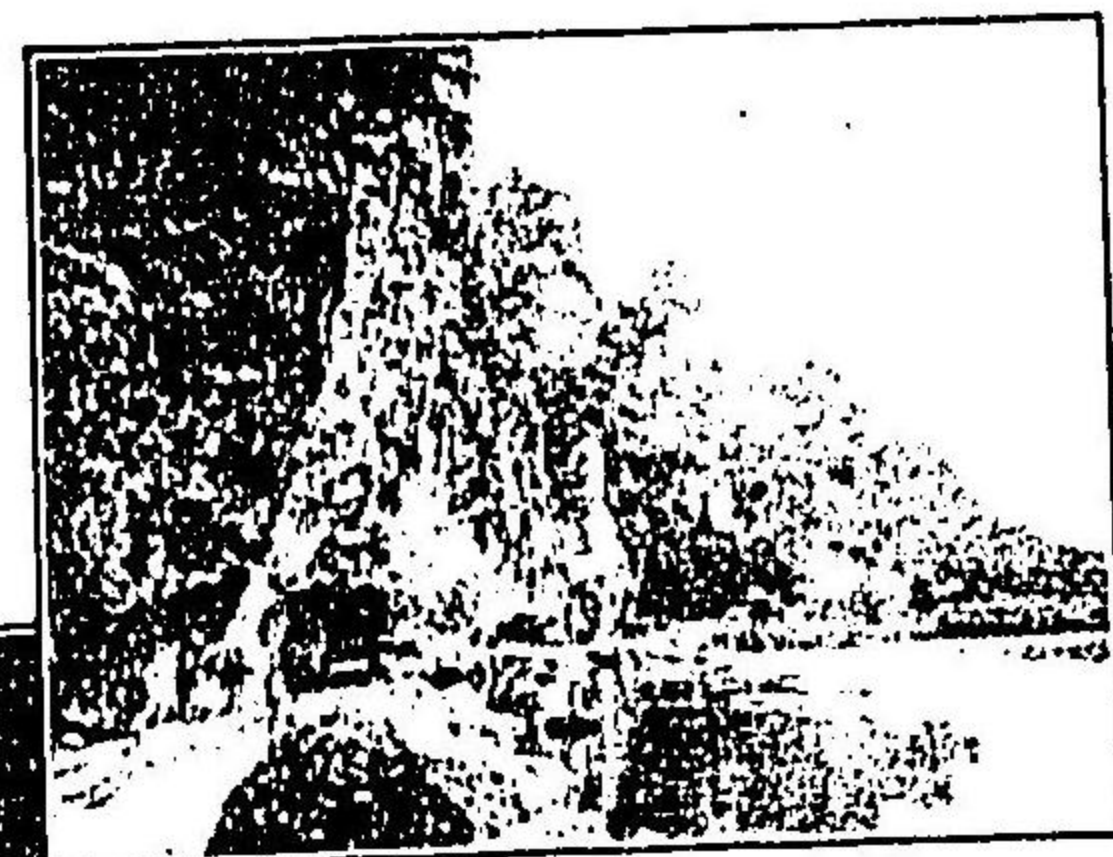
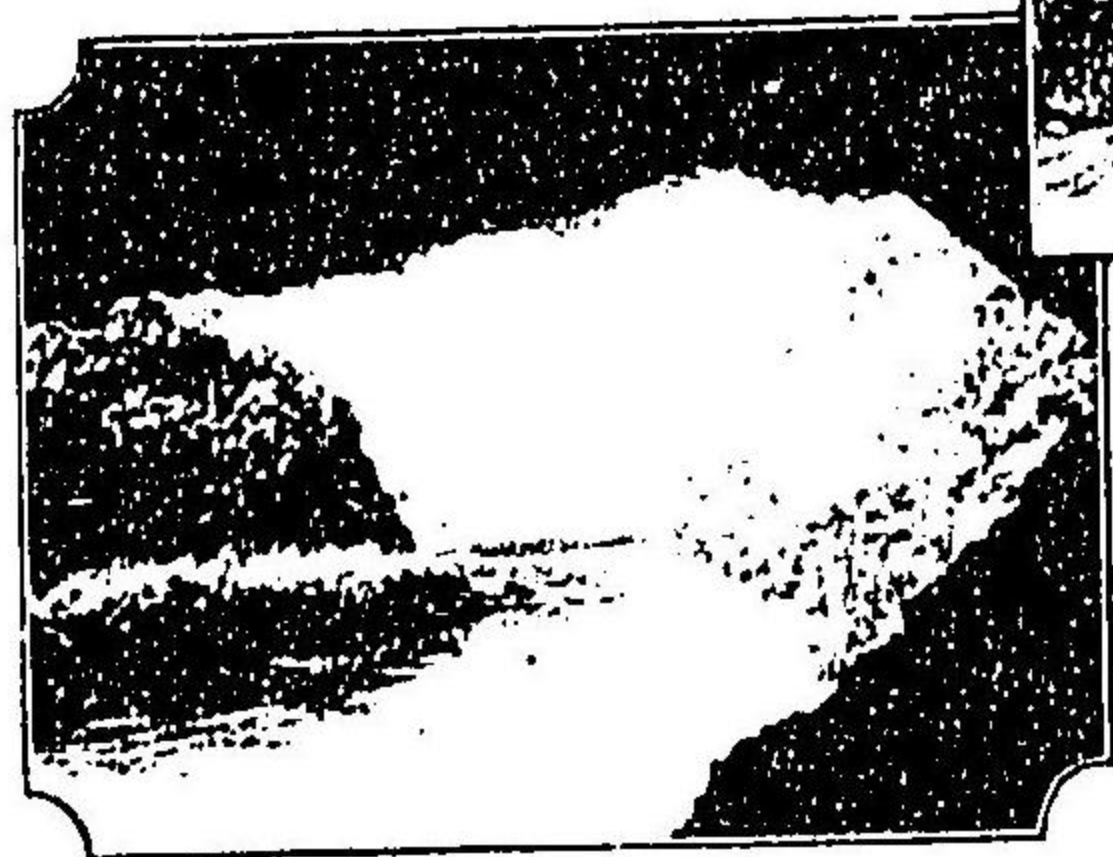
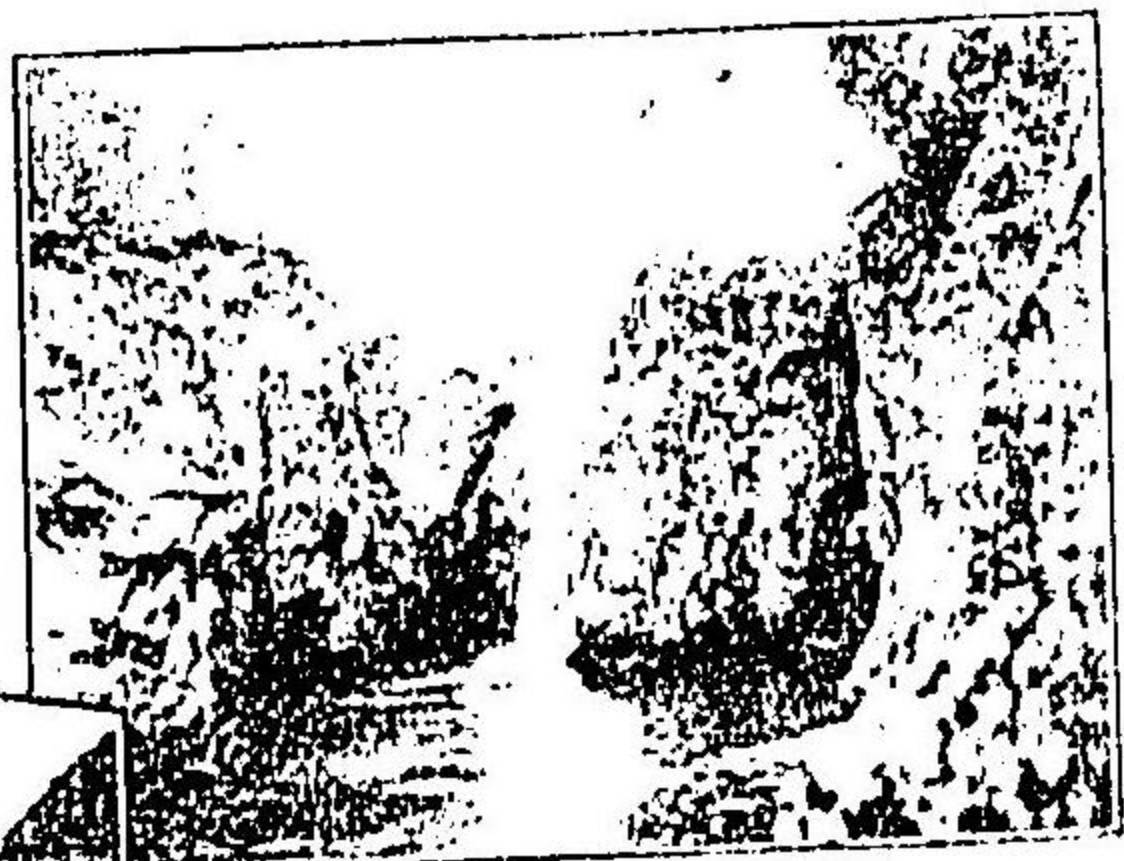






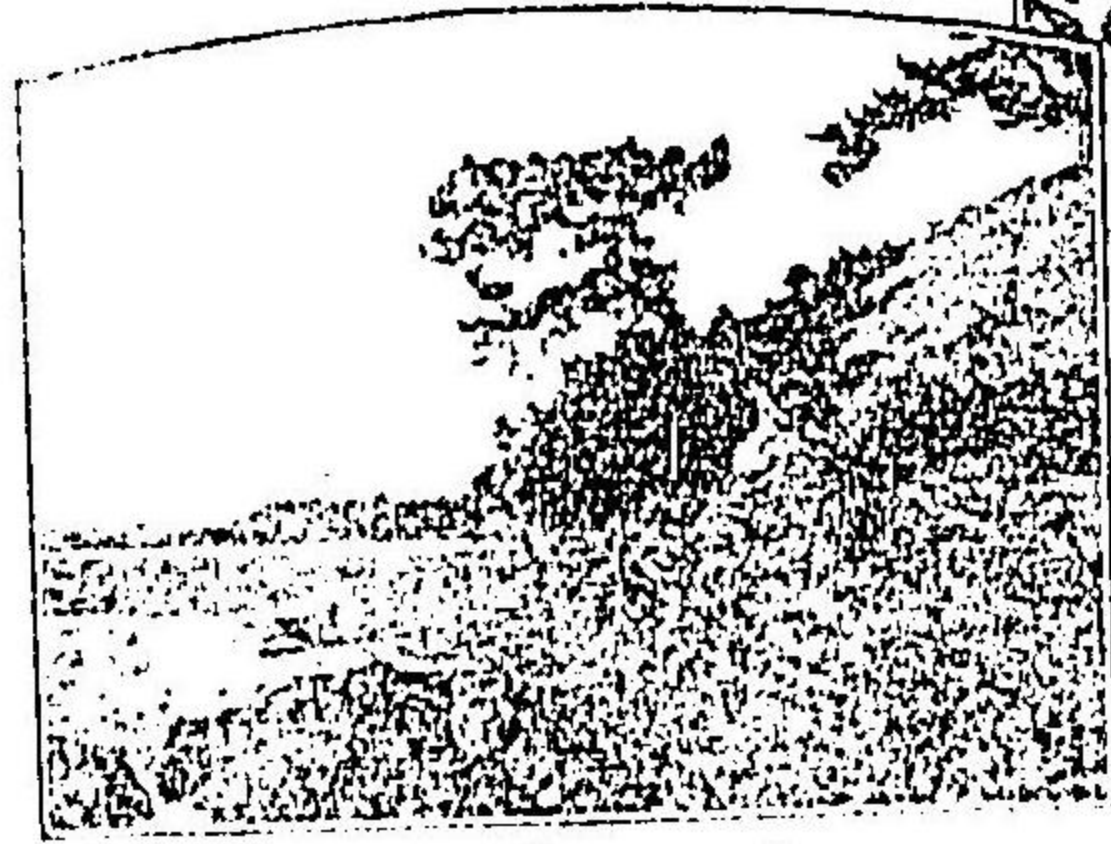






中港南莊院觀景

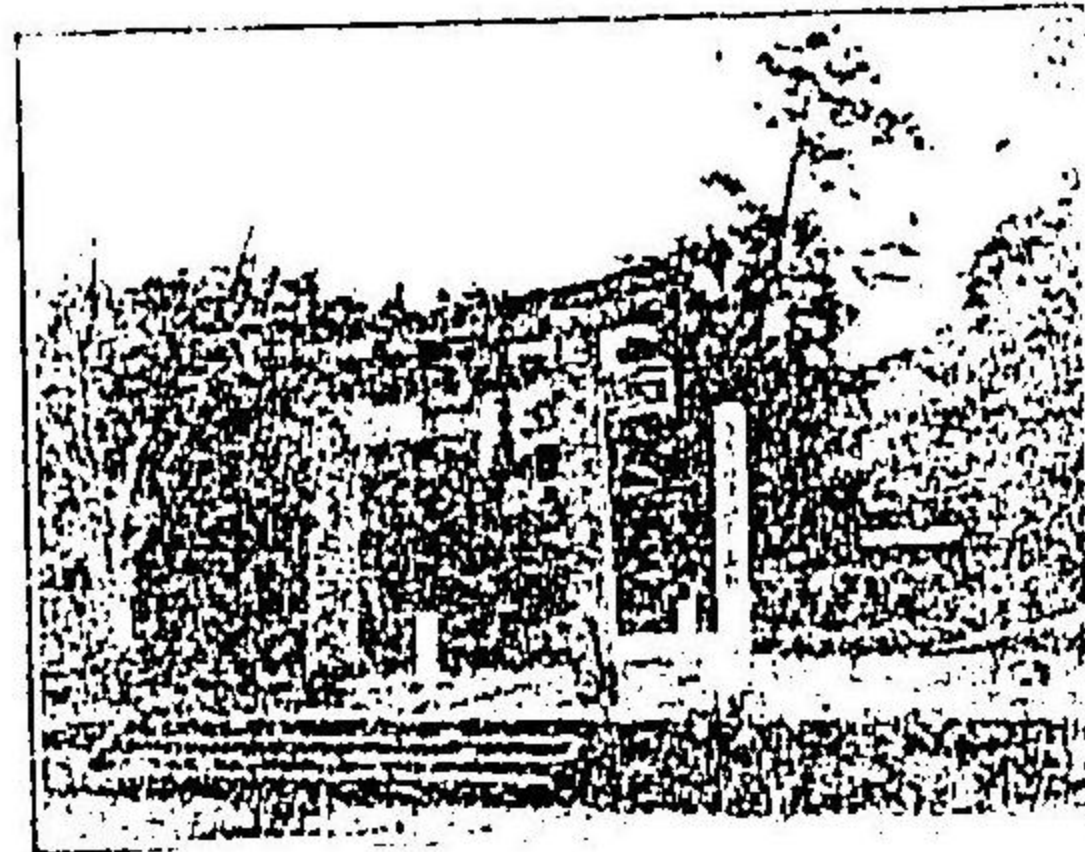
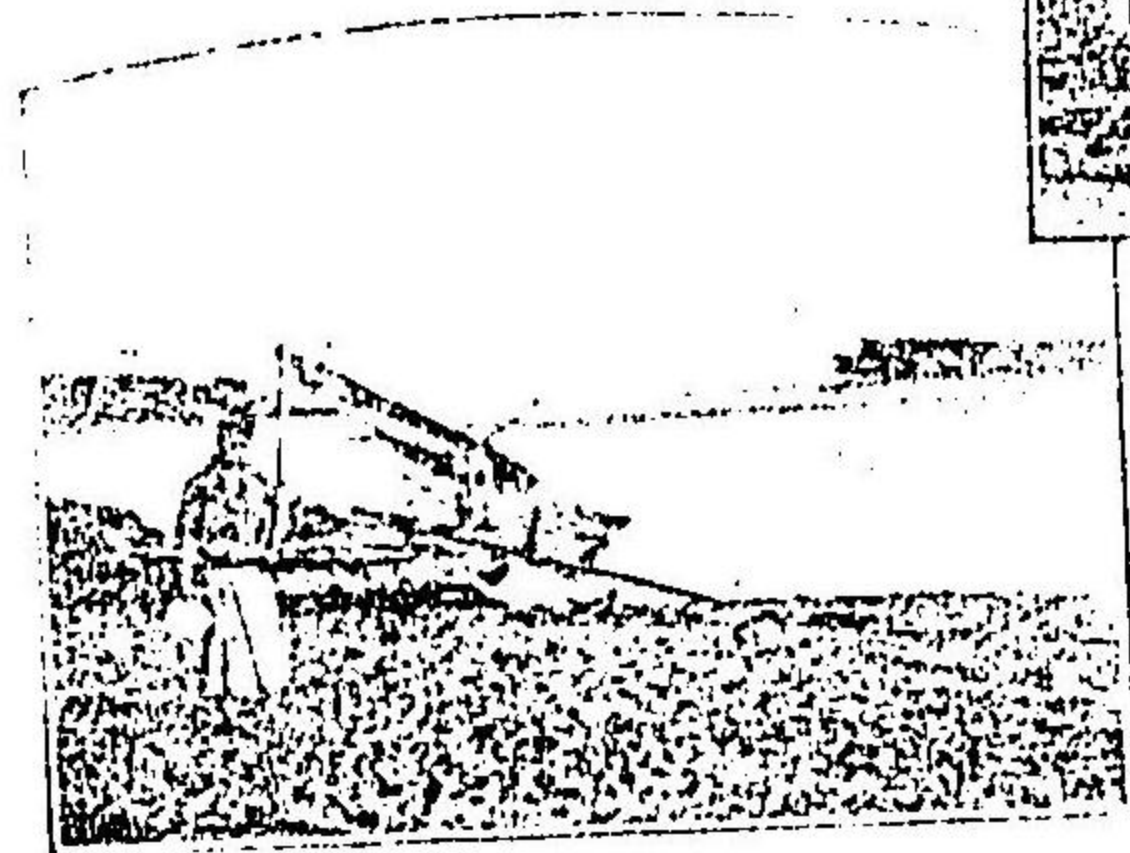
石且觀以島名



宮婦人孫字前夢

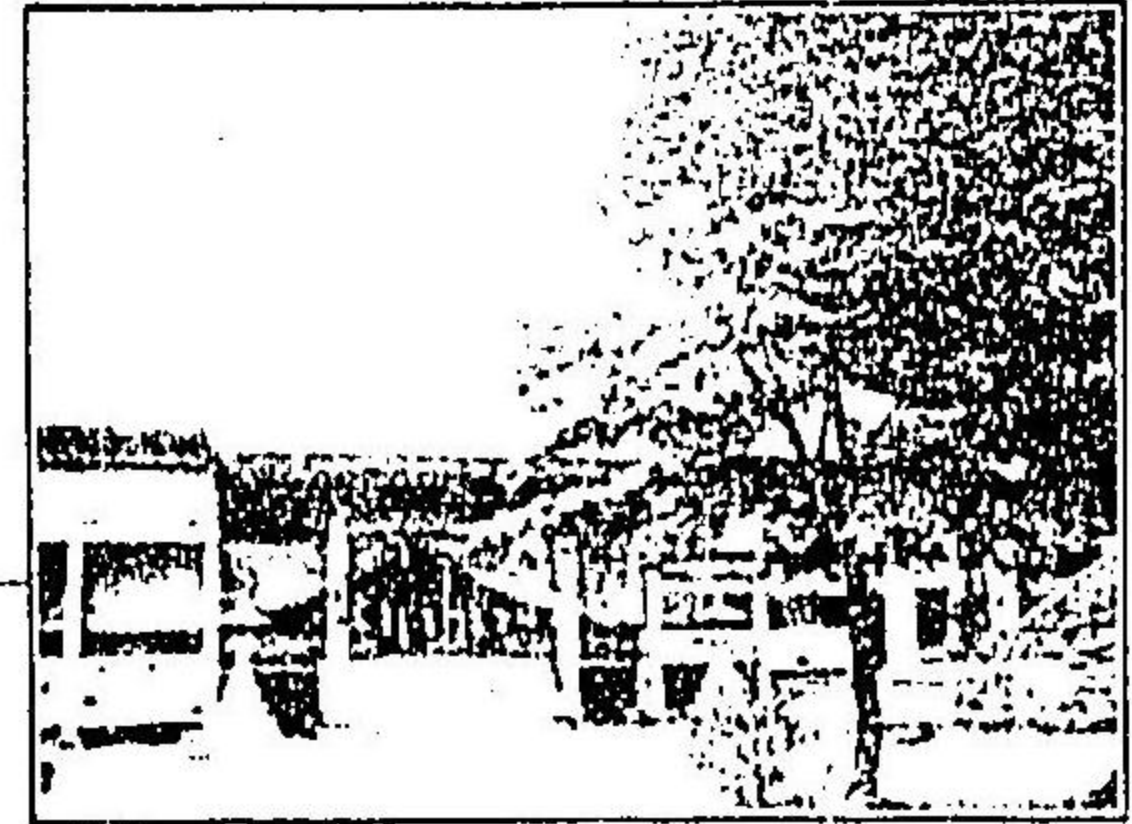
影祠三祖一人立木見

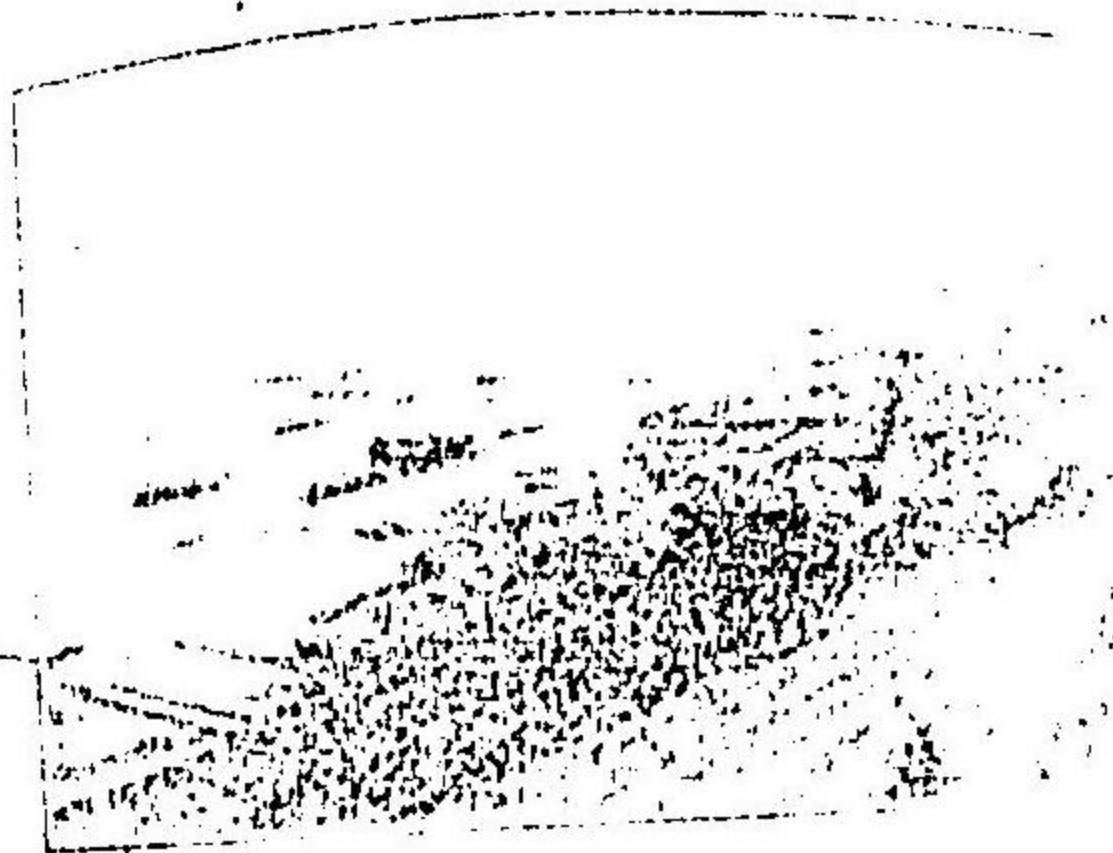
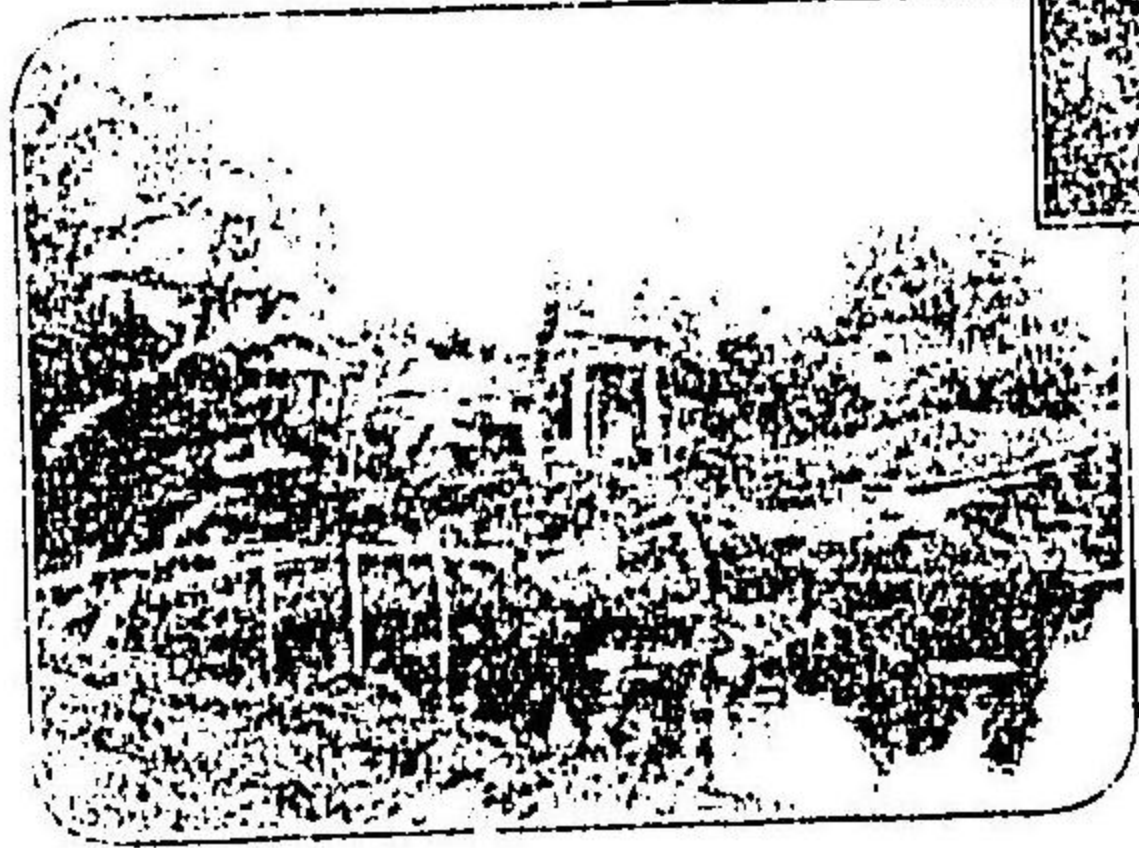
甲
白
虹
橋
長
橋
長
島
名

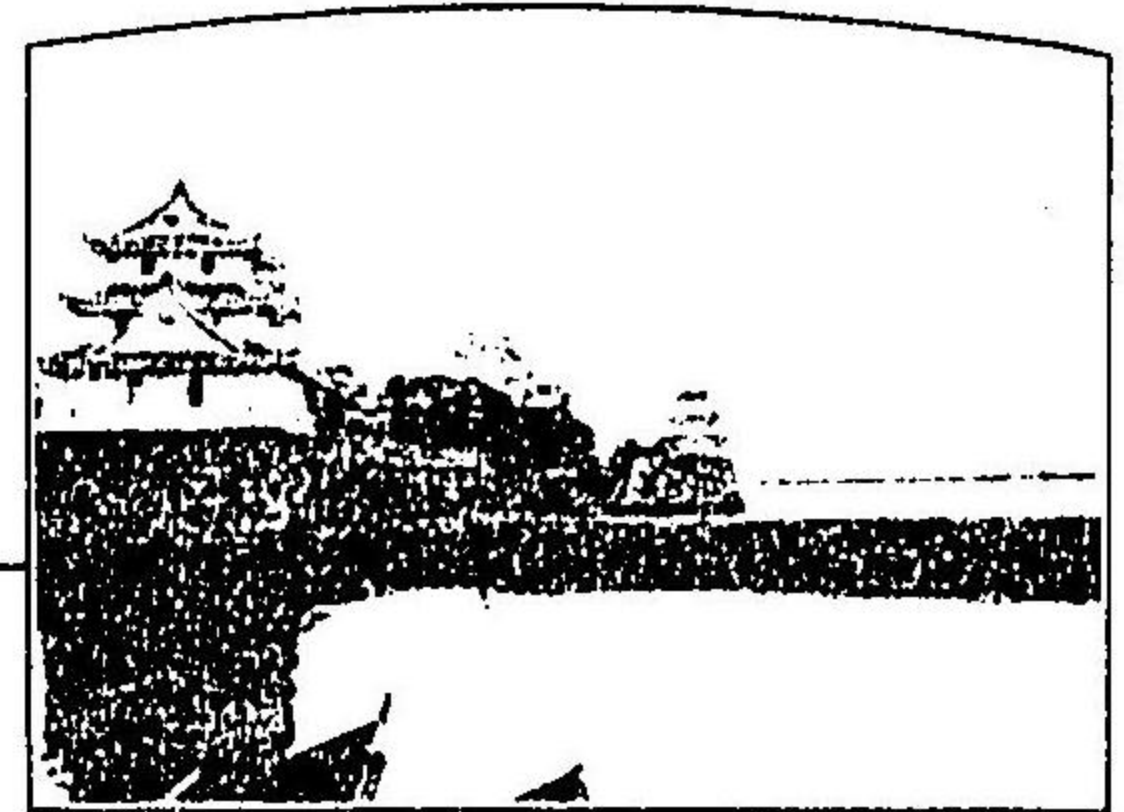
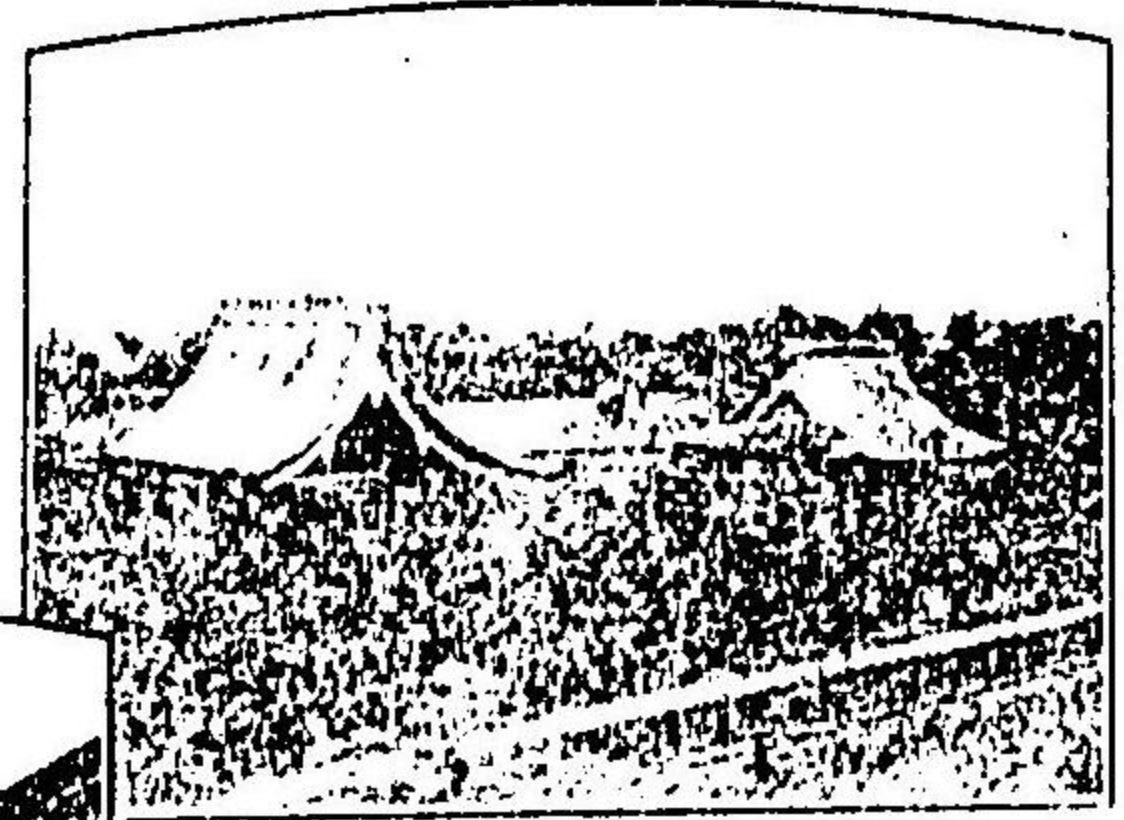
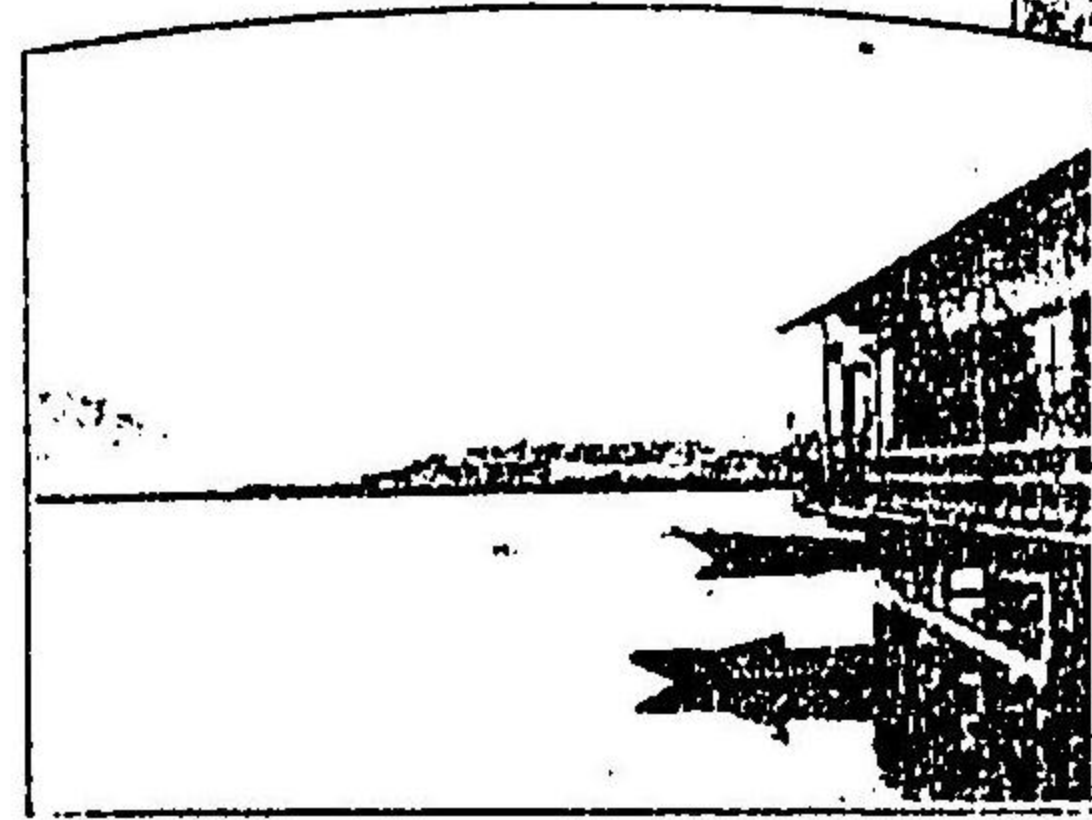
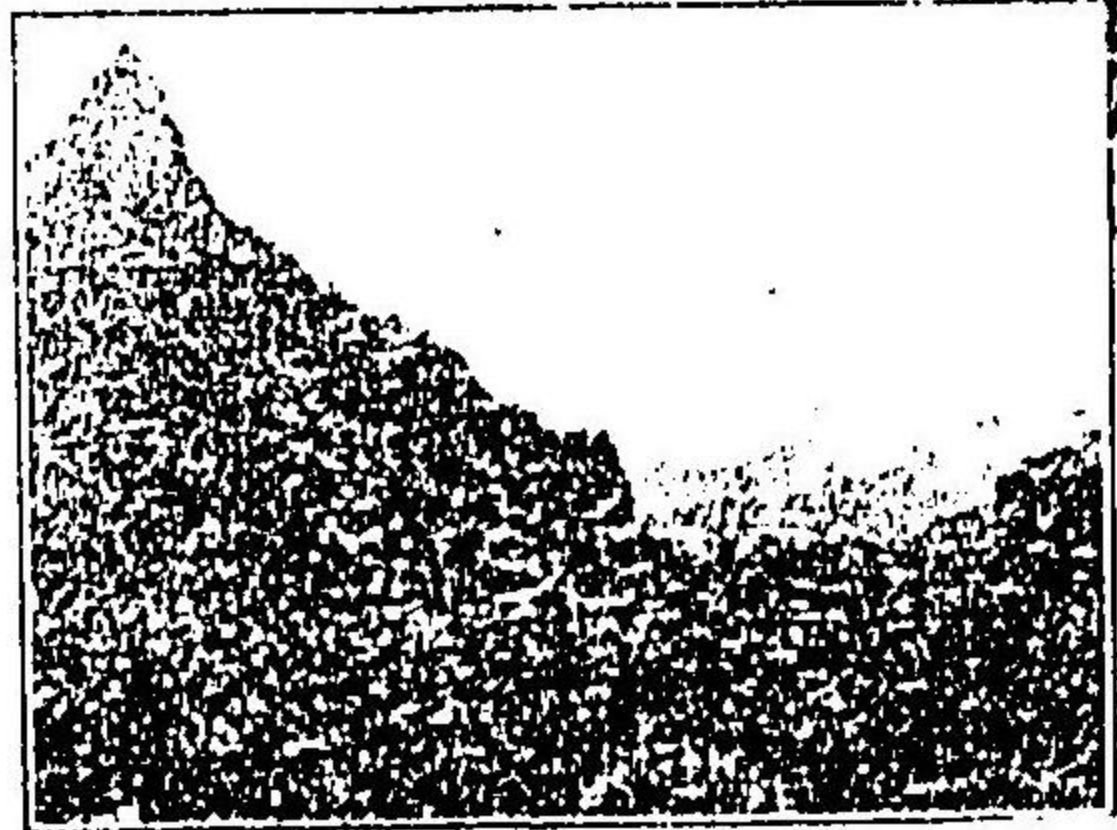
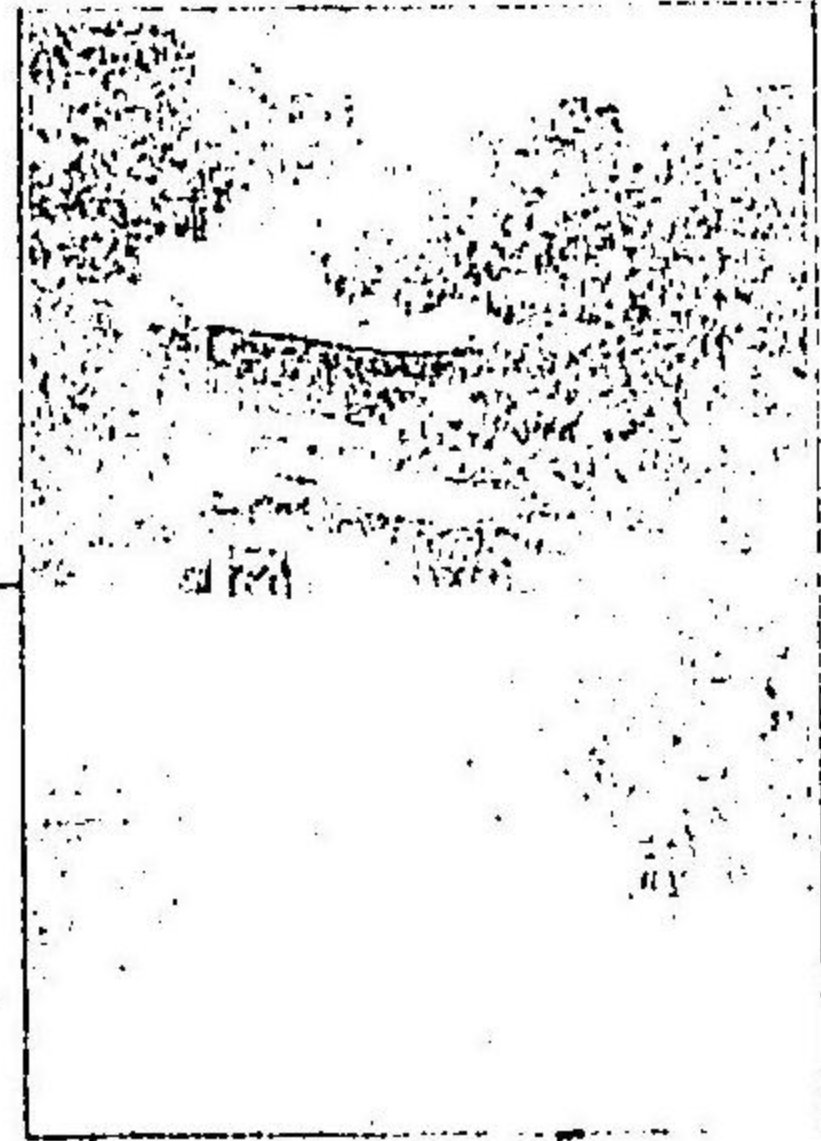


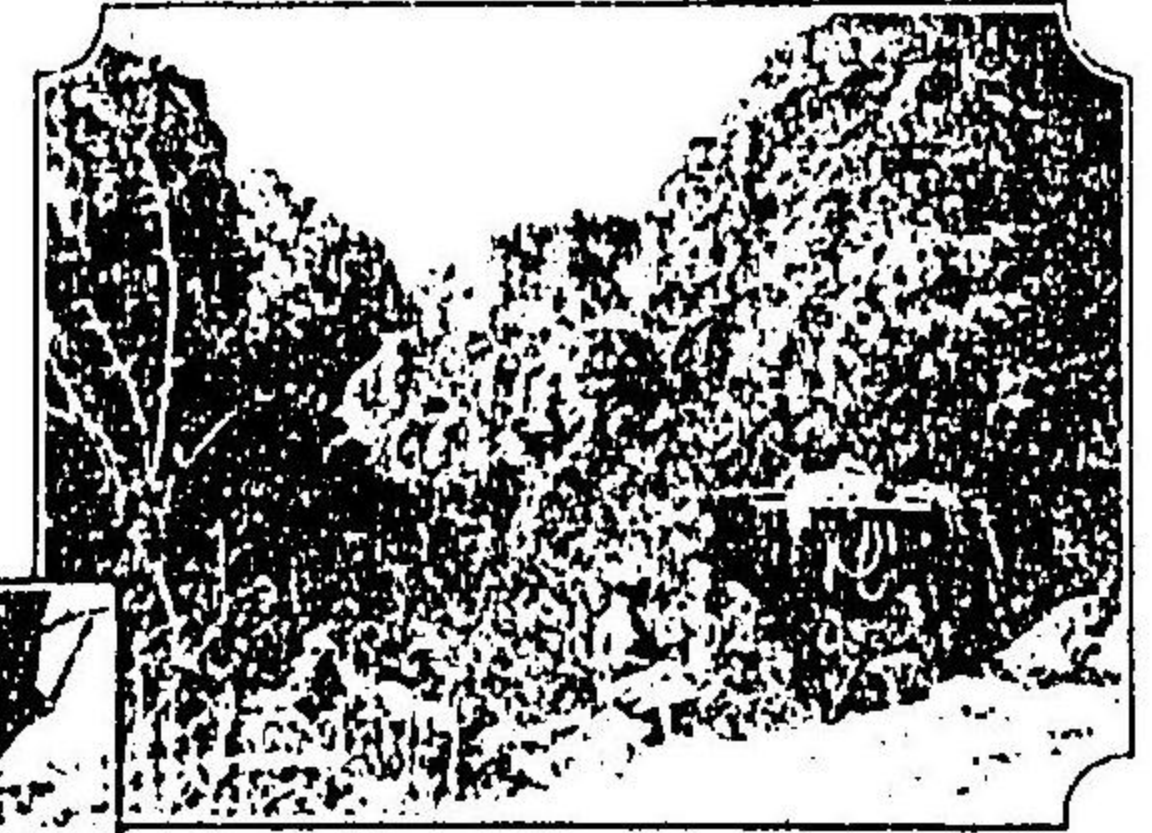
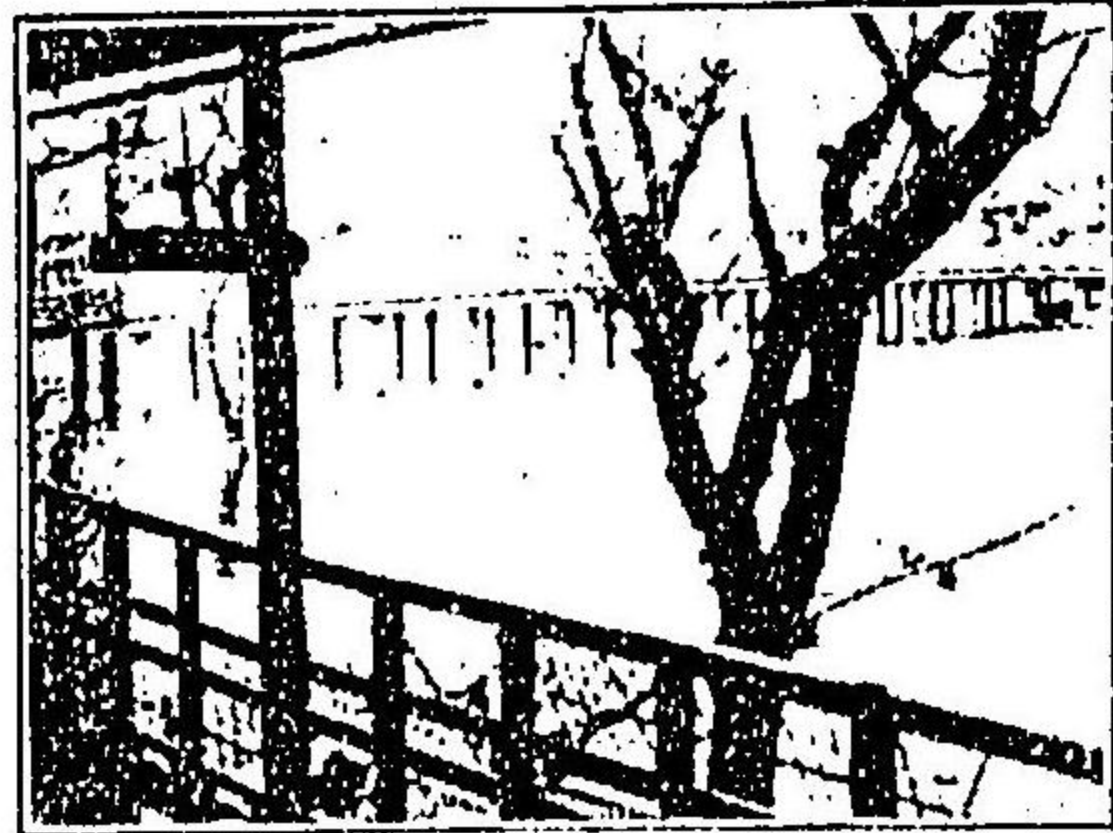
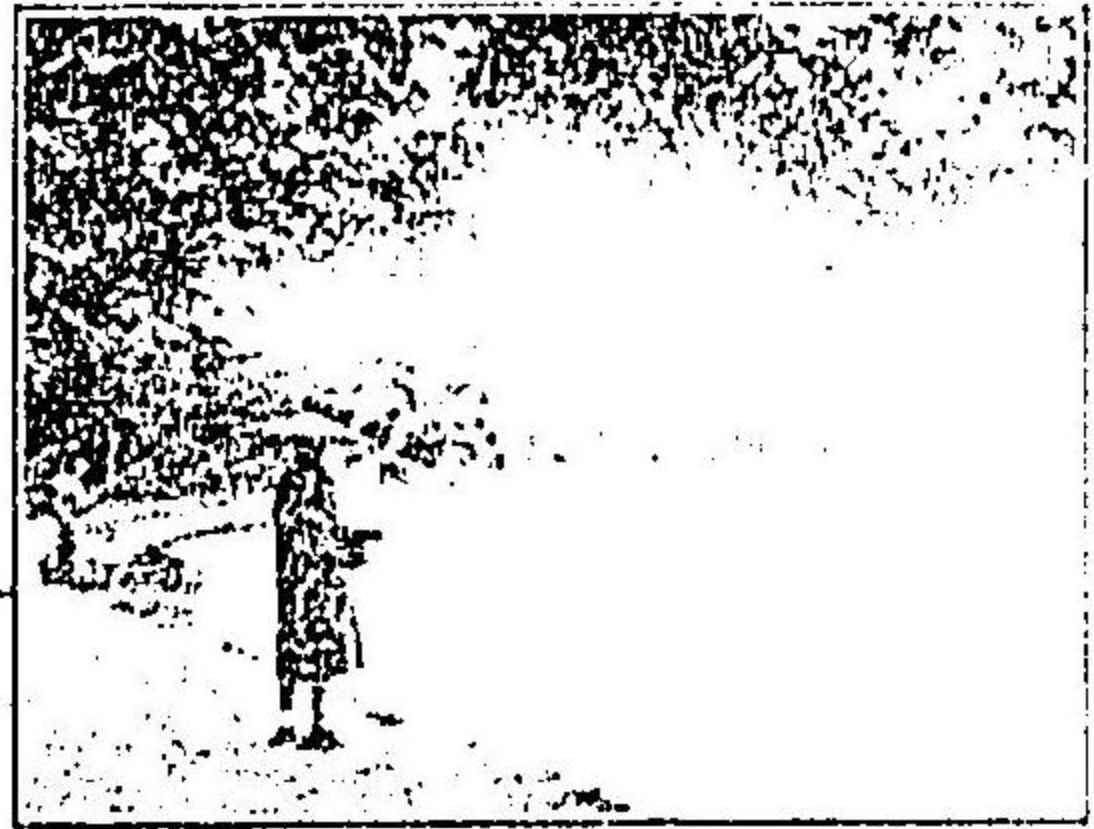
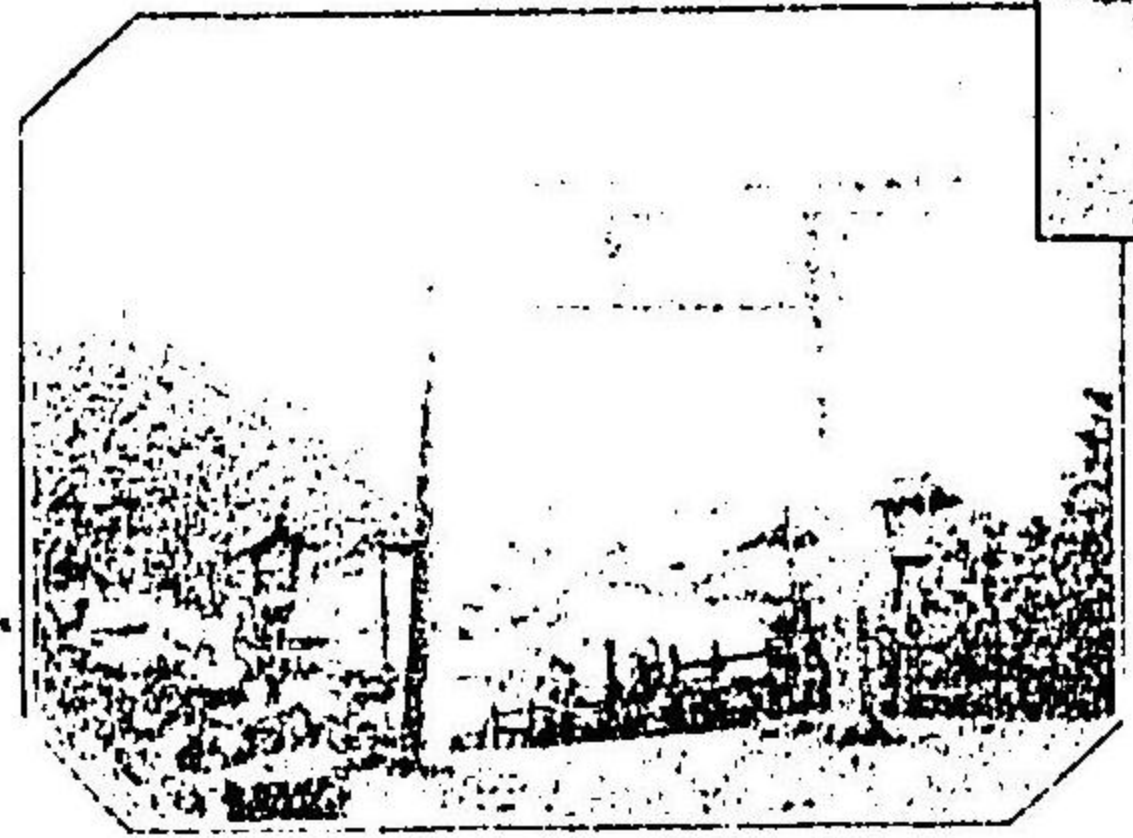
宮推香前奠

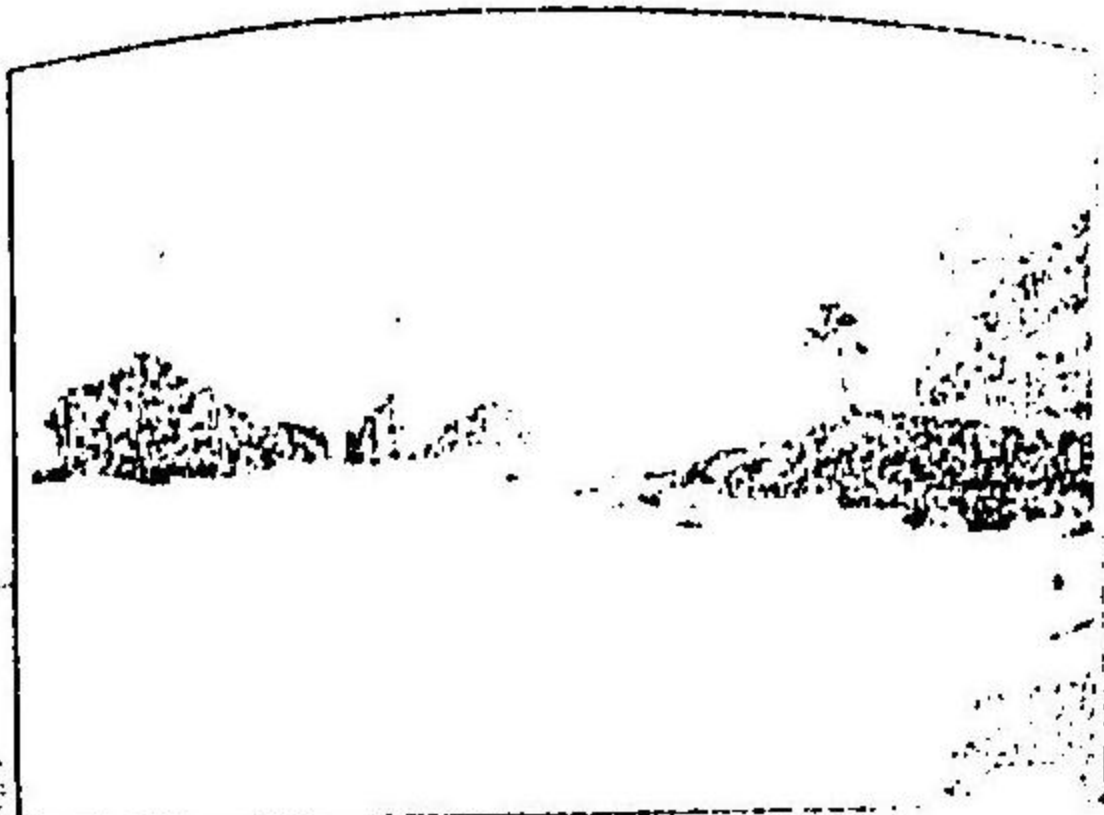
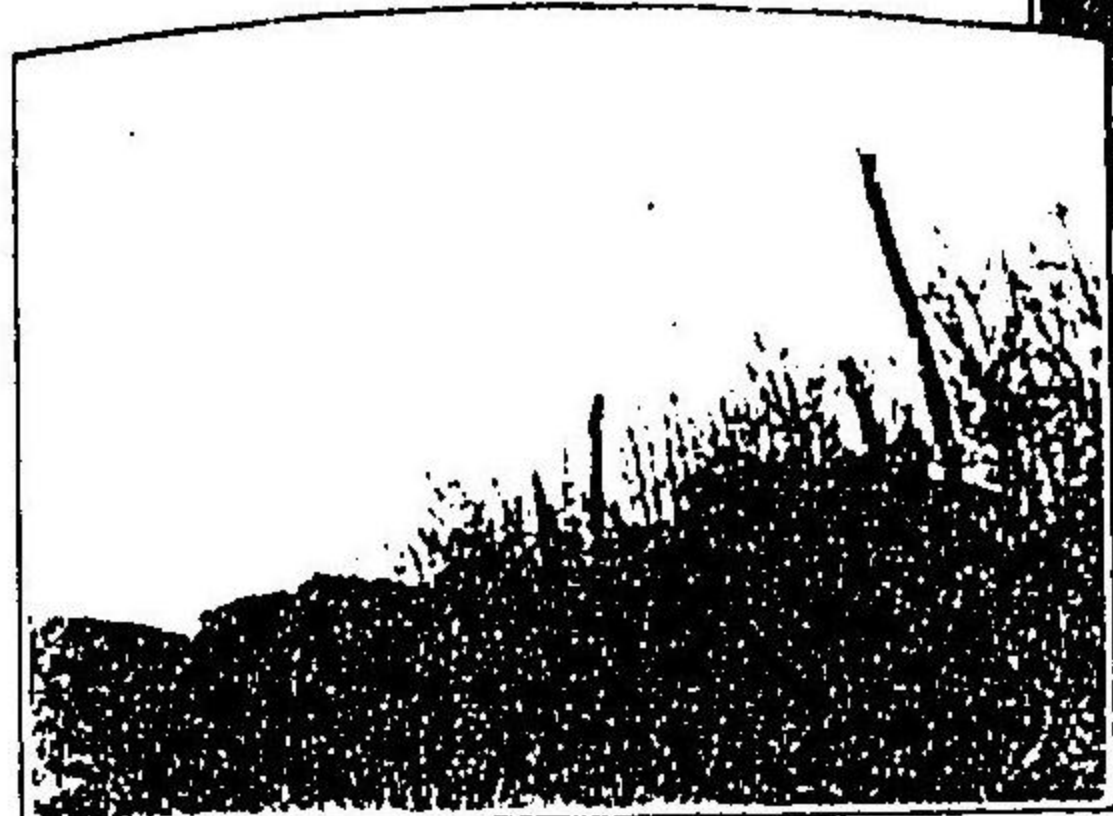
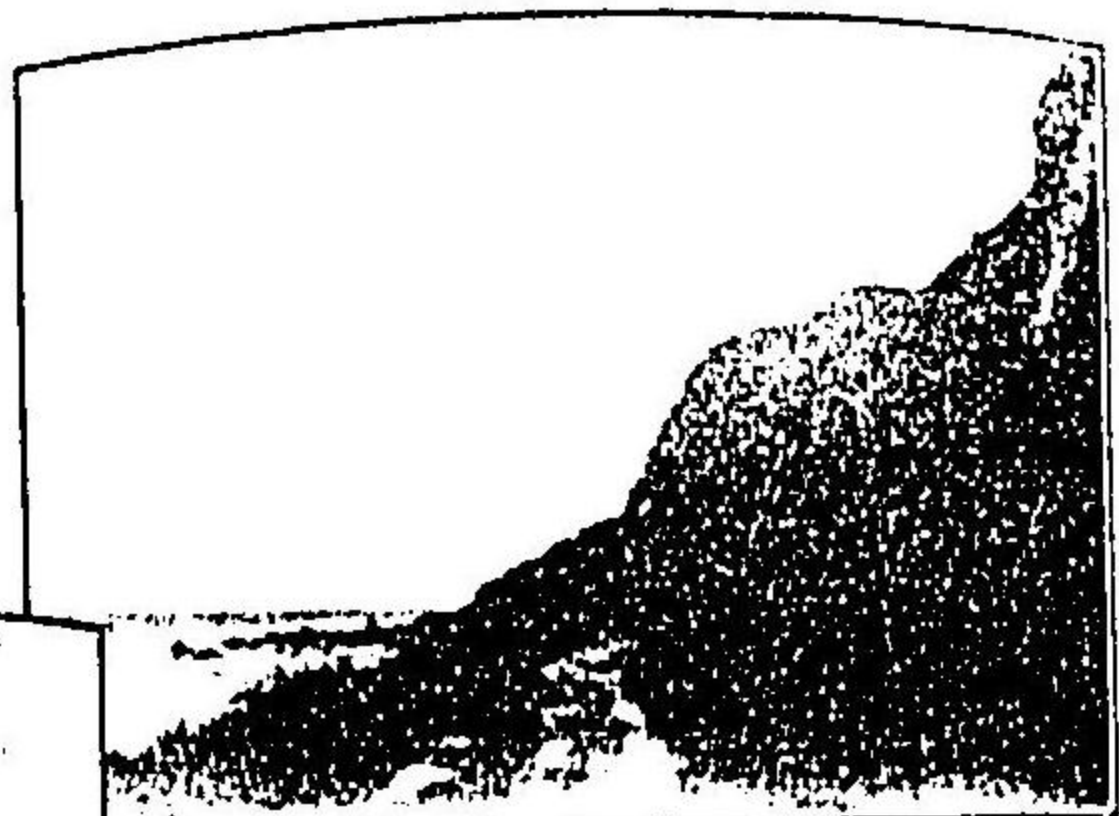
祠王族門宮見不

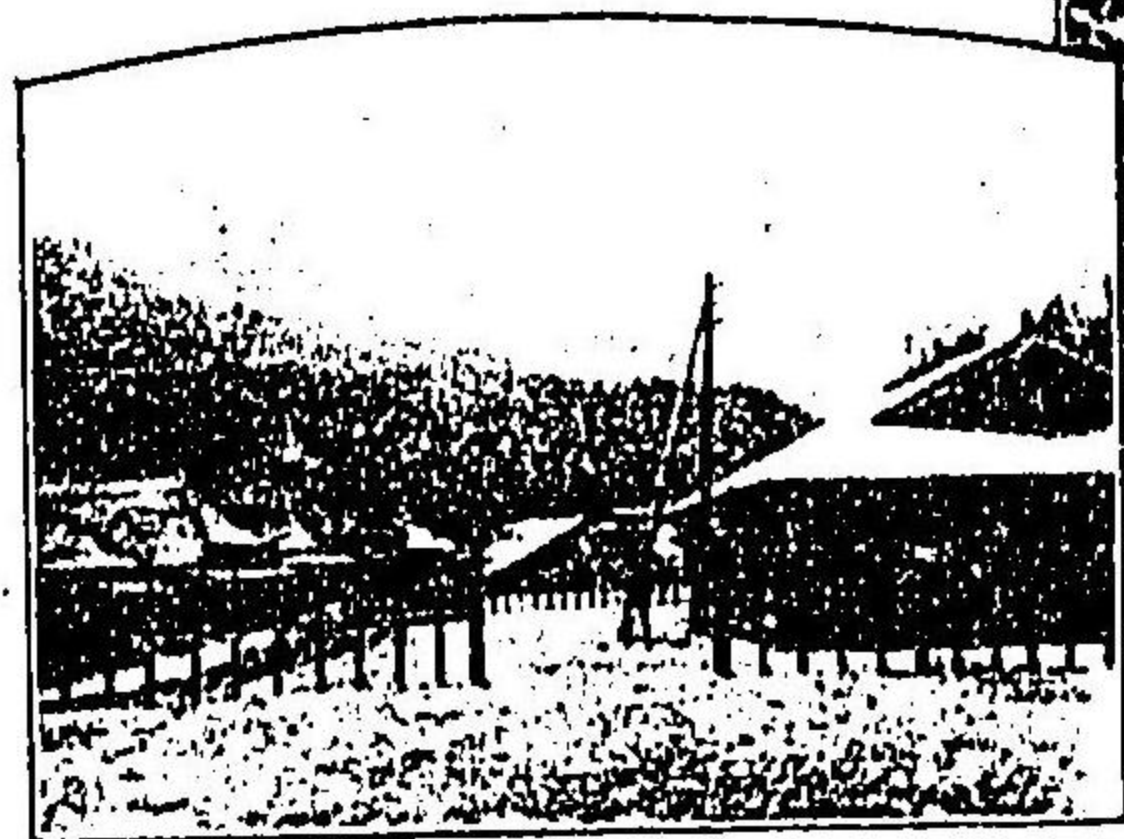
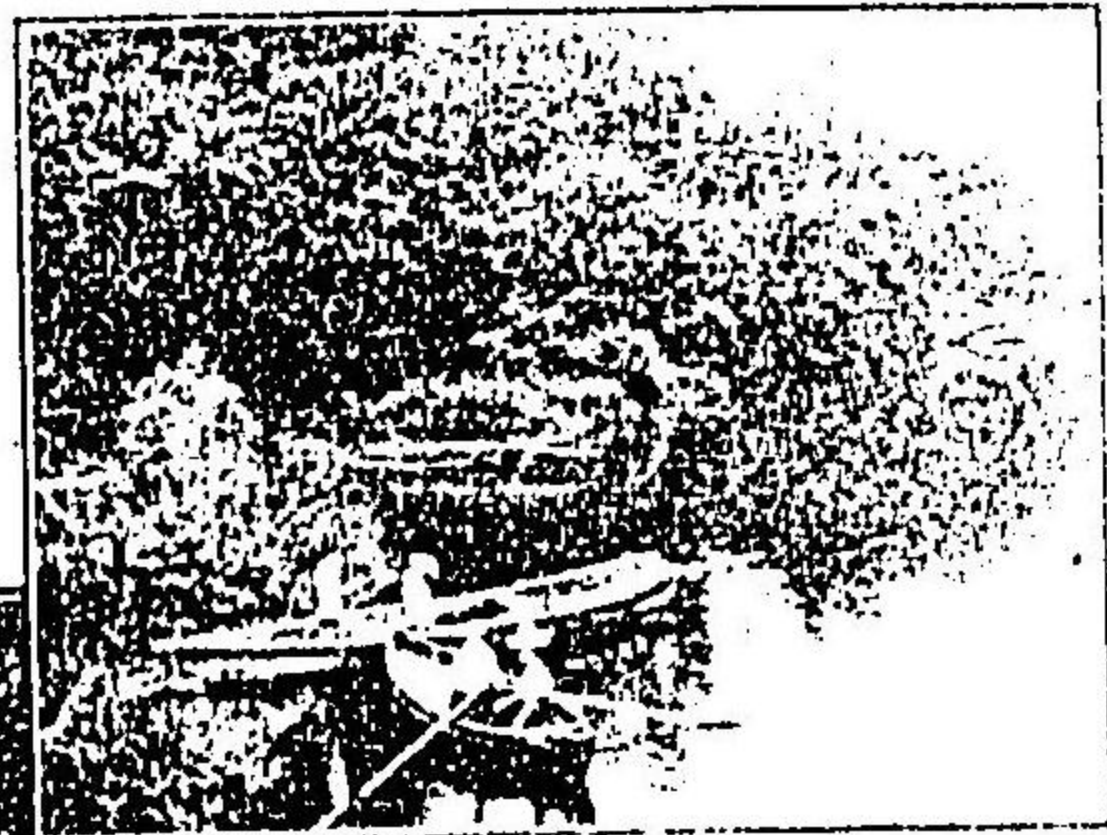


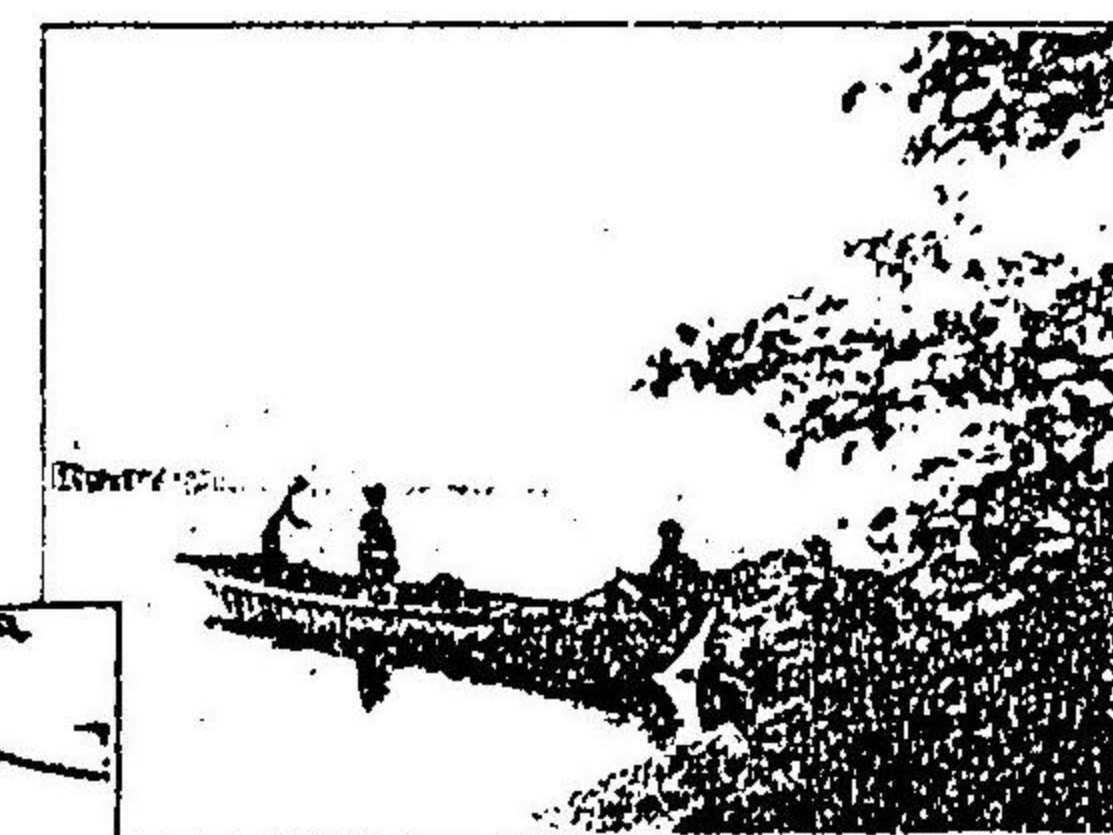
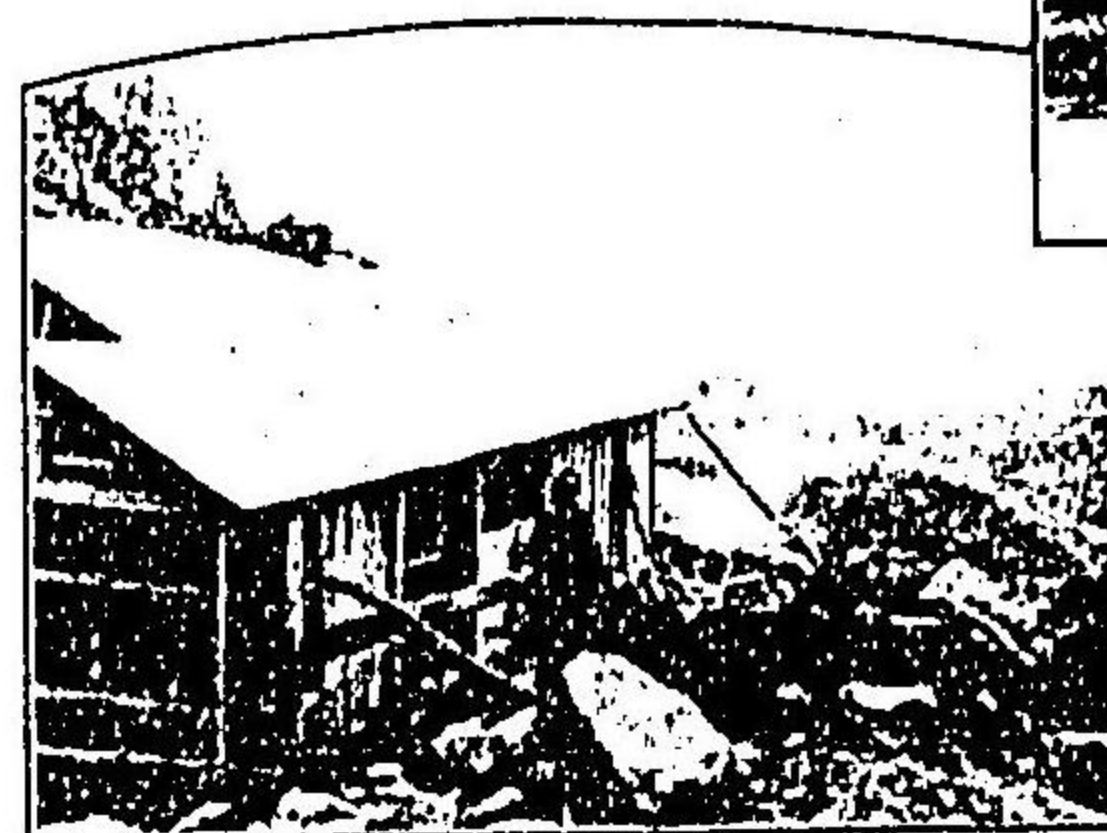


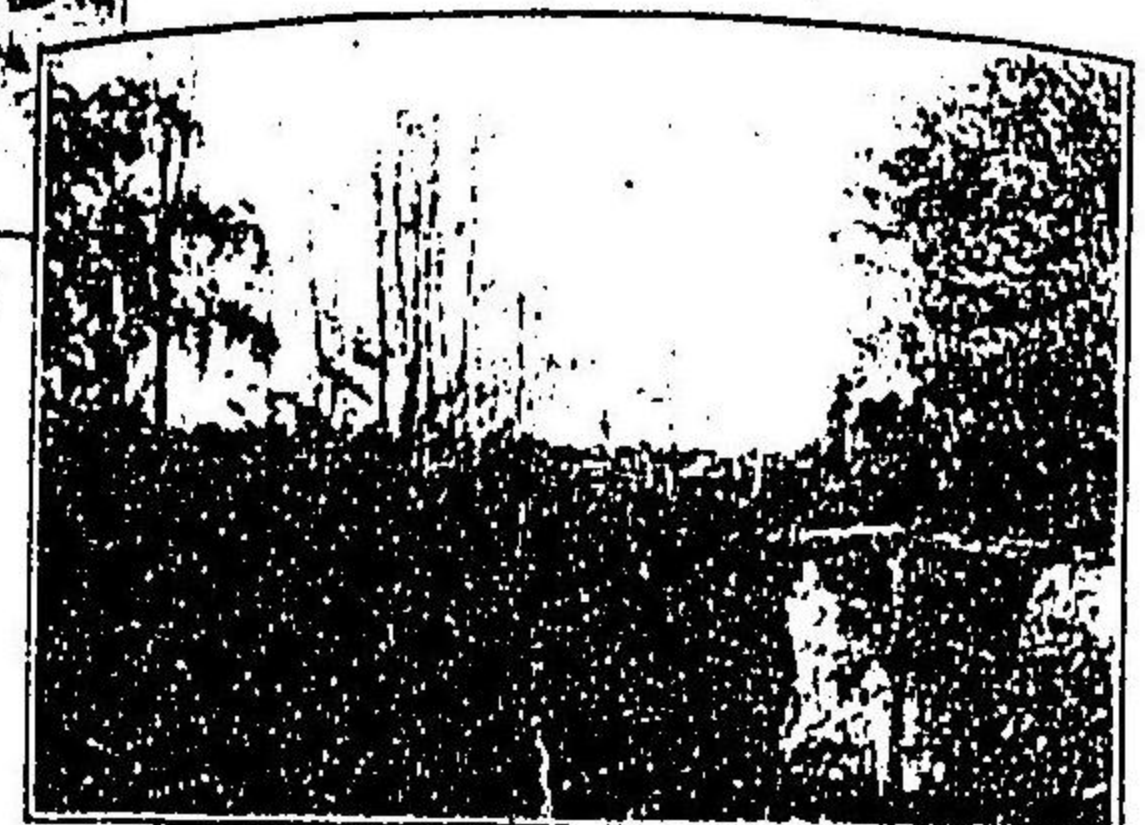
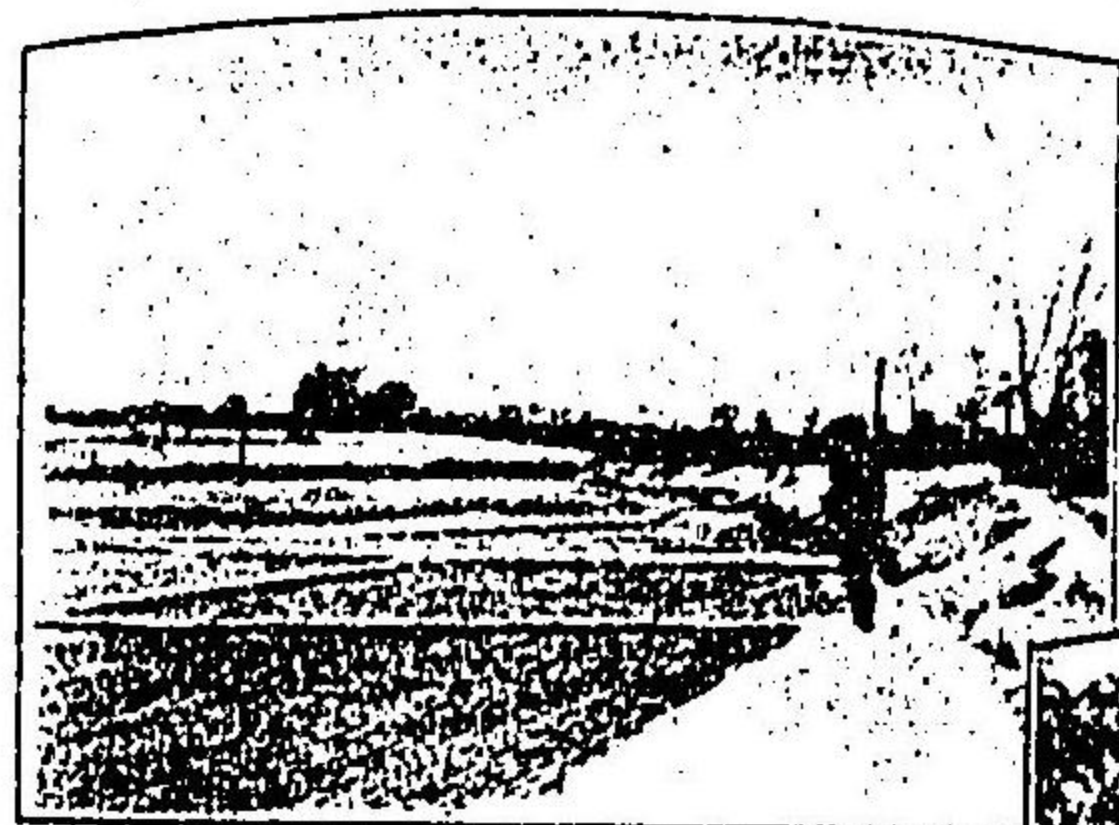












曉雲山莊
 曉雲山莊
 曉雲山莊

小
 曉雲山莊
 曉雲山莊
 曉雲山莊

欠

MISSISSING

榊公駒返石○奈良往復二十鐘○瓶の原○四
條暖驛○そのホテル○月明古戦場○小楠公
の墳墓○野崎の観音○お染久松と久作の家
○網島の停車場

水の難波！……………八五

心中本でお馴染み○大坂城と京橋○備後町の
才人○中の島○ピヤホールは朝日が開山○
豊國神社○橋と水の都○船遊山○高津の宮
祭日○花火は日本一○生洲の料理屋○洗湯
の栢榴口○屋上の納涼

阪鶴名所……………九四

西成鐵道○安治川口○池田伊丹の酒○中山
の觀世音○寶塚の鑛泉○洋人と平野水○分
銅屋○書生的大氣燭

地獄の劔山……………九八

有馬街道○生瀨鐵泉○六甲山鳴助の影響○

地獄變相の生の物○湯女の名所○松井

有馬の温泉……………一〇一

兵衛は北の坊○また地震か○大湯と湯女○
八百松の女將○海拔千五百五十五尺○温泉の
來歴○有馬名所○駕籠で下る

六甲山頂……………一〇八

六甲越○水陸の石○森安の茶店○竹取の翁
とその愛娘○狸の土産物○罰金五十錢○住
吉在の戎大黒岩○住吉社○神戸光村家

又の逢坂……………一一四

また大阪○道頓堀○丹前○舞子風俗○浪花
座○夜の景色○化物屋敷○千日前

住吉の浦……………一二九

難波は南海鐵道○天下茶屋○兼好遺跡○住

吉高燈籠○濱寺公園○大久保公の詠歌○松
林伐採の弊○和歌山行

和歌山市……………一三三

紀の川落橋○中流の舟○和歌山の町○名物
のメンチル○機織る家○紀三井寺遠望

和歌の浦……………一二七

石徑○せり上げの風景○祇園南海の詩○和
歌山の城

紀三井寺……………一二八

名草山○眞言の巨刹○應同樹○三瀑布○本
堂○開山上人○白衣大士

芦邊の小舟……………一三一

布引の松蔭○脊たけの蘆○鹽釜○觀海閣○
多寶塔○琴の浦の雨景○不老橋畔○渡邊の
茶屋○玉津島○片男波○權現の社○根上り

松○長亭短驛

神港夜泊……………一三六

大阪旭日座○松島の現長○兵庫の山陽鐵道
會社○神戸の西洋料理○元町通○楠公社○
居留地の遊園地○月下の帆船○芭蕉文集

須磨すだれ……………一四一

東須磨○西須磨○瀨須磨○てつかひが峰○
明石夜泊○一の谷内裏屋敷○平家没落當時
の有様

岡山後樂園……………一四六

姫路○有年○米點の山○朝日川○手腐花○
中の島○バナラマ○吉備團子○錦園○岡山
訛○備前法華○安藝門徒○日記

鞆の津……………一五一

備中の洪水○仙醉島○對潮樓○日本第一勝

尾の道……………一五三

濱吉樓○千光寺山○鳥帽子岩○玉の浦○盛
氣樓○男兒の赤禊

廣島一見……………一五六

淺野家の城下○宛然小大阪○名物蠣舟○天
主閣

雨の嚴嶋……………一五七

江の島の大○長者の萬燈○雨景の妙○大華
表○千疊敷○宮島の町○紅葉谷○鹿の子○
廻廊の繪○本社○日本三景

錦帯橋……………一六〇

岩國町○半月形の五小橋○西洋架橋法○水
無き河原

門司と馬關……………一六二

徳山○連絡汽船○本土と九州○門司と馬關
○石炭の山○小蒸汽と對岸○卷帆樓○山陽

の詩○檀の浦

小倉の町……………一六五

九州鐵道○豊前小倉○京町○饅頭○小倉帶
と博多織○中津の町○長春園○石炭大盡

耶馬溪……………一六八

世の丹青家○畫道の祖○南宗と北宗と○住
吉と圓山○文晁の畫風○つく芋山水○文人
畫の弊○八面山○鶴市神社○野路餅○結蹄
○背のトンチル○佛坂○樋田

羅漢寺……………一七四

嚴窟○耶馬橋○古川の筏○香園岫山○一萬
石の朱印○九州屈指の大刹○無漏窟○鷄足
塔○山國河畔樓○暮色蒼然○旅の夕

殘燈青村……………一七九

田舎娘○女主人○熟柿の下の小家○塗盆に
傾○宛然花和尚○智進○貨錢は酒○曾木の

長淵○三日月社○節婦の歌○祇野

屈智の林……………一八四

立留の村○笛竹○宮の馬場○屈智の林○蹄
鐵工○山家の至樂○爐火の松茸

柿坂の秋……………一八六

机の淵○大屋敷○柿坂村○淡窓の詩○禪正
寺○新耶馬溪○後藤基次の墓

雲與橋畔樓……………一八八

大島村○鎮守の森○素人角力○豪族の茶碗
酒○土俵の上の纏頭○滿場の視線○旅の御
方より最良へ下さる

毛谷村の奥……………一九二

宮園の雲八幡○一ッ月○中摩の白石○宇曾
○旭橋○守實村○見彦山○毛谷村六助の古
跡○力士の本場○武陵桃源○落道

彦山豊前坊……………一九六

磨と穢磨と○神託顯著

中津の町……………二二一

野依氏の信義○刺身に酔○中津の俗話○自
性寺○大雅堂○山陽西遊の奇話○人は名

香椎の宮居……………二二四

琵琶法師○宇の島○行橋の在○日向見と芥
屋の大門○遠賀川の石炭○官幣大社○仲哀
帝と皇后の行在所○綾杉

名島の夕照……………二二七

白沙松青○夕陽と鳥影○宗像神社○帆柱石
○千代の松原遠望○多々良川○名島の渡○
元寇十萬の兵

箱崎の宮……………二二〇

一帯青松○箱崎の町○光琳の畫風○米一丸
の墓○箱崎宮樓門○敵國降伏の額○敵愾心

山國川の水源○夕陽影裏枯尾花○白衣の行
者○一の櫻葉○樂師峠○豊前坊○老杉森々
雲尙暗○岩見重太郎の劍法○天覽○蜂の松
風○安徳帝の潛伏所○彦山の町○上州妙義
山○彦山の訛○言葉のくさくさ

九州第一山……………二〇一

銅の鳥居○四十二町○彦山大講堂○佛山の
詩○役の行者堂○祠前白髮翁○絶頂○治國
平天下の碑○下山

猿飛の怪巖……………二〇四

草元の村○猿飛の絶景○山靈水伯○旱天の
雨乞○白金出づ○念佛橋○三合村熊谷氏○
英山と英姫との由來○柳吹家○又花和尙に
會す○中津の町に歸る

宇佐の宮……………二〇八

宇佐驛と町との距離○驛館川○上田の渡○
吳橋○寄藻川○小椋山○勅使門と本堂○清

福岡と博多……………二二三

博多の町人福岡のお侍○中島の橋○松島屋
○柳町節○俗話○俗語○西の公園○山上の
眺望○筑紫富士○磯邊の高燈籠○箱崎の放
生會

長崎の風景……………二二八

尾の道○長崎○諏訪神社○市中一目○支那
人の露店○三昔の和蘭○圓山

天草洋眺望……………二三三

鳥栖○共同椅子の快夢○八代○肥後來の本
場○征西將軍八代宮○城跡○天草洋遠望○
蘇峰君の郷里○玖摩川の鮎

熊本の日……………二三七

熊本の水前寺○熊本城○清正公と勝守○谷
干城○その市中

大宰府……………二四〇

白銅一ツ○大宰府の天満宮○天拜山○観音寺○戒壇院○古鐘○都府樓の跡○山影依然

若松の港……………二四三
折尾驛○若松港○海の景色○芝界灘○岸柳
嶋○松上の夕陽○宛然如畫

山陽一帯……………二四六
門司より徳山○激嶺碑と鳴子人形○山陽鐵道の注意○岡山下車○氣嫌な二ツ

高松と琴平……………二四八
朝日川○三幡港○五剣山の奇○高松城○琴平○金比羅社○白峯と西行○雨月物語○栗林公園○屋島○平家蟹○海上の短艇

寒霞溪……………二五三
小豆島土の庄○下村より登山○寒霞溪○關西の妙峯○紅葉青山○池田の臘月○八幡の一本松○大暴風○波止場の舟宿

小豆島……………二五六
老婆と合宿○瀬戸内海○漂流の中學生徒○錦園○舞子と垂水○祭札の喧嘩○をでんやと一合

月夜の鮎壺……………二六〇
光村氏の暗室○須磨の別墅○鹽屋の岬○月前の小舟○鮎壺を洗む○三の宮○四の宮○大阪多景色○歡迎小會○盛文館の厚意○阪鶴線

三田と篠山……………二六三
生瀬と武田尾○山水奇絶○三田○丹波路の秋○篠山

福知山と宮津……………二六五
兵營と福知山○諸州めぐり○洪水の後○由良川○由良の月○乗合馬車○宮津○天の橋立○丹州丸○越前敦賀○和歌三四

敦賀探勝……………二七一
敦賀の由来○氣比の宮○金崎宮○武田耕雲
密の墳墓○加州藩の因循○名物の海舟

福井の町……………二七五
足羽山○石像と碑○橋本左内の墓○小塚原の露○年二十六○名物の絹織物○女子の手工○鮑引の松茸○北國の夜寒

百萬石の城下……………二七八
月下の白毛布○宿屋に宿す○犀川畔樓○兼六公園○樂翁の命名○金澤訛○三名物

和倉の湯……………二八二
津幡驛○能登の七尾○伊勢崎の盆踊○五升泣三升泣○所謂泣女○言葉の訛○和倉の温泉○北國の熱海○辨天島

越中の魚津……………二八四
直江津丸○屏風が崎○伏木と立山○安田と

淺野○大風暴雨○怒濤一葉舟○提灯の光○美人の肩○按摩の話○撞木町○有髪の僧

親不知子不知……………二八七
白樂天の詩句○片貝川○妻折笠の髻女○物むらひ○女の綿子○加賀の町松○親不知時○淨土下車○十月の荒海○怒濤千尺○北遊詩草○その離所○如砥如矢○青海村○糸魚川町○磯邊の孤燈○葎の宿

能生の一夜……………二九二
若長の歸雁○能生○白山神社○さんざ時雨○女夫松○断崖百尺○名立の凄雨○四海波○五智如來○直江津○官線と私設

三條の昔語……………二九五
爐邊の老翁○幼時の訓誡○馬鹿と借金○志は松の葉○手料理の味

北國色の湊……………二九七
沼垂○萬代橋○古町通り○白山と日和山○

越路の雪女鴈○鍋茶屋の踊○追分の唄○名所の唄

長岡の町……………三〇〇

中島の石油所○長生橋○信濃川○彌彦山○戊辰の乱○北國の博多○雪裏の橋下○胡き秦○妙見の鮭○佐渡の無名焼○福は内の盆○無名異

鳥の唄……………三〇二

妙高山の雪○赤倉の村○長野の町○碓氷の紅葉○淺間○妙義○慈愛の岸○歸京

雲井の空……………三〇五

泉山御陵○夢の浮橋○御名代の宮○月山大和守の碑○儀仗の兵○三井男爵邸

富士登山……………三一〇

夏雲奇峰多○黒田侯○登山の口○月明登嶽

仙が窟○三角洲量登

米澤の盆踊……………三五七

提打参る○七夕の短冊竹○七日浴び○十五六夜○その盆踊○盆踊の唄

磐梯山探検記……………三六五

岩代國耶麻郡○白峯の高湯○早稲澤部落○八十里越の嶮○戊辰の戦話○愛馬斃る○若松城下○災餘の寡婦○政宗の戦跡○他の探検隊と合す○埋没地と噴火口○盤梯の湯○秋元の部落○水に乏し○飢餓交々臻る○落日秋風地下村○ホンベイの比喩○彌彦社に登る○夜に入り暴雨來る○行歩の艱難○深谷の露宿○鬼氣人を襲ふ○米と山井と○流亡小野川村○吾妻山の小運○無事歸着

夏の川……………四〇八

首府旅館○歐行の空想○何島の渡○越中島

雲の美○石室○金明銀明の靈水○風雨雷電○曉風殘月○太郎坊○富士裾野

木曾路の春……………三三〇

同行五人○犬山の城○馬籠峠○女導者の黒髪附○臨川寺と寐覺の床○木曾公碑○鳥居峠○松本と犀川○普光寺のお籠

鹽原の夏……………三三〇

天河南樓上○西那須野○關谷○寒凄橋と白雲洞○楓川樓○尾頭峠

日光結構記……………三四三

内地雜居○大日堂と馬返○華嚴の茶屋○中禪寺○湖上の扁舟○戰場が原○湯本の温泉○含滿の淵

銚子の濱……………三五三

犬吠岬○銚子の河口○海嶺島○長崎の鼻○

より深川○洲崎の辨天○永代橋下○魚河岸の明月○月下の五分刈

土佐丸……………四一三

海に闊無し○水に軌道あらす○船よく灣に入る○歐洲初航○日本海運萬歳

江南村……………四一五

川崎大師○杉田行の乗合舟○根岸の堀割○本牧の鼻○妙法寺の梅○床几の花簾

金澤八景……………四二三

富岡の別墅○能見堂○八景の詩○瀬戸の東屋○九覽亭○朝比奈の切通し○鎌倉雪の下

京の水……………四二八

晴好雨奇○三軒屋○美人の微發○京の風俗○人國記の評○渡月橋の大原女○柴賣の脱一節○都踊○お町の天神○夕涼○祇園まつ

リ○大夫の道中

嵐の山……………四四一

東山と北山の観合○保津川と音無瀬の漕ぎ
○四季折々の眺

春日の社……………四四二

奈良の八重櫻○春日の神鹿○神樂巫女○若
草山○大佛殿

大和めぐり……………四四四

大和の銘○法隆寺の七堂伽藍○龍田川○壺
坂寺○初瀬の観音○多武峰○妹背山○吉野
の花○南朝四百八十寺

吉野の秋……………四四九

鐵道の利○一笠背鞋○上市の角力○宜長の
吉野紀行の文○容齋が苔清水の記

京繁昌記……………四五四

大阪の雀目踏○國府津の瀨○琵琶湖○通天
橋○難波の川口

行く春……………四五八

長崎の夢○松一本○南船北馬

驛路の沿革……………四六〇

神武の代○山陽道の開始○西方に偏す○東
國の道路

驛馬と傳馬……………四六一

驛鈴と關契○三關とは如何○切符

郵亭驛……………四六三

沙門と交通○養老律と驛路の制○驛馬と傳
馬の數○多賀城の始○貢調と舟掛浮橋

富士山噴火……………四六五

延暦の噴火○箱根の新路出づ○脚夫の横斃
○交通上の保護

路傍の樹木……………四六六

夏秋實路樹の利○延喜式の京師着到の日
數表○路次准擬牒○その式

古代旅人の風……………四七〇

道祖神の奉幣○山野の露宿と草廬○更科日
記の旅の態○上野國より京師に至る四ヶ
月餘○驛路の未開

卒塔婆の目標……………四七三

中尊寺の始○白河より外ヶ濱○一町毎の卒
都婆○鎌倉飛脚は七日課役錢

南北朝の道制……………四七四

往還の行程○諸國に新關○旅人の津料○本
陣の宿札○武家も因襲す

上杉武田の封内……………四七五

戦國驛路○橋錢の制○行李の運搬○馬錢
○遠國使節は僧侶○廻漕の便

宗教と驛遞……………四七七

勸進僧と旅行印券○道照と空海と遊行と○
宗教と驛遞の關係

戦國驛傳……………四七八

官券と駄賃○關剋廢止○信長の道路修繕○
路傍の松柳○警者を役して宇治橋を造る○
鐵業と鑄匠○六町一里と三十六町と

一里塚……………四八〇

一里塚の創始○里町の種類○六十間と一里
傳馬と繼飛脚……………四八二

道中傳馬○徳川氏江戸に移る○繼飛脚と官
川の狀緒

九州往復の郵船……………四八三

九州の傳馬法○關白の朱印○郵船は關白の
印記○四反帆○公川貨錢

東海道の宿驛……………四八四

東海道の驛傳進歩す○駄荷の輕重
 道路の改善……………四八六
 家康の道路改制○交通上の苦慮
 橋梁と駄馬……………四八八
 道路の改修○増設の過料○農馬雇使
 中仙道の驛馬……………四八九
 人別米○馬無きものゝ課役
 水驛の渡船……………四九一
 渡船と船奉行○將軍發駕と門戸の鎖封○路
 傍の靜坐○定飛脚の權利
 江戸市街と驛法……………四九三
 市街の道幅○道中奉行○兩國橋成る○侯伯
 の函漕○死罪と繫獄○渡口の看守人
 三都の飛脚屋……………四九四
 飛脚屋の創立○法被と雙刀○戶外の蘆席と
 番狀公示○歸便の復舊

旗亭と佐酒女……………四九五
 旗亭の制限○二人の佐酒女○店頭の開閉○
 客の出入
 傳馬と駄馬……………四九六
 元祿令○公用の傳馬駄馬○日本橋に驛政榜
 札
 與力と同心……………四九七
 驛制の勘定所○各驛の返納金
 江戸三度飛脚……………四九八
 遞送の定款○三度飛脚の盛大○宰領の暴行
 飛脚と賃錢……………四九九
 飛脚は寅牌と戌牌○夜間の急行○浪華講と
 三都講
 諸侯の人馬制……………五〇〇
 人馬使用の制○萬石以上の諸侯と二十萬石
 の大諸侯

旅舎の賃錢……………五〇一

乗車と徒歩……………五一六

東海中仙道の房錢○無賃遞送○木錢と米代

汽車中の食物○飲料水○船は満腹は不可○
 人力車○靴擦と草鞋くひ○發汗と胃病

明治時代の飛脚……………五〇二

旅宿と傳染病……………五二〇
 注意せよ病毒は夜具の襟にあり○殺菌と日
 光○金巾木綿○枕の用意○空腹と入浴○傳
 染病毒

定飛脚問屋○東行と西行の定便日數○その
 賃錢

旅行携帶物……………五二三
 食箸と函○頭髮用具○梅毒感染

驛遞と驛傳……………五〇三
 公書遞傳定便○相對賃錢飛脚○郵便と切手
 ○切手賣捌所の監督○地方自治制○奥羽道
 路の今昔○人身の血管○驛遞志稿と予の思
 潮

不眠と便秘と下痢……………五二四
 催眠藥○便秘緩通劑○下痢の頓服

旅行衛生……………五〇八

旅中携帶藥品……………五二七
 消毒藥○寒胃○頭痛○嘔吐と撥○マラリヤ
 熱○胃弱○虎列刺○氣付け藥○含嗽藥○蛇
 に噛まれたる時○繃帶其他

旅行と衛生との關係○旅は藥○山水の精氣
 と○新鮮なる空氣○腦を新にす

西遊殘草……………五三〇
 西遊佳話の拾遺○長崎の圓山○和漢洋の料
 理○花月樓の話○山陽の逸聞○其詩○長崎

病後の旅行○生活の變化○秋と冬は日本海
 季候と衛生……………五一〇

西遊佳話の拾遺○長崎の圓山○和漢洋の料
 理○花月樓の話○山陽の逸聞○其詩○長崎

病後の旅行○生活の變化○秋と冬は日本海
 季候と衛生……………五一〇
 恐し○氣候と林質○フランチルと旅衣○採
 暖藥○日光の劇射○笠と帽子

西遊佳話の拾遺○長崎の圓山○和漢洋の料
 理○花月樓の話○山陽の逸聞○其詩○長崎

名物

別燈夜話……………五三四

小豆島の船待○老婆と合宿○岩國の奇風俗○その名物

天の橋立……………五三七

宮津の町○龍燈の松○文珠村○三ツの名物○切戸の文珠○興謝の海○磯清水○辨天○浦島太郎○橋立明神○岩見重太郎の仇討○貞室の句○一里の天橋○踊る人と行雁

常神の漂流……………五四一

丹州丸○舞鶴○若狭の小濱○大激浪○常神孤村○裏四といふ風○ころび油○日本海○早瀬村○關峠の関○松原の隴月

征西將軍祠……………五四五

歴史の感染○金崎城○新田義顯の忠言○尊良親王の令詞○卿よ自害の法は如何○斯く遊ばせよと自ら判腹○毒藥を進む○尊氏は大悪徳無道よ○戦亂當時の皇子達

北國二健兒……………五四九

河北鴻○冒險樂の親玉○錢屋五兵衛と木谷藤右衛門○磯刑○没收の金額八千萬圓

隣の佛魔……………五五一

能生宿の隣室○男女二人○逃亡の子供衆○芭蕉の話と似たり○いづれ淨世は憂世○旅の苦樂○時雨の句

欣游暢神……………五三〇

孝兒龜松歌○親虎自隊十七士屠腹引○須磨○舞子○磯部騷吊大野九郎兵衛墓○山形客中作○汽車過輕井澤○妙義山○川中島

煙霞侶……………五五八

山家の梅○小籐の隆○伏屋○越の海○鐘の音○花の影○春の野○子傳唄○夏の夕○夜網○利根の夕日○村人○山の根○尾花の道○水車○雪の渡し○宮島○雪の家○芦の入江○冬の日○岩打つ浪○冬の田○荒磯○秋の別れ○師走の磯

以上

續千山萬水

乙羽生著

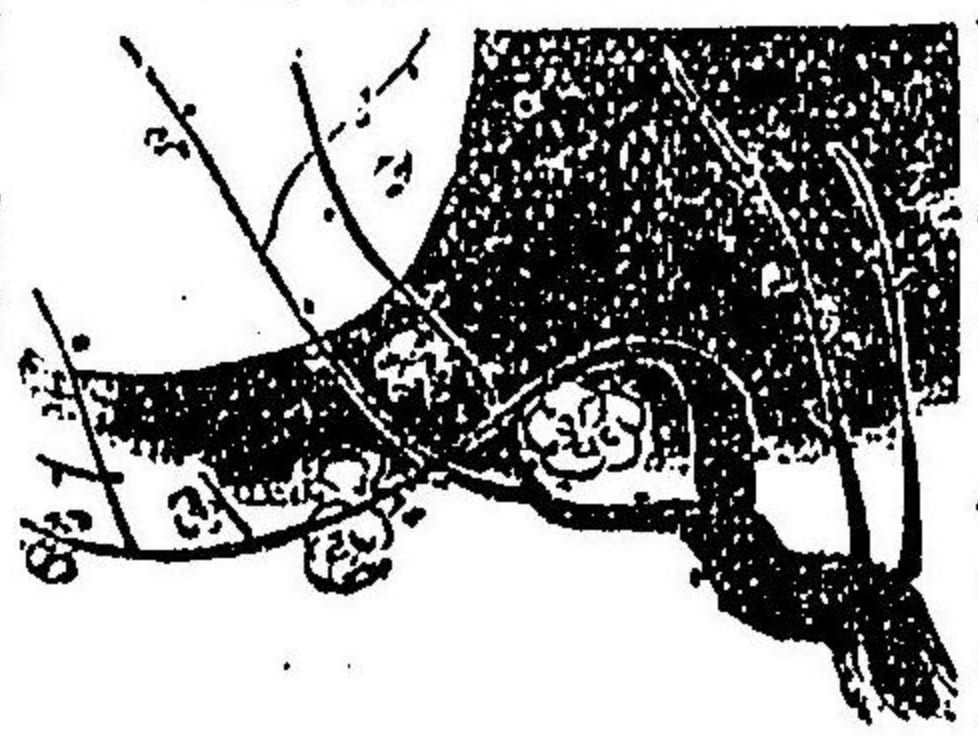
名山大川

茲に自惚の大々豪傑あり、三界の火宅に根城を構て、摺附木の口火に、千段巻の銀煙管をヤニ下り、吐月峯から立昇る吸殻の狼煙に、運星を考て、謀を帳場格子の裏にめぐらし、勝とを算盤珠の上に彈て、それでは何も元直が切まするなぞと、一寸前垂は懸て見たものゝ、根が書生上の、半日と弗箱の前に坐り切ず、ちつと手強い談判には、まアお



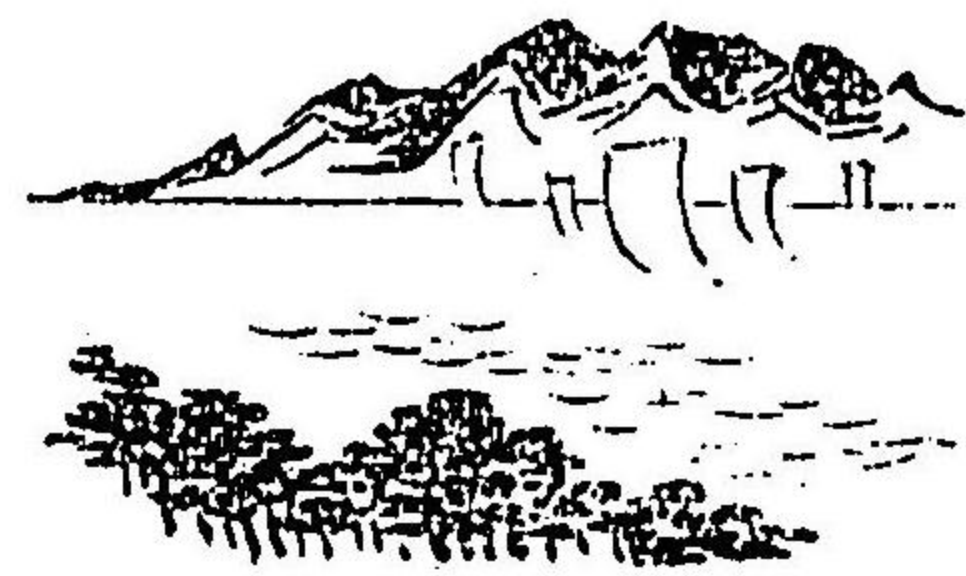
樂にど、我から内兜を見せて、宜う御坐ります、それはさうしてお負
 申して置ませうと、弱腰の脛太、坐禪なら角の仕立屋には劣ず、足な
 らば傳馬町の三度飛脚よりも早きが、こゝに斯して灰吹を叩てゐて
 も、大蛇は愚か、蚤一疋も飛で出ず、矧て口は八丁の贅辯を費さむよ
 り、この天高く氣澄で、秋は今ぞと鳥も長閑に飛で行く此頃、何を苦
 んで鐵羅漢を極込ぞ、君には下手ながら文字もあり、マツタ拙けれど
 も、寫眞の術もあるにあらざや、斯う云ては失敬だが、近來君の顔が
 赤馬車の座に汚れ、その君の天窓までが、灰神樂に白うなれるも憐な
 り、氣の毒ながら、血氣早く衰へて、未二年三十一生白髪では、明治の
 青年、それ何日か繪舞臺に上らるべき。瀧を引て放ざるは弓矢の奥の
 手、大器晩に成とを御存ならば、遊も課業の中ならずや、出でよ、出で
 よ、風は未だ寒からず、柳の散にまだ間がありて、月も今宵は五日あ

まり、さやけき影は横櫛の、雲の鬢洩れ出で、うつや美人の遠碁に、
 伸し腕も玉川の、岸に白う醜るゝは萩の花、詩人の訪來るを待つ風情
 あり、君往かず、此の人出でずんば、夫何やらを如何せむ。今や天
 下泰平にして、四海波靜なりといへども、折ふし
 演習もし給はずば、軍艦に錆の生ずる憂あり、正
 宗の銘刀も、時々出して拭はずば、鞘に汗生む恐
 れもあるを、可惜の鏡玉に埃蒙らして、乾板に微
 生さすことは、ピントの合はぬ話ならずや。聖代
 にも野に遺賢あり、いけん云ふべき柄ならねど、
 君先づ大に奮發して、未だ世に顯はれざる名山大川を紹介すべし、
 奥北の山水、美は則ち美なるべけれど、片手打では通とは云はれぬ、
 抑も通の字は融なり、四通八達、天下の大道を狹しとし、日本國中



見窮めてこそ、君は固より大通なれど、先づそれまでは半可通かも、
 さアさ何んでもよいではないか、暇は僕から貰うて遣る、こゝ三週
 間君の身軀の預り證文、一札件の如くなれば、後に苦條は無きにあ
 らずや。決心せよ。何をくよくく川端柳、懐手に惘然の軀は、何う
 やら身投の狂言らしと、上にも載せず、下にも置かぬ好辯に、わ
 れも大に發明して、左なり、左なり、定や貴公の云はるゝ如く、世
 に知られざる山水あつて、それを譲り立つる侍あらば、とりも直さず
 恩人なり、浪人しても千崎彌五郎を見立てたる赤穂の殿が名君な
 らば、召されし人も名士なり、名士名君に値遇し、隠れたる名山靈
 水の、名ある詩人に謳はれて、若し世に出づる事もあらば、たどへ
 ば浪人の名君に抱へられ、遺賢の朝に召さるゝに齊しかるべし、耶
 馬の溪山は山陽の筆によりて、大に天下に知られ、龍宮城は水の江

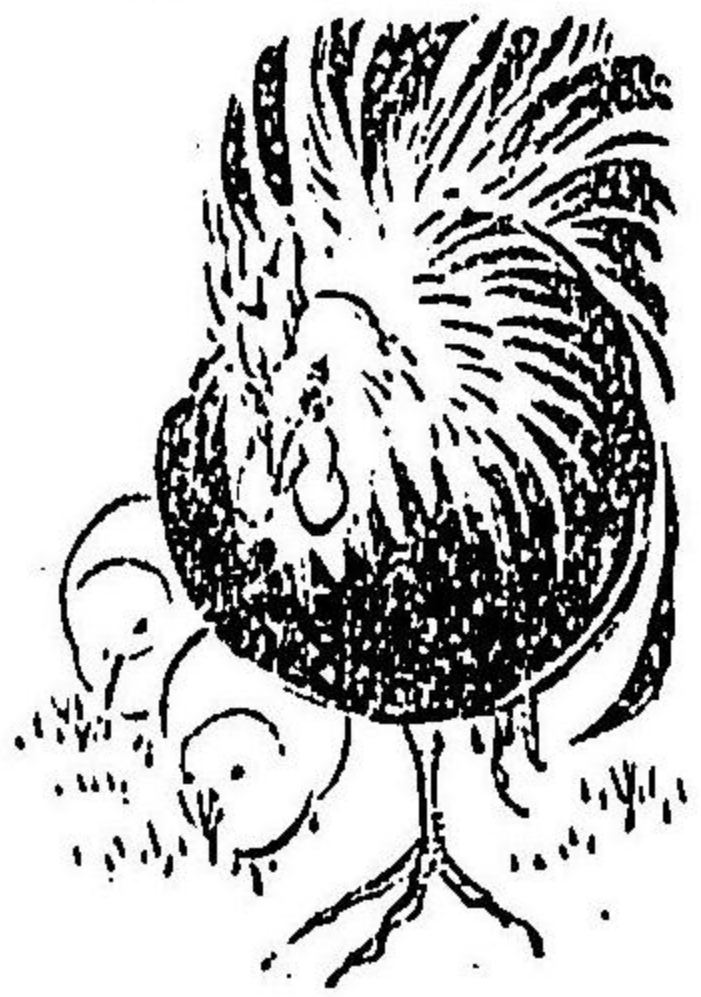
の住人浦島太郎に發見せられたり、われもこれより一笠双鞋、身を
 雲水の行くに任して、こゝに名山の忘れもの、かしこに靈水の落ち
 とぼれ、おつと堀出し物がど、仲通の古道具屋
 に、玉手箱の下物でも出さんかな。善哉々々、
 君いよく旅立と決心したるか、それは頂上、
 先づ何事も豆で胡栗、こゝで別杯を搦んで、其
 上可愛い奥様にも暇乞ひせよ、此方は故郷に歸
 る雁、君は旅路に行く雁の、名残はいつまでも
 盡きざるべければ、われのみ斯うして居るでも
 なからむ、一ト汽車お先にど、やがて新橋より
 姿を隠したるは、彼の光村の君なりき。



四季の旅

春は花の旅といひて、吉野初瀬などを見めぐり、菅笠に草鞋穿きの足軽く、大和路の菜の花黄に、蝶ひらくと飛び舞うて、廣野に幾曲りのさゝ流れ、一本橋のあれお危嶮う御坐りやすと、案内の奴に手をとられて渡るも嬉しく、夏は木蔭の旅の風清く、卯の花白う、麓の宿の垣根に咲いて、夜は坊主山を迂り落ちたる半輪の月影に、雲の風情の面白く、寐られぬ折に時鳥の聲聞くも興あり、秋の旅は淋しきに哀れは深く、荒波打寄する小磯、沖の島根に黒き奇岩の聳えて、大鵬の九萬里を渡るらしき漫々たる海原に、舟一つなく、一人見えで、夕陽紅く、白沙平なる中にすむ僧の、脚下より暮れかゝる景色、詩ともいふべく、歌ともいふべし、さてまた冬の旅の物

淋しき、佐野の渡に行き暮れて、宿かるべき家もあらぬ吹雪の中洲、遠き山は寒雲に鎖され、近き丘の杜にかくれて、村あるも見えず夜に入るほどの風情、涙も自ら零ちぬべし。四季折々の旅の情、春嬉秋愁、多少の區別はあるもの、如何なれば此秋を、われの好んで關西に行かんとはする。凡そ旅に遊ばん者は、財と閑と友とあるにあらざれば、興なきものなり、されども人間名あれば義務あり、身給貰うて世帯に老ひ、人情にからまれて、女房の腰巾着にぶら下り、吾が子を抱いて、月花を賞づるやうになり果てしは、千里の旅はあろかの事、七日の湯治も、たゞわが家の戀しうて、男子百年の志、一朝にしてこれよりぞ破れむ、旅は何んでも檜木笠、かけ搦ひ無き頭陀



袋に、天下の千山萬水を疊み込んで、降らば泊り、晴るれば立ちて、合の宿のかけ行燈に、その日の日記を手帳につけるなど、面白き事ならずや、さるをへん汽車もある世の中に、さりどては迂遠な話と笑ふ奴は野暮なり、旅の興を知らぬなり、出たなら何でも突飛な事して、我面白に世を渡るが、それこそ旅の大通なれど、獨り合點し、爰に明治三十二年九月九日、雅に云ひまはせば節句の夜の事なるが、新曆ゆゑに節は未だ早く、纒か眼に縁日の菊薬を看て重陽の涙かど、友にも家にも別を惜みて、新橋にこそ駈つけたれ。

月の二重橋

去年の秋は財と閑暇と友と三つが具足して、幸田露伴子と共に、彼



の奥北の地をめぐれりしが、今茲の春は金があつても、暫しの暇の無かりしたため、伊藤侯が九州行の群にも洩れて、我獨り見る杯洗の、月に見立てし猪口の舟、面白からず日を暮らし、が、花に若葉に氣まぐれて、立つ秋風の關の西に、今行かるゝぞあり難き。されば先づ君のみます大城を伏し拜みて、御代萬歳を唱へまつり、かねてはこの旅立の、事無からんを祈らんとて、小石川の庵を立出づれば、夜は八時を過ぎぬ、今宵は陰曆の五日なれば、月張の月さやかに巷を照らして、小暗きながらも、町家の影を地に映したり、横櫛のかゝる柳町を過ぎて、小石川橋に至れば、月土手に低くかゝり、水のみ白く凄きもをかしく、神田は兵見帯締めたる大男の、横に縦にそゝる歩きするが多くて、まだ氷

屋の店には秋風の立たぬか、硝子に白玉を盛れるも美しく、一ツ橋より丸の内に入るに、濠に沿へる柳の影黒く、まだ煉塀の取残されあるに、昔時の江戸の態なども思はれて、諸侯が参勤交代の折の、登城の風俗は如何なりけむ、大鳥毛小鳥毛大傘をさし翳して、金紋先箱、金銀打ちたる蒔繪の輿物など六尺男に昇がせ、乃至は麻上下に股立とりて、下に居ろう、下に居ろうと、素町人を土下座さしたる御三家御三卿、十八大名の威勢は、飛ぶ鳥も落ちなん見幕なりしよ、さて八萬騎の旗下、長い刀を佩して、花見の春の賑はひ、八百八町の大道狭しと、荒らし歩きたる、その傍の何處行きけむ、あるは見附番所の傍、今はたゞ城の石垣に残りて、秦時の明月漢時の關と、變りたる世の中に、變らぬはたゞ濠の水の、縦にも流れで、漫々と岸を浸せば、堤上の松が枝の、千代の緑を合むうれし。和田

倉門を入れて、宮内省の門前に至れば、白聖の古城松に聳て、落かゝる月の下に其影を水に映したり。二重橋の前に進みて、車より飛下り、君るます方を伏拜まつり、天壤無窮を祈り奉りて、弗と頭を擡れば、電燈白晝の如く輝て、御濠の前の松が枝は黒影を芝生に映し、空には星の輝たり。月は今櫻田の外濠にや落けん、正門なる甍の半を照して、物見窓のみ黒う見るも妙なり、二重になれる橋の、奥なるは淡して繪の様に遠ければ、近は番兵の屯所よりかけて橋の欄干に霜置かどばかり、電光の白く輝けり。眼鏡形なる橋桁は、地を出る百尺なるべく、影を倒に水に涵して、濠には金色の浪を浮つ、柳に風無うして、枝も鳴さぬまでに、静りかへりたる夜の景色、見惚て立るもの長久かりしが、時計を見れば發車の時刻



は迫りたり、急で再び車に飛乗り、大手先に出で、東京府廳の前に
 かゝれば、こゝには新に成りたる洋館の、櫓を並べて建るありて、異
 國の首府になど行たらむが如し。凡そ文明の度を知り、開化の量を見
 んど欲せば、先づ面積の廣よりも、地上に在る物躰の厚さ薄さを試験
 すべし、繁華なる首府には、必ず先づ天にも昇らるべき、高き建物
 などありて、豪富を雲に比して誇り、貧者の怨望を笑ふが如き觀あ
 るなり。我が國は然らず、封建の頃にありては、生命財産の安寧鞏
 固ならずして、徒らに富を極むるものは、故なくして藩主の爲めに
 削られ、獨り智に長せるものは、罪なくして事に坐して誅戮を加へ
 らるゝに至れり、されば紫町人の路に侯伯の行列に逢うては、平蜘蛛
 の如く土下座して、たゞ過失無からんをのみ願ふの餘り、家屋も
 棟を低くし、平生の舉動も徒らに服従の形を現はせるにあらずや、

文明の民は然らず、屈するを好まざるが故に、その肩は昂れり、
 下瞰さるゝことを避くるが爲に、その家を高うせり。今やわが國も
 四民皆王化に浴して、皇帝陛下の行幸にすら、われ等は立ちて之を
 拜し得るにあらずや、明治聖代の民は定に天幸あ
 るものなりなど、思ひついで、新橋停車場に至
 れば、友なる人の二三十人、多くは日夕机を並べ
 て、業をとれる方々の、われを見送らんとて、停
 車場の待合に詰めかけ居たるあり、或はピーヤホ
 ールの話より、われを待遠しとして、そこに走り
 行き、一杯を傾けしもありけるが、車夫も馬丁も一榻一卓の平民主
 義を厭ひて、早々に逃げ歸りしといふもありき。やがて夜は十時に
 なりなんとす、鈴鳴り渡りて、汽車は今や埠頭を離れんとしたりき。



新 橋 の 花

別るれど嬉しくもあるか今宵より逢ひ見ぬさきに何を戀はまし。旅立つ際の心は取りくにて、送るもの、送らるゝもの、車窓の内と外に頸さし延べて、語らば長からん別離の悲しさを推し包む人もあるべし。やがて漁車は勇ましげなる漁笛と共にブラットホームを離れ、旅のあはれはこれよりぞ初まりて、月落しし宵闇の芝浦に燈の影は、星の飛ぶらむ袖が浦、これはいつも全じ眺めのおかしさもなければ、非ど此方のベンチに凭り直るに、この室内の眺めこそ中々に花にも月にも増したる四五人の女連れあり。見ればかねては酒の筵にて見知りたる新橋のものなるに、彼方はあやと驚きて辭儀する、

我も目禮すれば、流石は愛嬌商賣の如才もなく、何處までも越しと問ふに、神戸をかけて、臺灣あたりまでと云へば、嗚仰しやい、臺灣などへと云ひ消すに、此方よりも何方へと問ふを、酒匂までとは、何れ嬉しき旅なるべし。

酒匂といへば松濤園ならんが、彼處は國府津の停車場よりなほ半里に近き路程なれば、これより行き着かんには一時をも過ぐべきに、さても世には好奇の大盡殿も在すかなどおかし、されば彼等とは二時ばかりこの狭き室内にありて、明き電氣の



光に照さるゝことなれば、彼等が裏面の舉動を窺はんはこれに増したる機會なしと、片隅に小さくかゝりて、見るとも無しに眼を光らせ、おかしきこともあれかし、話の種にせんものと構え居ると知

るや知らずや、土地切つての流行見はおるんを頭に小稻、おるつ、
 實子と、それに送りの婆が、皴面の狼めきし目を光らせつ。
 そも送りの婆と云へば、そのむかし誰やらの狂歌に、轉んだら食は
 うくどつけ覗ふ藝者の母のおくり狼とて、今も猶おのが娘を食物
 にする親もありとかや、それはさておき、四人の中の瓢飲者なるお
 えつといふは、涼しき眼の何處やらに凄味ありて、島田は殊の外に
 よく似合ひたり、おるんは例の銀杏齧、横向の傍際立ちて美しう、
 口元の愛嬌溢れんばかりなり、中高の島田に頬の笑凹、一笑千金の
 値とそんじよ其所等の人様が仰せられしは小稻にて、夜會結びにず
 つと氣取りて、風姿も素人風の、何處やらにまだ垢抜のせぬ様なる
 は實子なり。涼車の品川に着きし折、云ひ合したる様に羽織を脱ぎ
 て、椅子の上へべたりと坐りぬ。脱ぎたる下駄は吾妻下駄、駒下駄、

雪駄、いづれも流行の先を追ひて、疊表の艶美しくし、價を云ふは野
 暮なれば、衣装も例のお召とだけ云ひ置くべし、但し實子の着たる
 紺と白との瀧縮はイヤに目立ちて嬉しからず、後は總膝に質素にし
 て帯に一入の金目を見せたり。

國 府 津 多 魔

涼車は急行なれば、瞬時に神奈川に着しに、
 彼等は早速屈の欠呻を殺て、楮此からが御
 手前物の藝盡、お目留ますれば次ぎなる藝
 と悪口叩きてやりたかりし。



日頃彼等が燕席に侍て、虫も殺ぬ如きしほらしの顔と、今宵ベンチに

坐りこみて、青切符はこれにムいと云ぬ計に廣がるにぞ、他客の大の男も小く肩りておれば、これ見よがしに藤八拳やら狐拳やら、御酒も召さぬに浮たぐの大騒ぎ、浮氣商賣とは此時より始りぬ。此も暫時にて静れば、今度は風の向を換日頃御殿負様に預るお客衆を、勿躰なや、あれが斯の此があゝのと取々の噂話、言葉は符牒交の隠語として、毛唐人のピーくパーくより分らねど、兎に角茲に一の話頭に登りたるは、其前夜あたりのこと、かや、花月樓にてとる大盡が遊し趣向の山縁を有難く聴聞するに大盡と云は此より東奥州あたり、好奇の遊の果の果は、女共に阿彌陀籤を引せて、それにあたりし品物はその女が買ひに行くべき趣向なりとか、さて小稲が引きしは天秤杓、おえつは「タワシ」、おゑんのは花簪にて、實子のが塵埃取の役廻りなりしに、オヤ、マア嫌だよと、笑ふやら強るやら、暫時は鳴りや

まざる程の興ありしとぞ、されば茲に此の自然の配劑のいとも妙な結果を告げしことよと、門外漢の我等ひどく感服の額を叩いて以爲らく、おゑんの花かんざしは先づ斯うなくてはならぬ所なるべし。今は昔といふも大形なれど、東都第一の美人に當選して、彼の凌雲閣の百美人中の魁と、花紅葉を踏みわけて奥山に、妻戀ふ牝鹿に命とて尊ばれしことありしが、かゝのふれば、これも早や十歳餘りの昔語りとなりて、今も猶全と流れの濁江にさまよひ、色香もいつしかに年月と共に褪せやりて、昔戀しき盛の儂を、この抽きたる籤の花かんざしに忍びつゝ、浮き川竹と知りながら、とても定まりし岸邊には根のつかぬ趣を止めたるらし。



小いなが天秤棒も満更ならぬはまり役なり、見るからに何處となく
意氣づくりなれば、いなせ姿の肴屋杯がお主婦さんに仕立つれば、
これ似合しき縁なるべし。

おゑつの「たわし」も勝手元を切まはす世話女房の俵ありておもしろ
く、實子の塵埃取に至りては、御拶挨の申様なけれど、これとて中
々相當の御役目とおかしけれど其所は云はぬが花なるべし。

かくてこの四人の曲者、入りかはり立ちかはりて、種々多様の蕊づ
くしを演ずる様、其意氣込の中々に恐ろしとも怖ろしく、人も無氣
なる舉動の節々、小瀬にさはると、蔭言云ひし乗合もありき、され
ど斯る氣象にあらざれば十千萬兩の且的をあやなし、天下の英雄豪
傑を手玉に取ること能はざるべしと、我等の如き膽玉の豆の様なる
小男は唯舌を巻いて感服の外なし。

されば日頃斯程の者なるを、品格高き世の紳士が一朝の熱情をほと
ばしらせて、これを手活の花と眺るものありとも、争で末長かるべき
慶事ならんや、古詩に曰くも今更なれど、聘せらるれば妻となり、走
ばこれ妾、それよ、矢張野に置け蓮華草かも。
斯て大方の藝も仕盡たりと見え、誓は四方静にな
りしが、今度は頻と口を動して、大船のサンドウ非
ツチを忽に平げ、揚えさせたる梨や葡萄を鼠か栗
鼠の如くにあさる様、とても奥方の資格は芝生の
先の露ほどもなかるべし、と何事につけても苦勞
性の我、只目覺しきと眺ける。とかくする程に今度は駄洒落の共進
會を初ぬ。先小いなが此所は大磯かと聞きしに、例のおゑつが、そん
なとはしらつか(平塚)と洒落しを抑の始として、小いなが劣ぬ氣性



の素早も、オヤ、ソウ、それにちがさき(茅ヶ崎)とつけしが、有繋にきまり悪氣に打笑て今のはどうでせうと、我を顧みての挨拶、是に於て乙羽が洒落の名高を知人ありや、天の機密を洩すは恐あらうと逃口上にかへ置べし。大磯も過ぎて國府津近くなれば、成ざたりし羽織着つ、数多く買ひためし食物もそれなりにして立たんとするを、例の送りの婆殿が心得顔に奇麗に仕舞ひて、風呂敷の包重ねなり。これを見て我等思ふ様、まこと世は倒ごといと多かり、社長は赤切符を煤けた帽子のりボンにはさみて、三等室の片隅に居眠れど、年若な當世の紳士風、これが社員末席を汚がして、月給拾と某の身分を、二等のベンチに寛々と打ち乗せて、葉巻煙草の氣焔を四方に吐き散らすもの、多いが當世、世に藝者を抱え主、これが多くは送りの婆から成り上りて、順で使はれしものが、鼻の先であしらふ

襟になるもの、その例少なからず、この婆なども藝者が捨て行く折を包んだ風呂敷の中より、出世の端緒を生み出して、これより十年の後、赤坂か神樂阪あたりに、凍とした一戸を張りて、あれが何屋のち主婦とうたはるゝなるべし。云ふはくたくだしきことなれど堂島にさる婆ありて、毎日落ちこぼれたる米粒をはきだめも積れば不二の山の身代となりて土地に名高かりしとかや、兎角は仕末の世なればや、ばつばとなさるゝ藝者どもの頂門の一针ともならんかと、説法めきし縁言はさて措きて、四人も此所に國府津にて下車してより、大風の吹きし後物静かに、同車の十四五人、互に顔を見合はして呆きたものと云ひたげなり、それより皆々人心地つきて手足を引きのばし、夢を故郷の

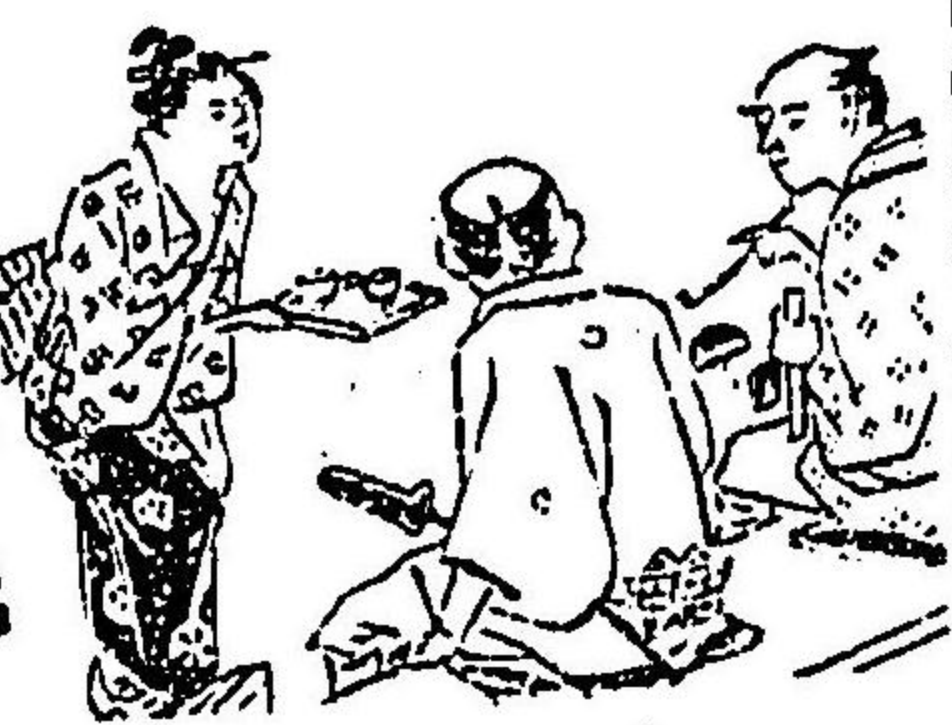


空に飛ばせて、可愛ゆき妻子の上に忍ばするもあるべし。名物は山北の鮎鮓に一杯を傾けて、われもそのまゝ眠りに入りぬ。

賤 機 の 山

静岡につきしは翌る朝日の登る頃なり。構造大いなる旅館はみなきだ夢の最中なりければ、止むなく静榮館といふ宿屋に、まだぬむたげの下女どもを追ひ立て、其中に朝食もすまし、これより車を静岡の城跡へと飛ばしぬ。濠の松々枝に朝霞の未だ消えやらぬ露の草深といふ村の口に友人島田弟丸氏を訪ひ、閑話果て、國幣小社淺間神社に詣でぬ。恰も今日は日曜の事としてそいろあるきの人多し、宮居の構造壯麗を極め、

四方の景色どこやらに芝の愛宕の俤をといめ、登る階段いとく高し、それが後邊に賤機山と云ふがあり、まだ朝まだきの道芝に露をといめ、朗らかに輝く旭日影のいと冴えくしく、前には富士の高根の朝化粧して、ま早うさまと云ふかと思れば、後に阿部川の帯長く結びて今日ほど云ふ如きも、知らぬ他國の旅人への愛想なるべし。此所を下りて市中に入るに、吳服町、七間町などいと賑はし、宿に歸りて再び車を命じ、これより久能山へと道を急がせぬ。寶大寺村といふにて梯子の如き長き車を曳き行く男頭の上に物を載せて来る村女、限りもなき竹林の此方、小川のゆるく流る、岸邊を軽き車を走らすに、八瀬大原なんどの景色に似て、旅の心いと

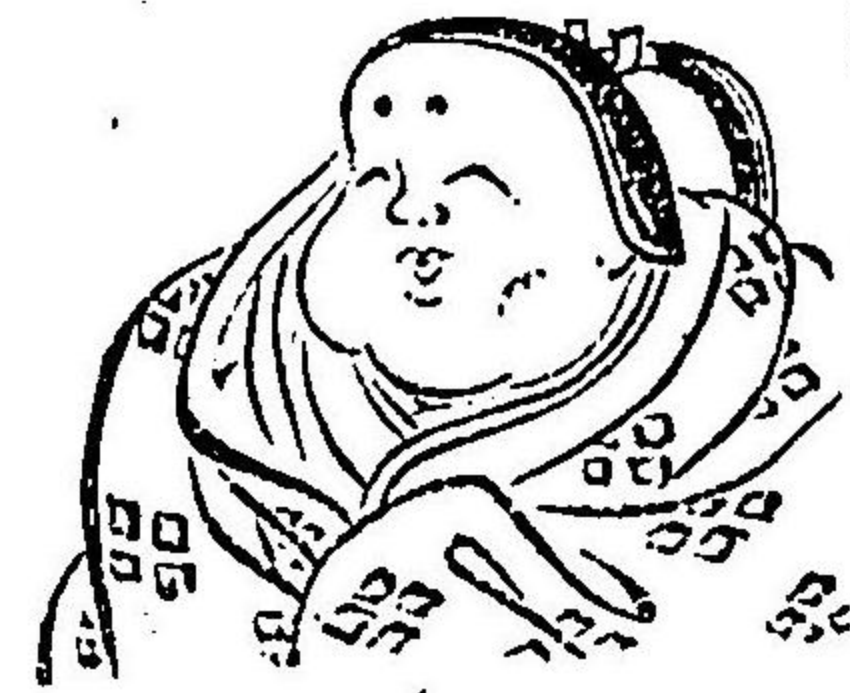


すがくし、八幡村に行くに竹林いやが上に茂り合ひて、深く踏み
入れば七賢人も隠れ居さうなり、まことに此所は竹の名所とて彼の
灰吹の吐月峰も、此のわたりの名物とぞ。高松、大屋を過ぎて海を
見る、岸うつ波に獨黍の莖の、半ば枯れたるが、揺られては呷き合
へる如く、濱の口のあたりにはいさゝ小川の獨木橋に、漁る人の佇
めるあり、彼方の松蔭に破船の横はれる、此方の岩角に海鳥の羽ば
たきする、何處も全と眺めなれど、海邊の景色は一入といと嬉しか
りけり。

東海須彌山

やがて久能山の麓に着きぬ。麓は瀟洒たる小漁村にて、江尻と静岡

どの中程にあり、これより階段を登ること十數町、悉く石をもてつ
くれり。海面を抜くこと八百九十尺、一山描ける須彌山の形をなす、
登り行くに廻り梯子をのぼる如く、一段は一段より高く上にせり上
げらるゝ心地して、その快さ云はんばかりなし。
山麓の社標より一の門に至までの磴道拾六折にし
て、石段の數七百九十五段、此町數四町廿一間餘、
各石欄を以て圍む、一の門より社務所まで四折に
して、階數百四十七、此町數一丁廿三間餘、社務所
より唐門までは九十四折、一町七間餘、總程計を概
算すれば石段の數實に千三十六段、其町數六丁半廿一間餘ありとは、
久能山小誌に記する所なり、階を登て眼を放てば、東南伊豆の諸嶺を
雲峯の際に望み、遠く波勝崎の邊に至て模糊として一抹の間に消え、



西南安倍河の河口大崩の林檎、石部の鐵路、虚空藏の山嶺、城の腰の
曲灣を烟霞の間に認て、廻に駿遠兩國の界なる大井川の河口と遠州
御前崎の邊に至りて彷彿として夢の如く、更に眊を決すれば、東海の
緑波手を延して掬するを得べく、鳥飛ぶ遠江灘も、船走る伊豆の大島
も、悉く双眸の間に收むるを得て、活大の氣、天地の間に塞るの觀あ
り、又後は有渡の山脈を負て、波濤の如く、山海の風色全く茲に備り
得て、優に東海道の靈山勝區たり。昔者西行法師茲に月を見て、涙の
みかきくらさるゝ旅なれやさやかに見よと月はすめどもと詠しも、
我等が今日の旅は、一句の菩薩に奉るものもなく、ツイ其下の眞言宗
の精舎をのみ伏拜み、行基が跡も尋ず、久能忠仁の物語も聞ずして、
門衛所の此方に一面の梅林を潜り、其東隅に山本勘助が堀しと云る
深さ、十丈計の勘助井と云るを見、夫より少く道を隔て、物見の松を

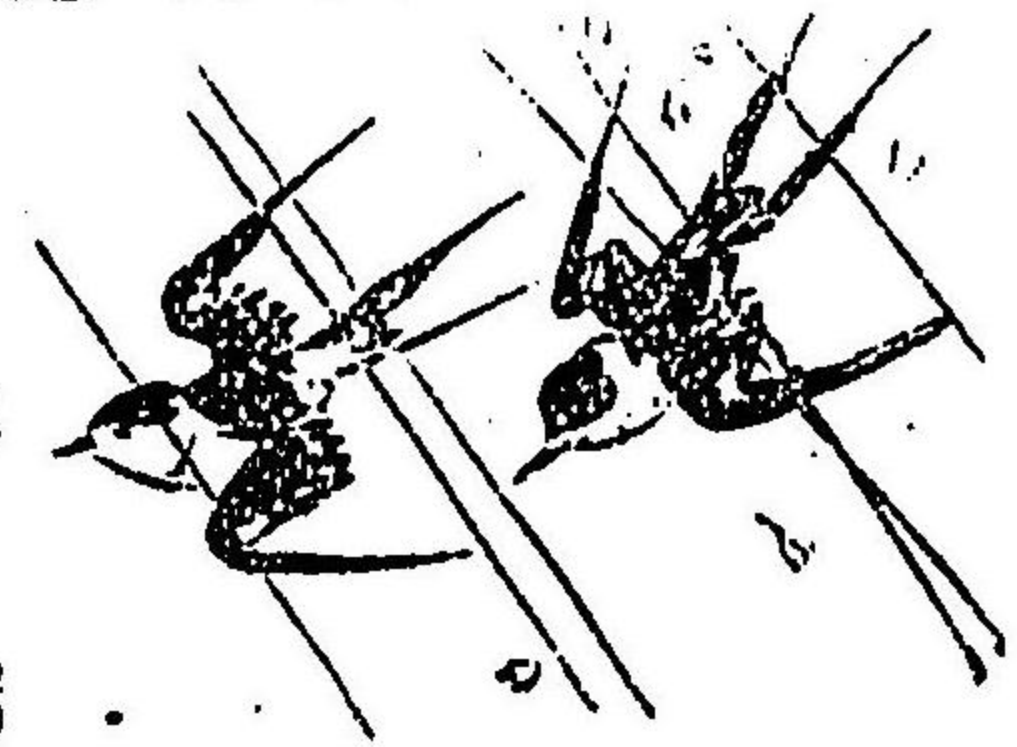
尋ね、翠蓋夫を掩ひ、假盛地に蟠り、風聲長へに空に響きて、壯觀四
面を拂ふ、杖に攀て下瞰すれば、懸崖萬尋人をして懼然として恐れ
しむ、此の本殿は日光廟の結構を小さくして見る如く、墨塗、黄金
金具の煌々として輝ける様、唯壯嚴美麗と稱する。
の他なく、菊の高彫のチラシある欄間に三十六歌
仙の額を掲げたるなど、精巧至妙と稱するの他な
かるべし、一山は二代將軍の建立に係り、當時全
く諸侯の手を借らざりしといふ、我は宮司に乞ひ
て本殿を拜覽し、又神庫に導かれて寶物を見るに、
家康の手澤品多し、中に徳川代々の將軍が着せし鎧ありしが、これ
ぞ時代の推移につれて、其風俗の一般を窺ふに足るべし、たどへば
秀忠、家光、吉宗などの着せしといへるは、凡て質素を旨として、



黒絲絨など多けれど、十一代より以下次第に華麗を争ひたるもの
 如く、蒔黄絨、緋絨等のもの多し、鎧の絲の色々に時代観をなす
 もまたおかしからずや。その他當時の舶來品なりとて、時針機、ぎ
 やまん器具などの陳列せるもの多けれど、これを今より見るときは
 當代の絶品も氷屋の店頭に田舎漢がひねくりまはせるものにも劣れ
 るの觀あり、蓋し文明の變遷の我邦に著しかりしを知らばき歎。
 さて山を下りて麓の豆腐屋といへるに小酌を傾け、人車を命じて蹄
 途に就きしに、全道景色のさまでよしとも思はず、只管に車を
 走らするに、不圖眼に入りしは人車の泥濘の、竹を曲げて造りたる
 なり、如何に竹の名所なればとて、斯かるものにまで用ゐしこと、
 所換れば品かはる、これも土地の習慣なるべしとおかし、それより
 静岡の停車場より西行の汽車に乗りうつりぬ。

一 飛 千 里

東海道は數度の旅なれども、いつもあかぬ眺のお
 もしろく、天龍川、大井川の鐵橋を、一瞬の中に
 飛び去りて、むかし大小名の此所に川留の厄に遇
 ひし頃の、我國を思ひやりて三州に入れば、沙見
 の觀音の夕陽の中に黒く立てる美しく、二川と云
 へるにては、弦月の淡くして、夢に似たる様心地
 よし。我傍へなる人に今日は舊曆の幾日にやと尋ねしに、何れも當
 世流の紳士のみにて、舊曆を知れるものは絶てなし、この海道の濱
 名にては光村氏と相逢ふべき約ありしかば、これを覓めしむあらす、



共に長良に鵜舟の遊を約したれば、岐阜に入りて尋ねんものと、そのまゝに名古屋に着く。

想へば先づ年、此所に紅葉氏等と共に遊び、志奈忠といへるに宿りしに、夜更けて西洋人の囃といふものを聞きたり、始めは狎の吠たるにやと疑はしく、女中に向ひて、あれは何ぞと問ひしに、西洋人が囃をするなりとの事に、折からの笑柄となりしことありしを追想して、今は獨り友なき車窓に、頭を延べてそいろ笑盡に入りぬ。

岐阜に着きしは十時頃なり、玉井屋といふにて光村氏を訪ひしもあらず、鵜船のことを聞けば、長良の水汎濫して、とてもさること出来まじとの事に、心に描きし樂を失ひたれば、さらば名古屋へと駆け出して、停車場に行くに、今出ましたのが仕舞車との事に、止むなく中島屋といふに泊まるに、待遇の間抜けさ加減怨めしき程にて、不快ながらも一夜を明しつ、早曉此所を出て又名古屋に歸る。

城の名古屋

尾張名古屋が城で持しは封建の昔、今は混華に亞る海道の大都會とて、東は東京の粹を抜き、西は大阪の秀を取て、商業界の一大中心となりぬれば、その市街の景色さへいと引き立ちて見ゆ。



静岡より此地に入て、著るしく、吾等が感じたりしとの一は、箱根の峯はさまで高といふにあらぬに、唯一の關門の此所に据られし計にて、其人情、其風俗の、恰もこの峯より彼方此方を横に二に断切て、そ

れ、異たる地を作るが如きとなり。吾未だ静岡を精く見ざりし以前は、假令管根の關のよし許さずとも、兎に角此所は江戸に近き所として、人情風俗の自から江戸に似かよひたる節あるべしと思しに、市街の家並低くして、數奇屋めいたる建様の、宛然たる京都の趣を存せらる、その商家の番頭より丁稚に至るまで、蒔黄や赤の前掛をかけたる様など、九分九厘まで京阪の風俗をうつす、さればまして言葉使といひ、すべての器具の類までも、多くは東京あたりに見馴ぬを用ひて、云は、小京都の有様を寫したる、有様に我等が目を見驚かしぬ。

されば往時鎌倉江戸の幕府が四海にその威を振ひたりといへども、多くは管根の關を隔て、東方に及ぼせしものにして、西方に至りてはいまだ全く普及とまでには至らざりしなるべし。さればその時代に關西の諸豪の朝廷の風を慕ひしものも、幕政の勢逞ふして、

自づと服従の已むべからざるによりしものと云はざるべからず。當時幕府が國防に力を用ひ、管根の關を固めしが爲に、その文物の輸入も關西に及ぶことの速かならざりしは疑ふべからず、静岡にして斯の如ければ、况して名古屋に至りては、所謂江戸風といふものは夢にだも見ることも能はざりしなるべし。されど今や交通の便五十三驛を通じて普ねからずといふことなれば、その事業の如何を問はず、廣く天下に商機を通じ、東、東都をその基礎として、而して遙かに西方に手足を延ばさんとするなれば、其事業の盛大ならずといふことなし、されば當今の商業界の如きは既に其勢を西方に占めたりと云ふべきなり。

斯く我れは觀風察俗の眼もて商業の都會を觀察し、車に揺られて本



通りに出でしに、恰かも銀座街を行くが如し、路の兩側に柳を植へ、中央に電氣鐵道を架せる、わが東京より一層の進歩を加へたるの趣あり。

我は停車場前の旅館に腰かけて朝食を終るや、再び西行の汽車に投じて、南伊勢路に向ひぬ。

伊勢路の旅

我の關西鐵道に乗じて先づその進歩に驚ろきしは、列車毎に洋食の辨當、サンドウヰッチ、其他好めるまゝの洋酒を商へる行商の乗り込みて、客の需むるまゝに應ぜることなり。かくて如何なる停車場に至るも、これを觸れあるきて、巧みに顧客の歡を買ひて、旅客を

してまた些の遺憾なからしむ、これを東京附近の列車が管に大船のサンドウヰッチ、山北の鮎鮎の他更に旅客を歡ばしむるものなきに比すれば、用意の粗密を知るに足るべし。

されば帝國の一大首都を以て自ら任じたる東京も却て地方に打ち振る進歩の呼鈴に呼び覺されて、始めて用意の到らざるに注意するの日なからんや、彼の水道事業は如何、街鐵問題は如何、横濱の築港は如何、わが江戸ッ兒を以て自ら高しとする人よ、少しく双脚を關西の都會に馳せて、社會の進否を観察せよ、然らば思ひ半ばに過るものあるべし。

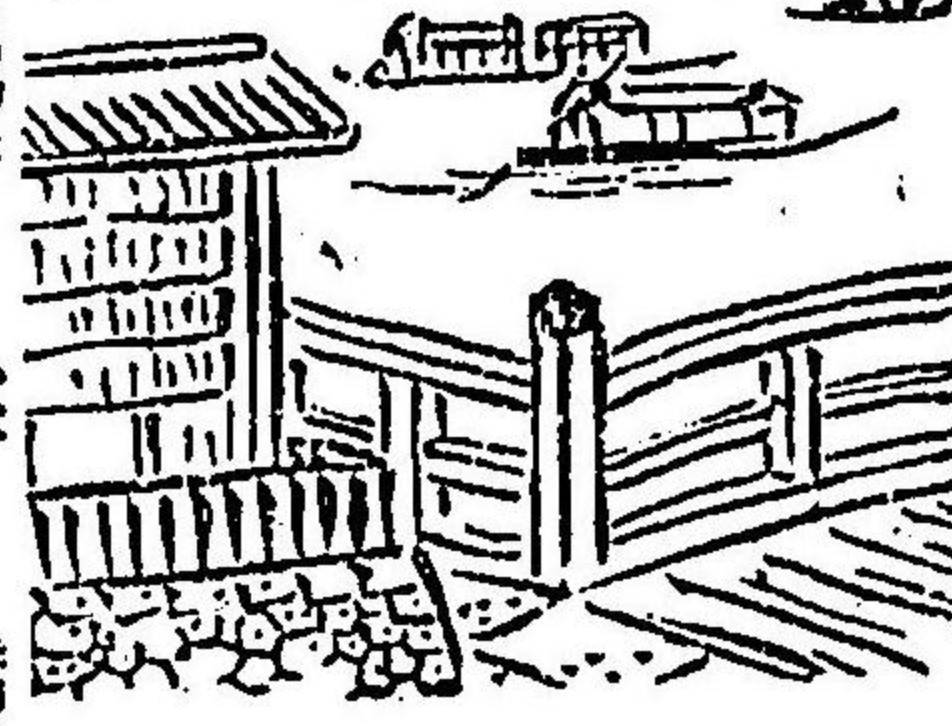
我はこの車中に在る乗客の、如何なる人の乗り込めるにやと、弗ど四邊を見まはせば、東京の料理屋なりといふ、男女五六人連の一群



あり、中には盲目の男兒など交りて、口三味線に小唄を合せ謳うて、
年老ひたる娘を慰め顔せるも、哀はいと深かりし。されば東京は
いづれの町の人にやなど、また黙想に入れるも興あり。
斯るおかしき思を乗せて、汽車は只管に飛び、木曾川、揖斐川、長
良川の鐵橋を過ぎ、折々は旅人の隙を窺ふ拘摸の出入するを、其手
は桑名四日市と過ぎ、龜山に着きて、更に參宮線に乗り移りぬ。彼
の料理屋の一群はこゝにて大坂線に乗かへたり。
このあたりの停車場にも洋食洋酒を鬻ぐ家あり、遊覽地として些の
遺憾なし。一身田には一向宗高田派の本山あり、我友太田玉茗氏此
地の大學に教鞭を取りし頃のことなど思ひ浮べつゝ、津市に着く。

津 耶 伊 勢 耶

伊勢の津か、津の伊勢かと歌はれし土地とて、流石に商業の般賑を
極めたり。われ思ふ、わが日本橋は本町通り、旅
籠町、油町など大厦の立ち並べる町筋は、この津、
松坂あたりより出でたる支店多くして、何れも大
問屋を營みて有名なる、彼の田端屋の如き、川喜
田の如き大持丸が此の神風ふく伊勢地より出で、
一方の商機を握れるは、そも如何なる由縁にから
まるや、嘗て我の故勝伯の邸に出入せし折、伯の物語りに曰く、江
州及び伊勢の商人に行商を勧め、其の家風を立つることを教へ
たるは、彼の芭蕉翁の餘徳によれりぞぞ。元と翁は伊賀國上野の人



にして、江戸の水道事業に携はり、其他種々の工藝事業に關係する所ありしを見れば、翁は俳道の達人なりしのみならず、また經世の才ありしは疑ふべからざる事實なり。翁が當時その水道事業を督せしは、今田中宮内大臣の本邸内なる、關口の芭蕉庵なりとぞ。翁が此の地方に行商を勧めたりといへるも、或はその諸國行脚の際に於て會得せしものにあらざるなからんや、芭蕉翁と云へば、實に俳道の仙とのみ心得る人あれども、その經綸の才あつて、斯かる事業の先覺者を生み出せし如きは、俳諧は所謂徘徊にして、その社會觀の尋常一様ならざりしを知るべし、然るに彼の和歌者流の一室にのみ籠居して、唯だ歌枕をこれ金科玉條と心得たるとは、その抱負する所のもの洵に同日の論にあらざるべし、されば天下を動かさんと欲せば、自ら動かさるべからざると同時に、俳道の室に入らんと欲せ

ば、妄りに幽窓に讀書して、枯枝に鴉とまりけりとして感懐の情をやらんより、一笠双鞋、廣く天下の山川を跋渉して、その中自然にして會得せしにあらざれば能はざるべし。これより阿漕に入る。幾町にして阿漕平治の墓ありなど、停車場に傍示を掲げたるを見ても、私設鐵道の官設鐵道より旅客に便利を與へんと勉めつゝあるが如し。浦は津市の東部字津與の海濱を云ふ、蕉翁が、月の夜に何を阿古木に啼く千鳥の句を想うて情をやり、心に平次を祭りて、松坂、宮川を過ぎ、山田に着けば、客引の停車場前に立ち並び、手々におのが家號を記したる木札を持ちて、此方へくと罵り合ふを餘所に見て、かねてより古市油屋の名高きを耳にしたれば、



それへと車を走らせ、遊廓を通りぬけて其家に入るに、彼の油屋騒動の舞臺を今見る如く、おこん貢の古も忍ばれて、流石に其名に聞きしことの實なりしを思ひ合したり。

二見の浦

それより入車を命じ、二見街道に出づ、折しも小雨降り出で、四方の景色も定かには見えず、沙崎橋といへるを渡りて、その川の名を問へば、五十鈴川の下流なりといふ。この水上にや大廟の建たせ玉ふらん、神饌を供すべく神田の此方を駆けぬけて、兎角して二見の村に着く。町の入口より鳥羽街道と二見浦に行くべき道と岐れたり。

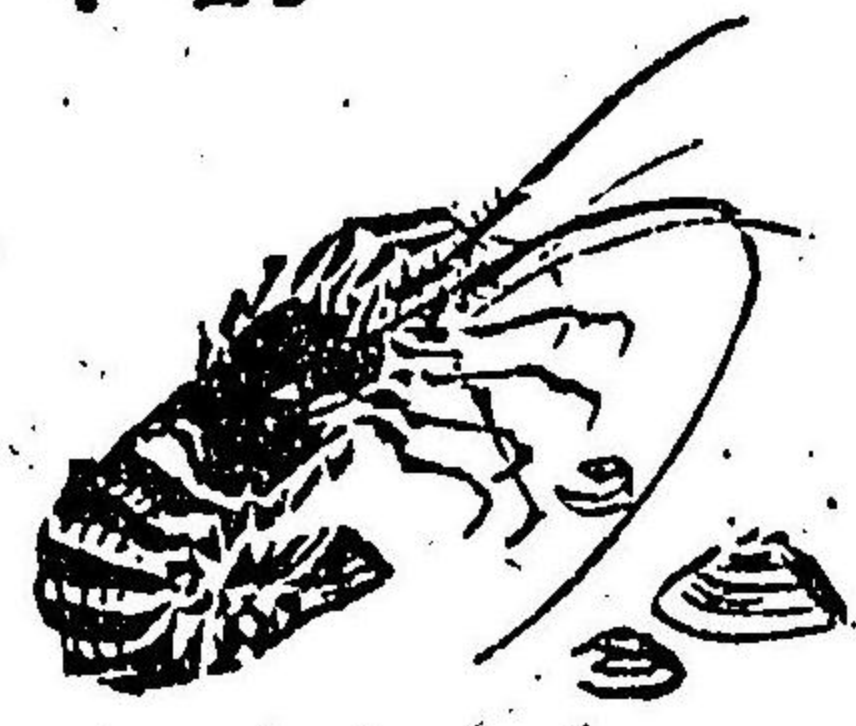
行く程にはらく松の林ありて、掛茶店などの清げなるがあり、古への旅の様なども思ひ出でつ。なほ行く程に路の兩側には貝細工など賣る店も見ゆ。海水浴といへるにて暫し雨宿りせる中、雲脚いつしかきれて、曇りながら雨はやみたれば、さて案内者に伴はれて濱邊に出づるに、伊勢の海浪平らかに、音無山も風靜かにして、砂白く松青き長汀曲浦の、げに終日のたりのたりと春の海見るらん如く、遠きは尾參の峰々を、雲烟模糊の間に望み、近くは真帆片帆の往來するを見て、天狗岩といへる鼻を回れば、海岸數間を隔て、手にとる如く見ゆるは彼の名にし負ふ夫婦岩なり、二巖相距ること三間ばかり、その間門闕の如し、男岩は高さ二十九尺、女岩は十二尺計あり、男岩には白木の



華表ありて注連を張り、女岩に及ぶ、また獅子岩、屏風岩など云へるあり、配置自ら宜しきを得たり、我は社務所に就きて一張りの大注連を寄進し、一祠の後に廻れば志摩の鳥羽の岬は双眸の間にあり、また遠く水烟の中に伊良子崎を望むを得べく、四面の光風悉く畫圖の如く、旅情頗る清し。
歸さには若き女共の松葉がくれにうち連れて、美しき貝など拾へる濱邊を辿り、海水浴に歸れば、鮑、海老などの下物にて一杯を傾け、陶然として其所を出づるに、折節時雨る、小雨も晴れて、かざす袖笠も要なければ、小手を額にそへて眺むるに、國中一の高山なる朝熊山の仰ぎ見らる、山頂には山城南禅寺の末派なる金剛證寺といへるがありといへば、登山の念のやみ難けれど、前途なほ遙かにして、さる悠長の旅ならず、其儘に思を殘してまた汐崎橋を渡り、全と舊

途を行く事を厭ひて、裏道を辿り、幾曲りして大廟近くなれば、山容水態、自から神々しく、その昔し大和めぐりせし折のことなど思ひ出されて、幾千代の松の色、今歳もかはらぬ旅にさすらう我身の何となくおかしさの胸に満ちぬ。

伊 勢 音 頭



纏て途中にて日も暮たれば、急て宿に歸しに湯石ませと女の案内するに、幾日の旅の汗洗ひ流して、快よく酒酌折しも、土地の名物伊勢音頭を見ずやとのと、それよからんと首肯ば、彼方にあれこれと云争ふ聲聞ゆ、何事ぞと耳立るに、備前屋、杉本屋といへるが何もあれを、あのが方に引んとて、仲居共の

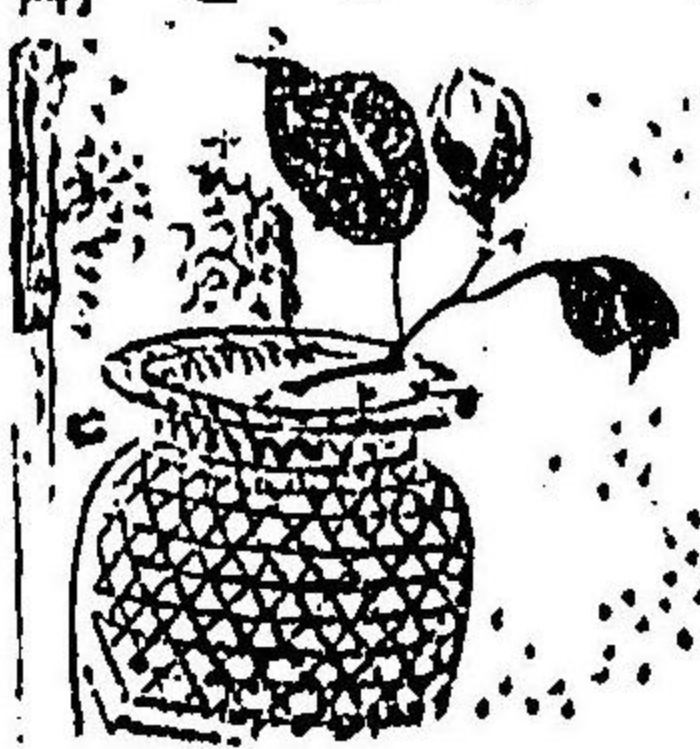
云ひ争ふなりけり。やがて我は染浴衣の派手なるを着て、杉本屋といへるに行きしに、此方へと案内す。座敷に通れば心きゝたる仲居の、伊勢音頭の刷物と菓子とを腰高にのせて持ち出で、お茶にお世辭を添ての愛想を聞流しつ、煙草など燻らすうちに、舞臺の方にて、三味線、琴、胡弓の音の調子あかしく起る、かくて仕度も出來たればとて、大廣間に伴なはる。此室は五十疊ばかりの坐敷なるが、われは床柱前に胡坐かきて、目眩はしきはかりの燭火の中に照らされたるに、少しはテレ氣味のなきにあらざ、やがて水色に其家の定紋を染め扱いたる振袖に赤き帯したるが六人ばかり調子を合はし、柀木をうてば、よい／＼よいやさそれへと呼びつれて、二十餘人の遊女共揃ひの衣裳ひらしやらと、手振足振いとおかしく踊るさま、俗氣は四面に充ちたれど、さすが土地の風俗とて、天窓から悪口叩く

程のものにもあらず、暫時は全じ調子に舞ひつれて、また柀木の音と共に右方のものは左方に、左方のものは右方に行きて、次第に場を退くに、燈消え、歌止みて、坐敷も聞となりぬ。われは其儘に宿に歸りつ、老ひたる仲居の語るを聞けば、むかしは廣やかなる地を擇びて、大きやかなる櫓臺を据え、そが上にて音頭を取れば、その周圍を年若き男女のうちつれて踊りぬ、これを七ツ調子伊勢踊と云ひしとか。延享の頃魚商人にて梅路とやら云ひし俳人あり、音頭の曲を作る、これを川崎音頭と云ひしは、川崎の町人なりし故とかや、また全じ頃のことなり、奥山桃雲といへる醫師あり、この人いと物敷奇なることを好み、今の伊勢音頭を初めて出せりと傳ふ、寛政の頃備前屋



の主人、外宮にて唄ひ奏でし鶴の舞なる古例と、往昔の歌垣とを折衷して當今の仕組を作り『せりあげ』の器械に工夫を凝らせしとか、明治十年の頃までは備前屋、柏屋、杉本屋、油屋をば四大樓と稱へて音頭をなせしが、柏屋は衰運に傾き、油屋は六七年以前旅人宿のみ業を代へたれば、今は只備前屋と杉本屋の兩家のみその名残をといめて、旅のお方を慰め参らすれど、名ほどには面白からぬ踊りに待るといひぬ。音頭の曲の一節を聞くに、櫻花、誰が悉がくにも、盛りとは、音ひ合されど、人心、移りやすさよ、世の中の戀は蕾の、開くまで、はつと浮名を、流しては、曲水結ぶ、谷影に、散りも初めぬひと木には、誰も目をやる、幕の内、調子の高い三味線に、さうは散るを待顔に、鶯鳴けば、ほゝゑみて、振袖口に、あてかやな、かざり車や御所車、御室あたりの、夕暮に、花の顔見る、樂み

も、かつぎ一重を、開の戸に、人目なければ、一枝は、手折る心を、抱かれて、縁を結ぶの、短冊に、風一吹き、散り際を、とよむは山の、笑ひとも、げにや名にあふ嵐山、あからめあせで、朝ぼらけ、開け放したる次の間は、嵯峨野を通ふ、人かすむ、まぶらぐ、梢にかゝる、一筋の、霞は筆を、かすらせて、そら色うつる、大堰川、青きは清き、水の色、白きは瀧の、清水や、北野詣での、沓の音、大刀持つ稚見の戯れは、鞍馬の山の、たにあろし、遙かこあらは、紫の、幕うちはへて、かりの音、花も聞き入る、風情にて、一日かさの、森さして、細静かに、寺のゑん、へりとり借て、後手に、つくく、思ひ廻らせば、繪そら事にも、花咲いて、實もなる御代のへ。といふなり。こを見て目を喜ばし、耳



を嬉まさんほどのものにあらず、兎角は旨いものゝ無しと、下世話に云ふを知りながら、郷に入りては郷に隨ふの意にて、これも伊勢の名物と云へばこそ見もしたるなれ。されど若い者などの、知らぬ顔して、ツイと通り抜くるが、分別ある男と云ふてよし。

参 宮

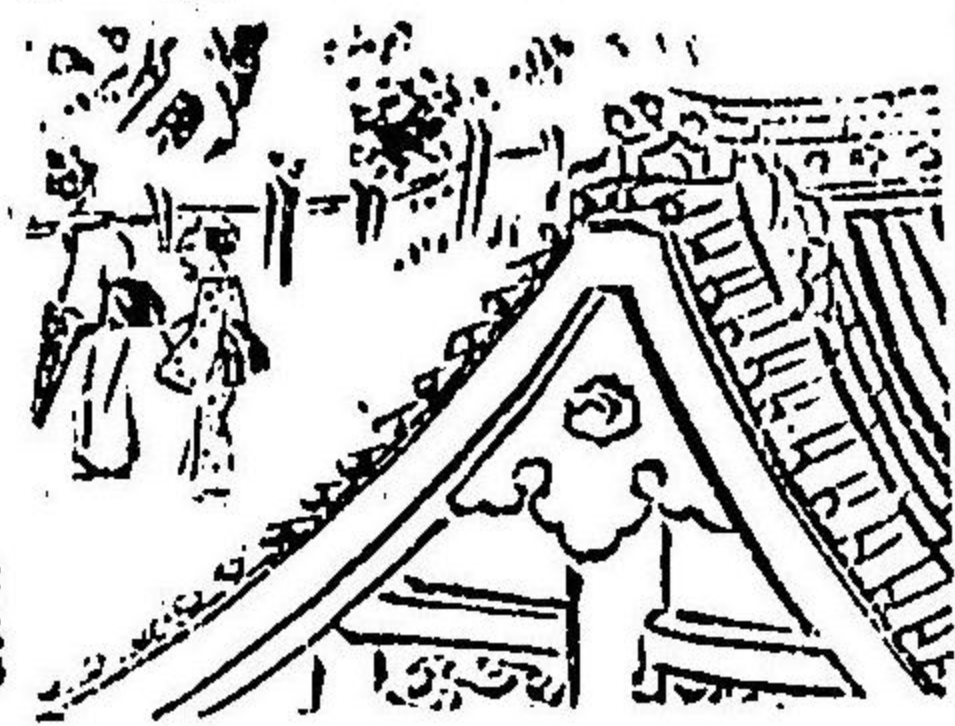
昨日は伊勢の海の夕陽に村雨かゝりて、松蔭のさゝら波の清く美しく、打ちかへしては洗はるゝ櫻貝の、その奇麗事は、實にビードロの二見ヶ浦の景色と、神々しき五十鈴川の裾とを越えて、黄昏の雲の麓の村に立ち迷ふ、御廟の裏山近き野の道を、小雨を衝いて辿り來し折の事など、思ひつゝけて、快く眠に入りつゝ、あくる朝早く

眼を覺せば、今日も亦雨の古市ならんど、思ひわづらひたる空の、案外にいとよく晴れ渡りて、風さへ少しは見ゆるさまなり。我はこれに力を得て、早速に朝餐を済ましつゝ、先づ人車を命じて、内宮へと急がす。山田も殊に古市の町は、小高き丘によりて建てつらねたる町なれば、道の幅は狭く、兩側の櫓と櫓のさし出で、春の人の賑はひは、さぞと思ひ合はされたり。その家の多くは宿屋、料理屋、それに朝熊山の御夢想、萬金丹を賣る家は、いづれも破風造りにして店の頭に金屏風杯をたて廻し、賣物を白木の三方に載せて出せば、客がそれを載いて買ふて歸るも、昔時に變らぬ神風や、一服で利く風薬、鼻聲で通るお導者を見つけては、モシ／＼あのそこなお導者衆、手前共は正銘正



眞、朝熊の萬金丹の本来本元、偽の無いは看板にも御覽の通り、一服召して行けど云ふ、向ふも本家隣りも本家、これは何方も本家の沙汰であるまいと、這々の躰にて逃げ出すもあり、花の旅ならば無ぞかしと思はるゝ見世物小屋も、今は大方部を下して、木戸口にかけるある太神宮の木札の、雨によれて見る人無く檐の下に立てかけある幟の竿に、日はあたれども秋の旭の光は脆し、隣りの店に薬研磨る小僧の顔も淋しげなれば、日向に乾かす丸薬に、白き微の生へたるにも参詣人の少き事は知られたり。山田の町の出外れに間の山といふがあり、この名物のお杉お玉は、今もその風残りありて、春は彌生の花の頃より、その舞臺に集りて、三味線、胡弓に間の山節を合はせ、節面白く唄ひつれては、旅客の情を慰むとかや。旦那、そこが夫れお杉お玉の舞臺ですと、車夫が教ふる家を覗けば今

は水菓子屋と變りて、皺枯れ婆の居るも興あり。阪を下れば、宇治町なり、五十鈴川の此方に櫓を並べて戸々紙革の賣入と、二見浦の貝細工など賣る、そが間には何々太夫など、古風な名のつく宿屋のありて、いづれも客の數百人を容れらるべき大構への、表手は河原の見晴らし好く、向ふの山の木の葉のうつりて、壘の波に青き影を落すも妙なり。われは先づ神宮司廳に至りて、公に寫眞の特許を得、宇治橋に至れば、五十鈴川清く流れて、神路山は杜に茂りたり。橋の上を通るに、河原に童の集りゐて、賽錢撒けとて、竹の尖に結びたる網を出す、われは興ある事に思ひて、二ツ三ツ四ツ投げ出せば、童は網を上下して、一厘残さず拾ひ上げ、水には何も落させざりき。さて神苑に進み行けば、



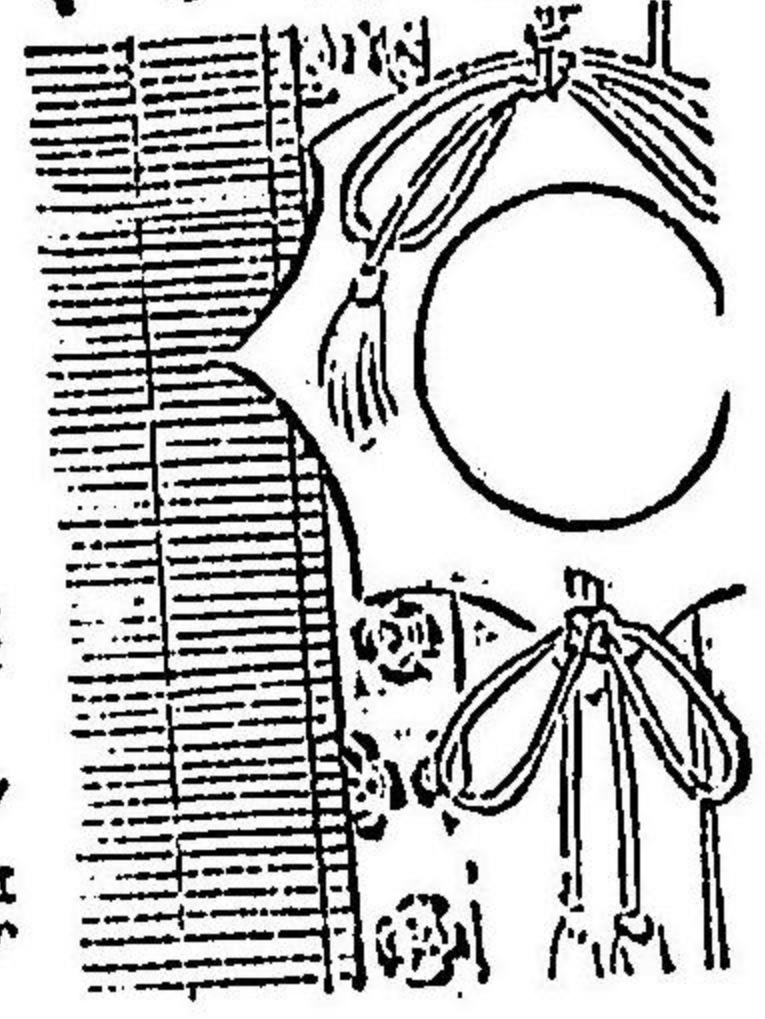
心地快げに掃き浄められて、青竹の柵の中には毛色美しくしき鶏の、事も無氣に群れ居たり。まことや諫鼓若蒸して、鷄驚かぬ君が代は、神の御庭の静けくて、群生ひの小松の、幾千歳をや重ぬべきと、下馬先より脱帽して進み、川に下り立ちて口を嗽ぎ、双の手を清めて、二の鳥居をくぐり、神樂殿の前に至れば、今しも神樂の上れりと思しく、笙篳篥の響など聞こえ折ふしは火輪太鼓の音も交りて、俗耳を洗らふ心地しぬ。忌火屋殿、酒殿、御賢調舎、番屏、あるは板垣の鳥居、外玉垣、内玉垣、その御門を越して、皇太神宮の御正殿の、御屋根のみ見ゆる、御門には白絹の幕の下されありて、たゞあり難さに、自づと頭の下り、腰のかゝみて、われど地に額づけるも尊とさよ。森々たる木立に風渡りて、太しき杉むらの中に、神々しき宮居、無垢清浄なる白木造りに、一點の苦もなく、御垣の下に立寄れ

ば、得もしらぬ美き薫のして、衣の香ばしきも嬉しく、折から日の光の、木の間を射りて、われ等が頭にさしかれば、いよく信心は肝に銘じてたゞ涙のはふり落つるを如何せむ、實にこの宮の御靈代は、八咫の御鏡にて、二千五百餘年の間の、さまざまなる世の態を寫され給ひしが、聖代の度は、彼の唐土にても、茅茨剪らず、柴椽削らずとある、この質素なる御社の姿こそ、わが國の御代萬歳の瑞なるべし、奢りて久しからざるは、異國の例にも見えたり、されば國の躰民の姿も、この大廟の素にして、神々しきを型に寫せるならんには、彌増すに榮えて、質も強く、壽も無窮ならんと、論無きことなりなど、猥り感に堪えて、廣前を立出で、風宮橋をうち渡り、風の宮に詣で



ぬ。浦酒たる小社なり。また橋を渡るに、兩岸の樹影は水に蘸りて、
 溪川の流れいと清し。徐々歸參の道を辿りて、御殿の方に至らんと
 すれば、假木屋の幾つもありて、普請の最中なり。番匠はいづれも
 白丁着て、清き襟をかけ、股立とりて、業に就く、小屋は青竹の矢
 來して、注連繩を張り渡したり、用材は悉く檜木にて、みな木曾の
 山中より出づるものなりとぞ、御遷宮の折の、如何に尊きことよ。
 また前の神苑に出で、山に上り水に臨み、再び宇治橋を渡りて、人
 力車を急がせ、間の山にかゝれば、後邊から押してくる立ん坊の、
 年若き娘なるも可笑しく、伊勢乞食と悪口さるるも、まこと錢どり
 は此地が上手なり。油屋の店に着いて、一喫吸ふやまた直ぐと、外
 宮詣でに出でにける。一の鳥居橋を渡れば、右の方は清盛楠あり、
 二の鳥居より神樂殿、九丈、五丈の二ツの殿、三ツ石、御池、ここ

も木立森々として、神の意も鎮まりぬべし。玉垣、蕃垣、瑞垣と、
 歴の世を幾つも隔て、そが奥に豊受大神宮の立たせ給ふ。ここに
 も三拜して、恐るゝ宮居の結構を見奉れば、正殿は南向きにて、
 萱葺、堀立柱なり。もとより金碧の飾りも無く、白木をその盛の社
 なれば遠く神代の事なども思はれて、かけし
 まくも畏き豊の宮柱、直き心は空に知ら
 む。實にこの神の御恵にて、衣食の道を得
 たる蒼生、いとも貴き事ならずや。玉垣の
 裏手に出づれば、細き徑あり、傳ひ行くに、
 木立茂りて、その根を清き泉の洗うて、古き池もあり。人の氣色に
 驚きてか、見も馴れぬ鳥の立つなど、神澄みて心地よく、なほ行け
 は少しばかりの神田あり、山の根に、古井戸ありて、注連繩を渡せ



り、戻りて衛士に問へば、そは神事に用ふべき山の井なりといふ。歸參の途に就き、時計を見れば、汽車の出づべきに、時刻は迫りたり。なほ天の岩戸、宇仁館の寶物など、見るべきもの數多残りあれど、匆々にして山田を出でぬ。宮川徳和を過ぎ、汽車松坂に至れば、唐綾づくめの乗客多く、いづれも利にかしこき人々の、こゝから三井家の祖先が出ましたなど、自慢顔するも面白し。津にて下車す、分部町に川喜田久太夫氏を訪ふに、氏は今観音山の別荘に住めりて、本宅にはあらず、その道の程を問へば、停車場道に沿ふて半里に近かしといふ、さらばと其處に人車を走らす。

観音山の秋色

津は地頭領町を繁華の中心となし、分部町、大門町などに、富豪の家が多くありて、四隣櫛比、いと賑やかなる町並なり、巷の中央に観音寺てふ古刹ありて、如意観音を安置す、本尊は石像にして、むかし阿漕が浦より出現し、漁夫の網にかゝりしを、時の國司のこゝに堂宇を建立して、祭祀怠らざりしとぞ、境内には茶店櫛を並べ、種々なる興行物の、笛太鼓など打鳴らして、繁昌を街ふ有様いと面白し、またこの地に國府の阿彌陀とて、有名な流行佛ある山開けど、前途を急げるまゝ、見ずしてそこを立ち出で、野道にかゝれば、田の面に稻の黄ばみて、坊主になりたる様の木より、鳴子の細を幾筋も引き渡したる、案山子の簀に秋風のそよぎて、夕陽は西山に搗きたり。野川に渡せる石橋を



わたり、鐵道線路を越して、一ツ二ツの小山の裾をぬひ行けば、向ふに見ゆるは観音山なり。漸々行き着き、車をすて、小門を入り、また幾曲りの坂を上れば、質素なる別荘の立てり、山の上には栗の木など多しと見え、早きは已に落栗して、木の間に夕日の影赤し、われは刺を通じて、主人に面せんことを請へば、時とも久太夫氏庭前に出で、祖母なる人と、菊を品せる折なりければ、わが遠來を喜びて、直に己が書齋に案内す、廣からぬ室なれども、小瀟洒せる四疊半、窓明ふして、机淨らなり。こゝにて氏の祖母君にも逢ひ見しに、年の頃は六十を三ツ四ツは越え給ひけむ、白髪は左までに目に立たねど、面の小皺に年の數も讀まるべく、上品にして愛嬌あり、きれ長き眼には慈愛の波も籠るべく見えて、何となう奥床しき方なりし。かねては久太夫氏の噂に、わが身の上なども知り居られしと

て、馴染も早く、今宵は是非に一泊して、孫の辭がたきともなり給ひねとて、懇ろに薦めらる、われは行先遠き旅人にて、かゝる處に日を費すことの叶はぬ由を、斷り云ふて主人と半餉ばかり物語りし、後會を約して辭し出づれば、この飼大の早くもわれに馴れて、麓の道まで後追ひ來るに、見れば主人も近徑をぬけて、われを木戸の外まで見送らる、さて別れてもとの野道を辿れば、日は落ちて、田の面は黒みたり。安濃川の橋をわたりて、停車場前なる遠帆樓といふ宿屋に憩ひ、發車の時間を聞き糺すに、未だ半餉餘も間のありといふに、さらばとて夕餐を命じ、こゝにて名物の伊勢蝦を下物に、獨り一陶を傾くる所へ、川喜田氏はわれを停車場に見送らんとて、こゝに訪はれき。先づ何



は無くとも、別杯を酌みて、さて汽車に乗り移れば、八口ばかりの月は、山の端に昇りてあり。やがては氏が姿の、暮色にかくれて、汽車の白き煙のみ、野に断々に残るも淋しく、淋しければこそ、物も思はれて、今日しも過ぎ越し来りしこと、打見たる光景など、眼に浮び、懐に上り来るぞ興深けれ。總じて伊勢の商人は、沈着にして思慮淺からず、家計をついまやかにして、多く資を蓄へり、されば津の町の富豪として、その土地はおろか京都にも名の響きたる、たばたや、川喜田などいふ家の本店を見るに、小格子づくりの手軽なる構造、奥は知らず、戸外より見ては、これが幾百萬兩の資産家かと、驚かるゝほど質素なる美風は、家名長へに傳へて、百年二百年乃至三百年餘の舊家もありといふ。もとより大家の衰ふるは盡所に在りて、國の亡ぶるは國費の増進にある如く、兎角は山師の玄關

の三代續くは稀なりと云へば、勤儉の二字こそ何人にも利く妙藥なるべし。別けてこの地の舊領主、藤堂家の御隠居は、いとく儉約の君にして、晩年江戸の縁町に老を養ひ給ふ折すら、嬰饒たる六十餘の身を起して、家扶家令の手を假らず、御自身魚屋に赴きては、杖の尖に觸など下て、御歸館あるを、われの嘗て本所に住ける頃、折ふし見かけし事もありなど思にもつかぬ考に時を過して、龜山停車場に着きける。

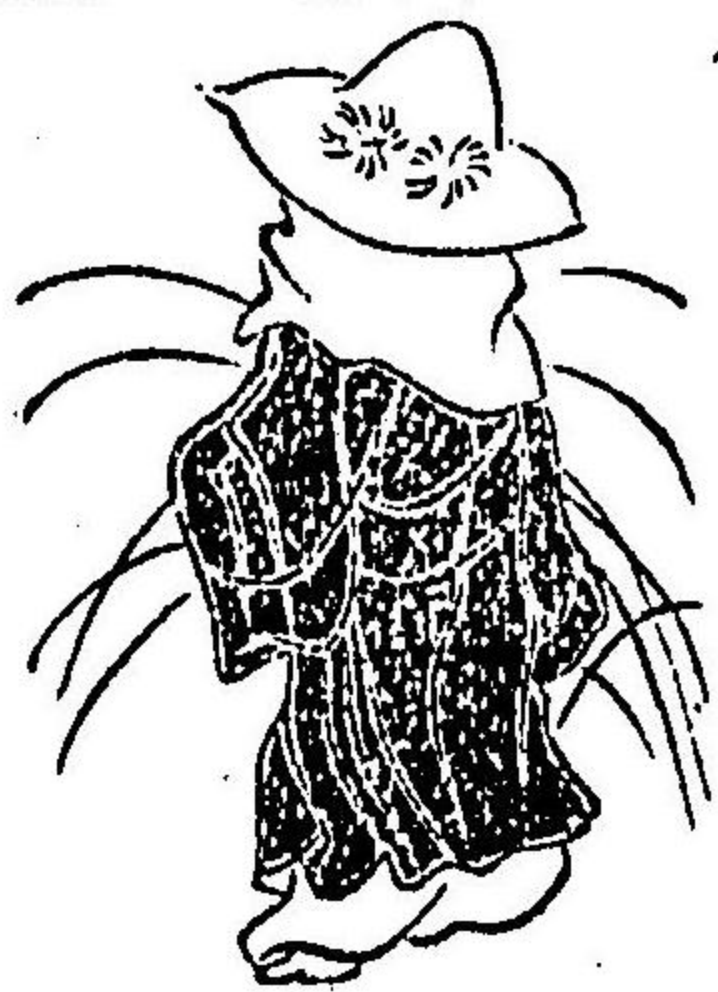
夢の月が瀨



人間無爲に口を送るべからず、暇があつたら、錦繪なりと、草双紙なりと、讀むは讀まぬに優るべし、博覽強記は不斷の役には立たぬ

ども、思はぬ處で功名して君の御感に入ることあり。賢愚の差別も、その人の注意深く、氣のつくど、不注意にして、抜作なるとの二つにあるのみ、今『龜山』と驛夫の聲に、おつと承知と汽車を乗り代へ、さてこゝは例の草双紙の、仇討のあつた龜山だなど、氣がついて窓の外を見れば、停車場前には洋食屋もあり、流石は昔時の御城下ど、なほよく見れば、票札に能褒野へ一里と記してあり。さすれば日本武尊の山陵も、この邊にあるべし、マツタお城の下には、鈴鹿川も流るゝ筈、晝間ならば下車しても見んが、この夜の黒きを如何せむ。儘よ、これもまた來む春の樂に残し行かんと、硝子戸を閉めて坐に直れば、何時の間にも乗り込みけむ、酔うて泥の如くなれる男の、藝者どもつかぬ怪しの女に、兩方から狹まれて、なほその上に酒を酌み居たり。われの此方に向き交ふるを見るや、その男は猪

口をわれにつきつけて、君一杯遣り玉へといふ。われは辭して受けざりしに、渠は頬を膨らして。野郎のが厭なら、この別嬪の、それ献せど、傍に侍れる女の肩を、ウントいふほど擲ち据ふれば、女はアレと聲立て、彼方の隅に小さうなる、折しも汽車は進みたり。いと廣やかなる二等の室は、予どこの醉漢の一行三人とのみ、斯くして渠は二人の女を追ひ立て、は大笑し、酌をどらしては鯨飲し、瞬く間に七八合の酒を飲み干して、やがてはベンチに倒れ臥しぬ。それから後は大風の後の如く、車中肅條として、二人の女も糸の如く居眠りたり。關驛を過ぐれば、山は近し、加太より拓植に至るの間は、天下に名だゝる嶮路にして、鈴鹿峠に連れる山の根を切り鑿きたれば、



峰時ちて、川流れたり。殊に大崖の築堤は、地を抜くこと八十呎、見下せば村の一ツ家微の見えて燈の影も迫かなり。加太の墜道は九町ばかりもあるべき長さにして、その中央より伊勢と伊賀路と別るゝなり。柘植に至れど月未だ落ちず、上野は芭蕉翁が故郷にして、伊賀越仇討の跡もこの地に残り。こゝには先年一泊して、紅葉兄等の一行と、共に月夕瀬に梅を見しことありたれば、その折の興ありし態など想ひ出して、外の方をうち見やれど、町の燈の影だに見えず、面白からねば、酒賣り歩く男を呼びて、洋食辨當と一合燗の正宗とを買ひ、月に一杯、山に一杯、飲み行く中に、車の搖ぎに酔はまはりて、いつしか夢に入りかゝる、月はだん／＼せり上げて、白晝の如くに耀きぬ。こは不思議やと、己が背後を振向けば、地上に落ちたる影を踏み合ふて、友二三人つゝき来る、見れば紅葉、小

波、水蔭、國松など、一笠双鞋、うち揃ふて、梅の林をかけぬけては、溪水の流れに沿ふて、月が瀬の村へと急ぐ、鍋屋といふに宿はかりたれど、美味のあらぬに、折しも賣り來りし物賣を捕へて、牛肉の買ひめめを試み、それを下物に、十二分の酔をかふて、一行悉く氣焔萬丈、就中水蔭法師泥の如くなりて床の上の高座に、宗論を開きたれど、隨縁隨喜の信者居らねば、その盡喧嘩にもならで止みたる模様まで、廿五年の花の旅を、そつくり夢に見るも妙なり。夢かど見れば梅の花、白う流るゝ川を挾んで、峰から峰と咲きつゝきたり。晝かど見るに月のある、月かど覗けば、花の影の水に映りて、流れの裾に舟行く見えたり、何うも不思議と窓から見れば、月は落ちて夜は闇なれど、爛々



たる星の梅、木津の河流に影は冴えたり。夜は深し、酔は醒めたり、
 鳴ヶ原、大河原を過ぐれば、雲も眠るか、山は寂として、風さへ青
 し。木津川の鐵橋を渡る頃には、何うにも我慢の仕切れずなりて、
 笠置驛よりたゞ譯もなく瀧車を下りぬ、下りては見たが車はなく、
 夜は黒うして案内が知れず、茫然として立ちたり出たり、當惑の眉
 を擡むる折から、一杯機嫌か鼻唄交りに此方へ來る老爺あり、停車
 場から射す洋燈の光に透して見れば、肩に天秤棒を載せつゝ行く。
 これは妙だ、おい村の親父さん、賃はいくらでも出すが、この荷を
 持つて、川向ふの宿屋まで送つて呉れんか、直ぐそこの鐵泉宿まで
 だといふ。さうさ、直段と相談だと、高ければ行くといふ賣り辭、
 此方は覺悟の前なれば、頼むくを云ひつけて、南笠置の村を過
 ぎ、木津川の渡を越して、漸うその鐵泉宿に着く、今一足遅かりせ

ば、戸を鎖して、われは宿を斷らるべかりしを、運の強きこそ心地
 よけれ。老爺にはウンと酒代をやり、こゝにも少なからず茶代を與
 へて酒に着に注文すれば、お内儀が出て來て、チヤホヤ、ホヤが曇
 つてゐて、洋燈が暗い、旦那御免やすとは、
 際どい所で洒落たものなり。

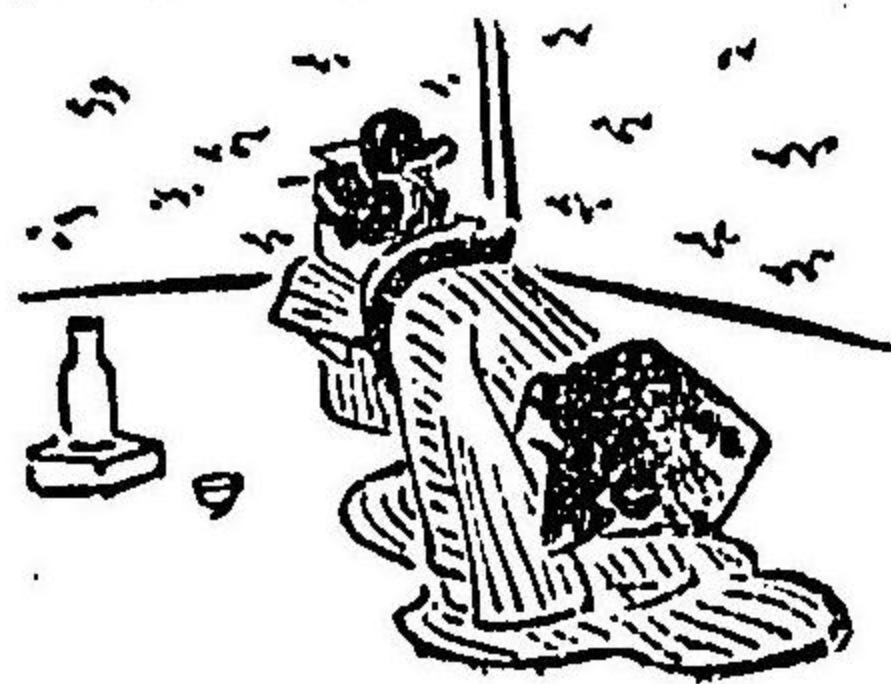


笠置山の一夜

少々は汚れましたなれど、この山の奥から出まする鐵泉も湧かして
 あり、召しませぬかと云ふに、それは結構と、洋服脱ぎすて、風呂
 場に行けば、その何に利くか知らねど、薬湯といふが呼び物にな
 りて、この夏は溢るゝばかりの人出、座敷も崖にかけ足して、葎

張の天井に、楚疊といふ急拵への居間さへ、錐を立つべき餘地も無
 きまで、客の込み合ひたりといふ、今一浴を試みたる所にては、質
 赤くして、臭氣薄しと云ふのみが取柄、われは夜更けて入湯したれ
 ば、垢の浮びて、心地悪しきまゝ、天窓から水を装りて、座敷に戻
 る椽端に、會席料理の獻立を貼りつけてあり、讀みもて行くに、一
 まむし何錢一ひる何錢と、書きつらぬたる、われにはそのまむしも
 ひるも、初めてなれば、奇しき料理を食はするものかな、蝮も蛭も、
 人の食ふべきものとは思へず、さるを如何に割烹に富みたりとて客
 にすゝむる法やある、土地異れば、變りたる風俗もあるものよとて、
 居間に戻りて二階の欄干に腰うちかけ、閑ながらも見渡せば、木津
 の川流れて、笠置の山の黒く峙てる景色嬉しく、向の村には、燈の
 影落ちて、星の數のみ水に映れり、遙か彼方の停車場は、終列車の

過ぎたる後とて、燈光の一ツもあらで、たゞ一人二人提燈點して、
 渡頭に舟を呼ぶ聲のみす。やがて酒と肴とを調じ來るに、先づ辭急
 しく、まむしとひるの事を問へば、女中の笑うて、あれは何んで御
 座ります、まむしといふは鰻の蒸焼、ひるは鰯の
 ことでおますと、わが不馴なるを嘲けり顔なるも
 悪し、景色を賞むれば、土地自慢のシタリ顔して、
 こゝは月夜はんの晩どすとほんまに好うおますと
 て階下に下り行く、一人旅は影も淋しく、孤燈に
 背きて、たゞわれ獨り酌みつゝも、弗と隣室を見
 れば、今までは心つかずありし上段の間に、パチリ〜と花札を疊
 にうち付くる音の、夜陰の空に響きて、手にとるやうに聞えぬ。そ
 の室は中に一間を隔てたれど、未だ新しき寶戸を立てたるのみなれ



ば行燈の下に集めたる頭の影二ツ、一ツは藝者めきたる鬘の出しやう、折ふしは小やかに打笑ふ聲の、嬌嬌きわたりぬ。よしや燈の影の小暗きにもせよ、神は常に人の四圍にましますものを、かゝる鄙の片田舎にまでかくし妻を連れ出して、竊に賭事を試むるなど、京の町にも多々ある例なり。明日はまた早立すべきわれの、夜を更かさんは、益無き業なれば、小盃にて五六杯、酔の微にまはるを名残にして、臥房に入りぬ。翌朝目を覺せば、日は高く昇りてあり、水色山光活々して、その風景の心地よさ、目も自ら覺めぬべく覺ゆるに、先づ木津川の畔に立ちて、上と下とを眺めれば、昨夜過ぎ越し來りたる方は、山又山の重なり合ふて、兩岸猿聲啼不止、扁舟已過萬重山の趣あれども、それより下りて木津の町ある方に及べば、水漫々として海にも似たり。宿に歸りて朝食を喫べまた欄干

によりて眺むれば、山雲晴れて、古松の懸れる大なる岩根に、行宮遺趾の四大字を、彫り付けたるは笠置の山營、畏くも後醍醐帝の、この御山に行幸ましまして、北條勢と合戦ありし跡なるを、今欄前に眺望しながら、登山なさぬも残念なりと、村の男に案内を頼みて、表口より再び登山を試みぬ、ただ八町の急坂なれど、路險しくて、荷を負へる男の汗になれるも慘まじく、山の上の茶店に憩ひ、澁茶を啜りて、山の由來などを聞き知り、椿本大明神の前を過ぎて、薬師石、文珠石を見、彌勒石の下に至る、この石高さ五十二尺、大なる佛像を彫刻して、笠置寺の本尊となしたりしが、元弘の亂に、兵火に焼かれ、七堂伽藍瞬く間に灰燼となりてより、風雨五百餘年の今に於て、たゞ剩す所のも



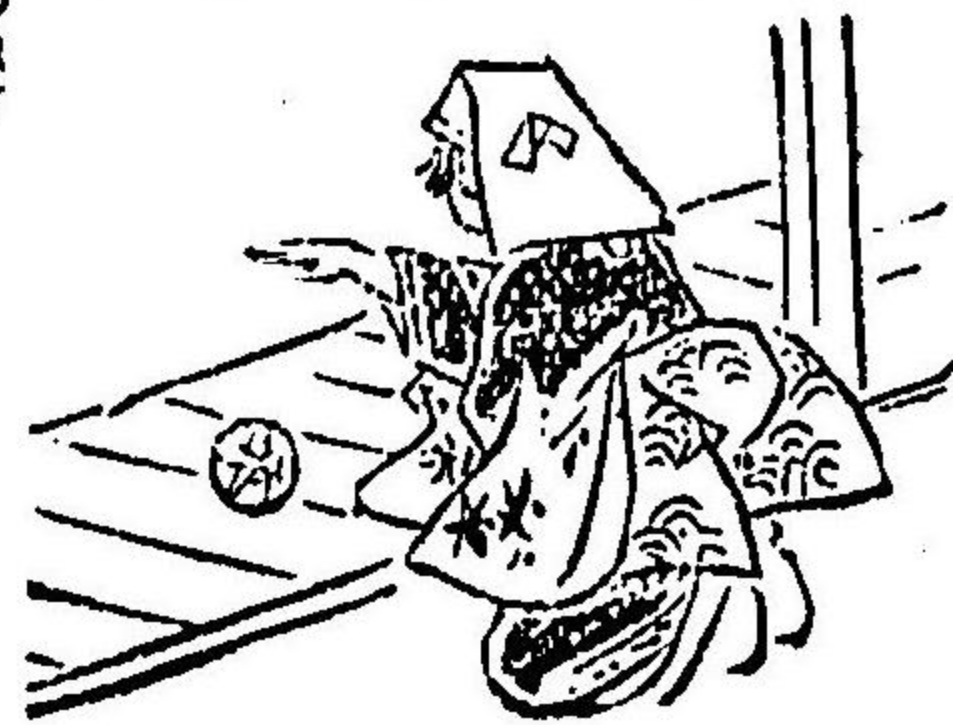
のは、一基の卒塔婆の、秋風に脆くも立てるのみなるは悲し、本堂といふも名のみなる祠のあるに參詣し、三十塔、金剛界、胎藏界を見めぐり、虚空藏石より胎内寶をぬけて、太鼓石に足踏みすれば琴々と音して、符に響くも面白く、ゆるぎ石は實に指頭のおしらひにて、揺ぐは妙や、源水が獨樂廻しより興あるに、われも押し、案内者にも幾度も押さして、笑ひこければ山笑ふ、吹き出す風は松の木葉を揺がして、日はまんべんなく輝き渡り、木津の流を遠く見せて、いと廣やかなる眺望なり。平等石の崖下に不動尊の石像立ちて、そのまた下に蟻の戸波といふ抜穴あり。そこを出づれば行宮趾にて、土地の廣さは三百餘歩、彌勒石の頭上にあたり、その昔は如何なる宮居の建てられけむ、今は見る蔭もなく荒れて、たゞ兵者どもの夢の跡を残せるやうに、秋草茂り木立闇くて、見知らぬ鳥の立つも

淋しく、豈も虫の音切々として、古へ帝のおわせし御の、落破れ、御籠古びて、紫震の殿の物哀れなり、されば半輪の月松の梢にかゝれる夜半、菊燈の下に殿居せる雲の上人が、直衣に一刀佩きたる姿の、窓に淡き影の映れる態を、こゝに見せ顔なるも口惜からずや。よしや怪巖百尺層累して、横なるものは樓となり、堅なるものは樑となりて、天の作せる金城を築きたりとも、内に頼むべき兵卒乏しく、外に聲に應ずべき勇士のあらぬ限は、いかに敵の百萬虎狼の軍に克たるべき、その山陥りて、帝行宮を落ちさせ給ひては、一天萬乗の君にましませども、妖雲四海に變りて、普天率土、身一ツをだも容れさせ給ふべき地無きを如何せむ。頼む蔭なる松の露、今は旅人の袂を濡して、露か、涙



か、數行下るをといめあへず、貝吹岩、毘沙門堂、稻荷堂、と残る方なく巡覽して、さて新込谷は何處と問へば、それは平等石の彼方、あの斷ッ立ちたる谷にて侍り、その向ふに微かに見ゆる一ト村あれが蘆刈と云ひて、その桶屋の老婆が、賊軍を導きて、この山を陥れたるにより、笠置の人が彼の村の人を思み憎みて、今日になりても婚嫁をいたしませぬ、また天の冥罰で、あの村一帶癩病が多きゆゑ、全く他所と交際をいたしませぬと、嘲けるが如く、罵るが如く云ふ顔を見ても、人の性は善なるもの、忠義の心は誰しもあるものと感嘆したり。されど憐むべきは蘆刈の村なり、他と交情を結ばざりしより、血族結婚行はれて、天刑病に罹るもの多く、今も其處の長者の娘に花のやうなる姉妹あれども、貰らうて呉るゝ人の居らねば、春老ひて深窓雨に慵く、秋は殊更殘菊の、香は残れども蝶も

來ず、見すく暮れて、細腰正に枯れんとす、天下の薄命これに過ぐるはあらざるべしなど、同情を寄せてわれは山を下るに、村は鐵道の開けてより、頗に繁華を増して、小料理屋めきたる家の壁には、ぼんぼこ三味線のかけられあり。宿にかへりて晝餐を済まし、再び木津川の渡を舟して、近道傳ひに停車場に行けば、發車の時に未だ間のあるに、近き野面をそいろ歩き、上りの汽車を待合せ、漸くこゝを出發せり。



四 條 驟

笠置の停車場より汽車には乗りたれど、これには生憎二等の連結無

ければ、込み合ふ中の片隅に入りて、土地の人の聲高に談話するを聞くに、乗客の多くは木津奈良邊に赴くにて、中には薪炭などを商ふ男の、三四人も交り居れり。線路は木津川に沿ふて下るのなれば、一方は漫々たる水碧に、對ふ岸は山も開けて、竹の一と村に、往き來ふ人の畫中のものなる。進むこと一里に近く、楠公駒返し岩あり、なほ行く、山の中腹に鳴瀧懸りて、車中の眺望、大によろし。加茂より奈良行の支線あれば、上下する客の夥だしく、こゝにて二等に乗換ふるに、奈良往復二十錢の切符を、網島にて賣出したる當時に方りて、その雜沓云はん方なく、鐵道馬車で東京めぐりするよりも、なほ安直なればとて、權兵衛八兵衛の大佛詣でするもの、千を以て數ふべし。われ等の室に侵入せるは、烏打帽にヒョロの吸ひ殘しを、耳の間に狹める丁稚小僧、瓦斯糸の四季衣着たるがいふ。

今日の汽車は五割増の三十錢、それで大阪から奈良二等往復とは、勿體無いほど安いではないか、ほいベンチに天鷲絨も張つてある、これは君の雪駄の鼻緒よりも、品は上等だなど、口賢く大巾をひろげて傍ら人無きが如くなるも憎し。瓶の原は川の向ふにあり、和歌に名高き處なれど、下りて見る氣もせず。新木津は茶の名所にして、和泉式部の墓もあり、祝園、田邊、田邊の村には一休最期の寺のあり、三作の庭など、春の日にのたりくと、菜の花黄なる中を、蝶に追はれながら、見めぐりたらんには興あるべし。長尾、津田、星田。時しも夕陽山の端に沈みかゝりて、餘光は楠公の社の、劍の碑の尖に輝き、暮るゝ間の遅く東の山の明るきに、拜殿の甍の、染め扱きたるやう鮮かに見らる



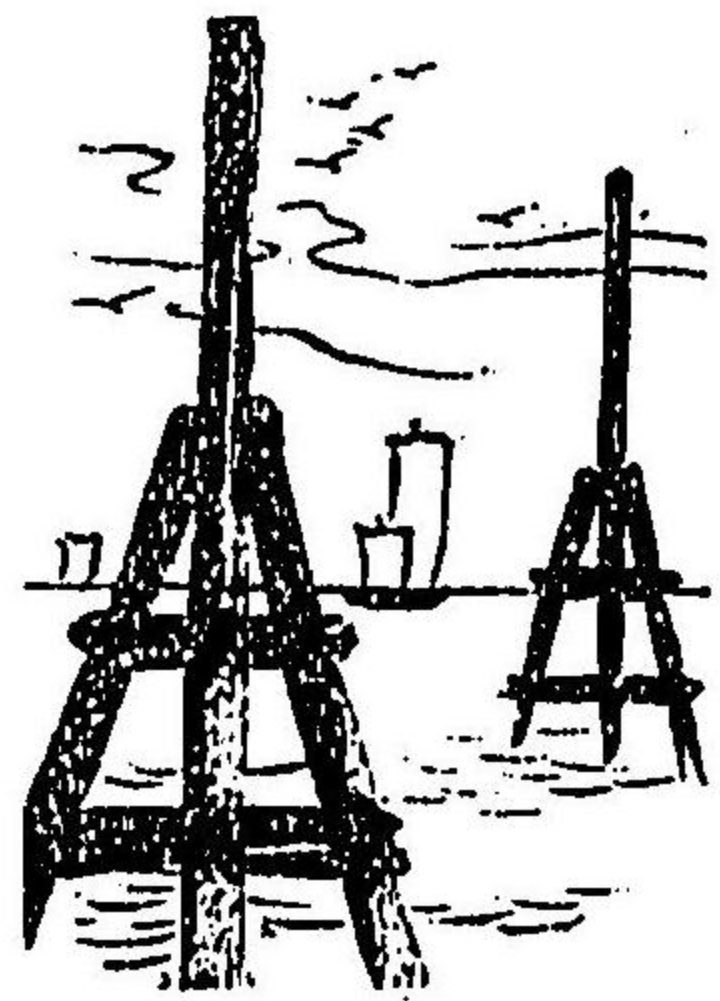
れば、われは俄かに下車の念禁め難くなりたるまゝ、こゝより下りて、人力車を命じ、官幣の社の石段の下に至りぬ。未だ漸らしき切石の、苔一つだに生ひたるあらねば、夜に入れども明るく、山の中段の剣形の碑は、なほ金色の光を四方に輝かして、不動明王の凛と立ち給ふが如し。階を上りて瞰ホテルといふに入るに、百疊ばかりも敷かるべき大廣間は、小兵なるわれの獨占、椽の端に出で、四方を見渡せば、沃野千里、河内攝津は一望の裏に落ち來りぬ。今宵は陰曆九日、月は已に後ろの小松山に上りて、天と地とは銀にや化しぬらむ、遠く六甲の山の、淡く一刷毛の薄隈を彩りて、夢の如く杳々適かなれば、その麓を一條の霞の帯の如く繞りて、彼方は難波の津ぞと思はるゝ方に、電氣燈の四ツ五ツ、霜夜の星のやうに燦たる見ゆ。近きはこの山の根の小松四五本、墨繪などにあるらむが如

く、ひよろ／＼と立てるも妙に、その先は村、そのまた村の彼方を折節は遠雷の音として、往き來ふものは汽車なり。それよりして見る限は黄なる田、實に百萬石の眺望を、一町に聚むるも心地よく餘りの面白さに、欄干に凭りて、見渡しながら、酒を行るに、料理は旨し、お内儀の愛嬌はあり、こは全く堀出し物よと悦に入つて、湯に入れば、初物の釜風呂可笑しく、これがホンの五右衛門とは、南禪寺の山門ならねど、こゝ千兩と賞めたき程なり。日記つけて、手紙を出せば後は用なき身の、いつか快く眠りて、翌朝目を覺すに、午前八時なり。先づ朝飯前にと、小楠公社に詣で、それより西北の方へ五六丁、公の墓地に向ひぬ。途中名物の陶器に楠公焼といふがあり、その名



の妙ならぬを氣にしいろく考へたる後にて、菊水焼とでも、改め
 なば如何やなど、案内する男に謀るに、知らぬ顔の赤鼻なるも可笑
 しく、この廣野菜の花の頃は如何に麗はしかるべき、今は太根時
 たる畠に、蜀黍のからくくと鳴るも哀れに、十二三才なる村の小僧
 の、花賣に出でたるなど、何となう秋の思は深し。墓地には年古り
 たる楠の木あり、大なる石に、贈位まで彫りつけあるも嬉しく、折
 から時齋の僧の五六人、この墓の前に來て懇ろに回向するに、われ
 も誓の中に入りて、香花など供へまつりぬ。傍に別に小さき石垣あ
 りて、古より存りたる斷碑を祀れり、石は飲け損じ、字は磨滅して、
 殆んど見るに堪へず。その誠忠も長く地に埋れて、田疇の間、公の
 跡を訪ふものすらなく、徒らに花開き、花落つるもの五百餘年、こ
 ゝにその朽ちぬ名の、王道興ると共に上りて、青史に一入の餘光を

添へぬ。飲盛の山は、昔の條を改めず、空しく野の露を命と蹴れ
 かる勇士、君を頂ける甲の下のきりくす、明月の夜を如何に啼く
 らむなど、古戦場の跡の、秋は何となう物淋しきまゝ、宿に歸りて
 朝餐を濟まし、車にて停車場に行く、一時間餘も間のあるに、また
 車夫に案内さして、野崎の觀音に詣でぬ。
 石階頽れ、堂荒れて、見るべき程のものな
 らねど、その昔は由緒あるらしく思はるこ
 に、こゝは西國の札所ならずやと問へば、
 車夫のいふ、この觀音はんは會議に洩れな
 はれたさかい、札所にはなりまへんど答ふる筋の可笑しきに、われ
 は腹を抱へて笑ふ。笑へば男は面を膨らして。何故笑はる、夫でも、
 御本體は居眠つてゐやはるげなどは、彌々妙な解釋なり。野崎と云



ふは彼の淨瑠璃の久松が在所、今も久作といふ家があるかと問に、それは旦那のち知己が、出口の茶屋で一尋ねまホと、尻輕に飛んで下り、茶屋の主人に物問ふ態して居たりしが、何んと思ふてや、その茶屋の主人は、鍵を手にして、己が家の前に立ちて、わが下り来るを見かくるや、旦那はん、久作の家に案内しまほと。ツンく前に進み行くを、幾丁程ぞと道を糺せば、直ぐその曲り角の家やと、指さして教ふるに、熟柿の下の藁屋の櫓を、さし覗けば實に久作といふ門札あり。七十餘歳の老婆がたゞ一人、日向に背を向けて、柿の皮を剥いて居るに、一禮してお染久松の由來を聞けば、そんな事は知らぬ、何代前の久作やら、それさへ一向存せんわと、白髮天窓を打振りて、さも五月蠅といふ顔なり。茶屋の主人は得意氣に旦那この家は四五年前に轉宅したものの、古跡はそこに榛の木のある空

屋敷と、云ふがまゝ、共々行いて見物したれど、證據となるべきものもなく、土驛馬鹿氣な詮索に、時を過すも要なき業と、茶屋に少しの茶代をとらせ、また人力車を急がして、停車場に着けば、折よく汽車の来るに乗りつ、住道、徳庵、放出などいふ名の、茶坊主めいた村々を、葉巻一本喫はぬ間に過ぎて、網島は心中本に馴染ある停車場にこそ着きにける。



水 の 難 波

難波瀧生ふる玉藻をかりそめの、蟹とぞわれはなりぬべうなる、と貫之が詠みたりし歌心も、今し明治の御代に、洋服姿の汽車旅行、

とてもそのむかしのありし風流は得知らぬと、ゆるさむといふ逢坂の關に急きて網島の停車場に着きぬ。此所も近松の翁が天の網島の古今の妙文をやりたる所なれど、これとて、今は諸工場に煙突の煙眞黒に立ち上りて、その昔のおもかげはなかるべし、兎角して汽車を下り。江戸仕立の旅姿に、額裏のそろ／＼したる贅六どもの中を押し割りて漸く其所を出でしが、お供にたちし寫真機の足手纏となりて、いつしか一人取り残されたるに、腹立だしく、大聲揚げて辻車を呼べば、よぼ／＼爺の汚なき車を曳き來りて、行きまほうか、と齒切のせぬ物の云ひ振もどかしく、兎も角も目ざすは備後町の盛文館と、速からぬ人車を急がせぬ。

京橋を渡りて、大阪城の傍を走らせ、盛文館に訪れば、不思議にも我よりは二月計りも前に東都を後にせし杉山兄の此所に在るに、

互に奇遇を喜び合ひてとり／＼に物語る。

折柄館主は神戸に行きしとて留守なりしが、我をば知れる内君の出来りて、甲斐々々しく待遇るゝに、汽車の疲を先づ休むれば、店員の早川氏大庭氏とそなれ／＼に我を勞はり呉れつ。

兎角に旅は窮屈なるが大の禁物なり、われ膝頭を撫つて饗應酒に辭儀して呑まんは酔心地おかしからず、大胡坐に無遠慮の書生氣質が何よりもしろければ、何處か其所等を散歩せんと、我より切り出せば、それ



よからんと、坐にありし三人も首肯くに、さればとて腕車を連れ、中島公園に走らせたり。やがて日は暈れつ。

浪華の蘆の中の島に銀水といふ料理屋は、安價くて美味き兩得の評

判なるに、それに車をつけさせて、先づそれ／＼に酒肴を誂へ置き、待つ間の涼風に公園を行吟ひ歩けば、朝日ビールのビーヤホールあり、わが新橋あたりのも趣異りて、洋食の一二品も一寸氣取る程の調法あれば、客足も自づと繁かるべし、こは或邦のビーヤホールの元祖とも云ふべきものと、土地自慢に大庭氏の物語る。また時刻も早やければ、豊國神社に詣で、大阪ホテルの前を通りぬけて、少しは疲れし腰を掛茶店の此方より打ち見れば古き都や浪華瀉、御威光も四方に飛梅の天満の社は見えねども、げに此所は水都といふ如く、淀の川瀬に燈火の影、満天の星と落ちて、涼船の往々来るさに目も眩かんばかりなり。

淀屋橋、浪華橋、一目に橋の三つ四つも眺めらるゝは、恰も東京の一石橋より四方を見放てるに異ならず、鳥が啼く東の旅人の、水の

浪華に浮かれ来て、何かおかしと言問はゞ、この涼船こそ此上の上

おかしきものなるべし。さて銀水樓にと踵を返せば、早や料理も整ひたり、我等を東京者と見て取りての庖刀加減口に叶ひて、酒も十二分に酔ひたれば、いさや是より夜涼の、洒落たる遊びに腹へらさんと、船を命じて大河に浮かび出づ。

かりそめの遊びなればとて、屋根船の費は盡さず、諸國を行脚の書生坊主、手輕が兎角調方なれば、傳馬船に毛氈布かせて、割籠辨當、酒德利、其所等に並べて、押し出せば、早や天満天神の二橋も通り抜けて廻る、一面の夕やけは御城の白壁を射りて、往んじ昔の殿めしさも忍ばれつ、古き松ヶ枝大空に擡んで、長へに渡る



風の聲も肌には寒きほどの心地すめり。
 迦ればのぼるに従ひて満川の夜舟棹さす隙もなき程なるに今更に浪
 華の賑の盛なるに驚けば、今日は高津の宮の千五百年祭なれば、そ
 の賑は日頃を増すなり、櫻の宮のあたり、仕掛花火の餘興もありと、
 早川氏の云ふに、さらば其方へと船を漕がせん、大阪の花火の世に
 名高きは耳にせり、面白しくと我の競ふに、さつさ押せくと、
 折しも隣舟の三味や太鼓の調子はよけれど、只管に上流に棹さしせ
 たり。

酒酌みかはして、岸に建ち並べる家並を見るに、淀川の兩岸は何れ
 も三層樓の家作なれど、一寸見は二階家の如く見えて、下層は川面
 に沿ひて作られ、穴藏の如き形をなせば人の住まんは難かるべし、
 今夜は仕掛花火の賑を見んとて樓上樓下に人の影黒く、夕日落つる

川波をうち眺めて、酒などくめるも夏の夜の涼しさ一入なり。

やうやくにして家並も粗になり行きつ、櫻の宮近くに漕ぎ寄すれば、
 彼岸は彼の造幣局なり、水の瀬淀む深水に涼船の數限りもなく船先
 を并べて、絶間なく打ち揚ぐる花火を、あれよくと打ち囃せるも
 あり、今夜を晴れと着飾りたる嬢様達、振
 の袂の媚ける舞子づれ、此所や彼所に夜目
 の綺羅を飾れる様、有繫は華浪の花なれや。
 涼船はいつれも其船端に大行燈を點して、
 何屋くと墨黒々に記るせるも晴れがまし
 く、さんざめく音の波にもまれて、彼方の岸に羨やましげなる人も
 ありぬべし。



とかくする程に船を蘆間の淺瀬に押しやりて、暫しが程は花火見る

目の急がしかりしが、いつしか酒も残り少なくなりけるに興味すこしく薄れ行くかと思ふ折節、世は調法や此所にも物賣船の去來して、酒召せ、水菓子も熊も御好に任せて御座りますと、愛嬌よく賣り來るに、それ此方へと三品四品を購ひて、また酌みかはす水の上の、つきぬ名残を杯洗にあらひて、やがて川をば下りしが、小夜の川風肌寒く、不圖見上ぐれば一輪の月隈なく水の面を照らして、黄金を碎く波間のおもしろさ、晝はさまざまにも見ざりし兩岸の酒樓に燈火の光ちらつき、流れに影を沈むるもおもしろく、彼方此方に船茶屋のつなぎありて、俗に生洲といへるに立寄りて、酔を買へる人多く、聞けよがしの鼻歌に船端を叩いて、遠見の花火は一入の興ありなど、若き男の清げなるが大方に酔のまはりし様もいと心地よし。私等も興は十二分なれば次第く船を下流に流して、やがて相生

橋の邊に來りしに、兩岸に并び建てる土藏の白壁月影に冴え渡りて、水の色さへ青く見え、柳の絲の風にゆられて、自づと夜は靜かになり行くさまなり。船が岸につきけるに、微酔機嫌の足取おかしく宿れる家に歸りしが、折柄館主も神戸より歸り居たるに、また相携へて柳湯といへる水に臨めるいと清き湯屋に赴きしが、其構造のまだ昔のまゝの石榴口附きたるもおかしく、上方育ちの丁稚小僧が湯屋自慢の鼻聲に、義太太など唸れるも流石は浪華の津なるべし。家に歸れば屋上の涼臺に薄縁しかせて、朗らかなる月光を浴びながら、露もこぼるゝかと思はるゝ玻璃器の杯に、ヒールの泡の黄金色



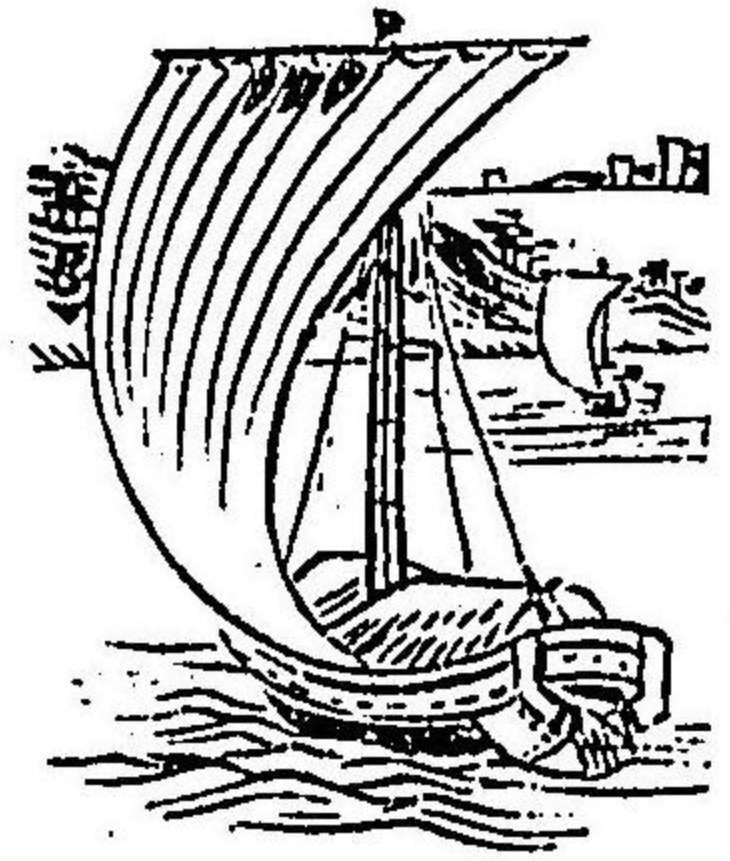
なせるも心地よし、げに草より出で、草に入るらん武藏野の原よりも、稻山といふ山だに見えぬ浪華江の、果てもなき大空の下に限りもなき家並の廣やかさに、驚かれて、さまざまの昔話や、浮世語に其夜もいつしか深げ渡りぬ。

阪 鶴 名 所

明くれば我は杉山兄に離別を告げ、主人岸本氏と共に有馬街道に出でんと梅田停車場に至れば、今其汽車の出たばかりといふに落膽して次の列車を待てども、あだに過すも由なき業と、さして所要のあるでもなき遊山心地に、西成鐵道にと飛び乗りて大阪を出れば、福島、野田、西九條と馳せ行く車窓より、窓外を見れば、此等あた

りは大坂の裏面にて、新に出来たる製造所やら會社やら、煉瓦製りの高樓あれば、煙突の煙の眞黒に立ち上るあり、汽車を乗下りする客も多くは月給取りの洋服姿にて、新調らしき蝙蝠傘に羽はあつても高くは飛べさうもなきお髯様ばかりなり。

安治川口にて瀛車を下り、川口の方を望めば淀川は恰も海の如く、瀛船の出入繁くして其繁昌さは、とても東京にては見られぬ景色なり、此所より遙かに天保山の燈臺を眺めて、また汽車にのり、再び梅田に歸



りしが、此度は別路によりて先づ道を阪鶴鐵道に取り、池田伊丹の名所を過ぐ、池田の近傍を流るゝ猪名川といへるは、水質酒を造るに適すれば、所謂池田伊丹酒は此川の水を以て造るなり、劍菱男山

は一時世に名高かりしが、今は灘の正宗ばかり切味よくして世に行はる、それより中山に出で觀世音に詣でぬ。此寺は西國三十三所の一にして、伽藍莊嚴なり、境内には大師堂、福神社、藥師堂、納骨堂あり、わが其所等見めぐれる折、この納骨堂の前に若き女の骨を納むるを見しが、時齋の僧の讀經につれて、はらくと落つる涙を袖につゝみて、得たへぬ様のいともあはれなるに、亡き父の片身か、二世を契りし良夫の遺骨かと、他所の見る目もいとあはれなりし。この後の山に鐵泉宿一二軒あり、山は多く赤土にして、その上に疎松生ひ、白壁の樓臺の見ゆるなど、おもしろき配合をなせり、仰げば六甲山の冑山は形よく聳えて見ゆるに、岸本氏も遠近の景に眼を打込みて、暫しが程は此あたりに行吟ひつ。やがて又瀛車に移り、攝州寶塚の鐵泉に行きぬ、停車場より野徑を

迎り、武庫川の岸に出でしに、過ぎし日の洪水に橋落ちて船橋を渡せるをわたりて、分銅屋といへる大なる旅館に宿りて浴す。鐵泉は赤土のいと汚げに色づきたる、鐵氣の多き水を沸したるものなれば心地よしといふべからず、そが中に玉なす汗を満面にたぎらせて唸りながら浴する人の様を見れば、焦熱地獄にありといふ血の池に、無間の業を悲しめる亡者の如くにして、阿毘叫喚の聲も聞ゆらん様覺ゆれば、早々にして其所を出で、河畔に清げの茶屋あるに憩ひて清風を入るれば、傍に一人の亞米利加人の休へるあり、旅の姿の懐しければ、此わたりの景色見んとて來給ひしにや、と問へば、強ちに景色見んとはあらず、此あたりより平野水とてラム子の如き水の地



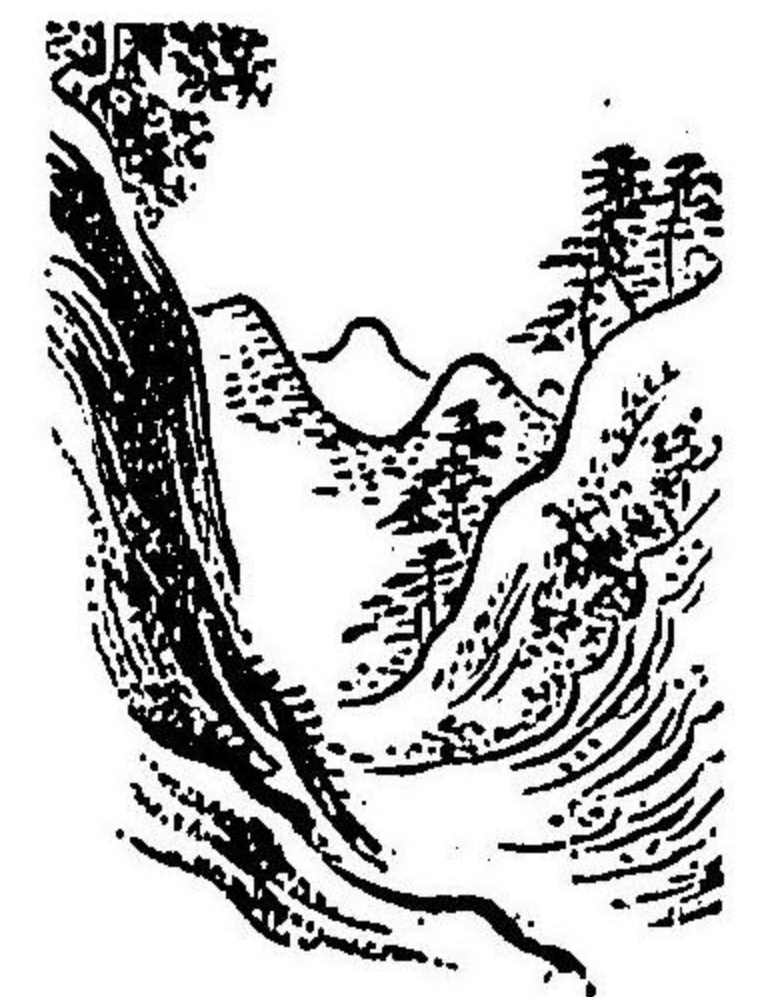
下より湧き出づるものあるにより、そが監督に來れりといふ、徒らに山河の風光をのみ探らん我等の眼には能ふまじきことなれど、化學の眼明なる人の松風露月の間に金穴を發見することの賢きよと、一笑して宿に歸れば、此川にて漁りたる名物の香魚に酒過して大氣焔を吐くに岸本氏は我のまだ書生氣の脱せぬを打ち笑ふなど、旅なればこそ氣の暢びて斯るあかしきこともあるなれ。

地 獄 の 劔 山

翌朝は此所を出で、有馬街道に向ひぬ、見送橋を渡り、武庫川に沿ひ、山の麓を廻りて生瀬の鐵橋に出づ、竹林の一簇繁る彼方に藁屋のほの見えて、雞犬の聲微かなるなど、物靜かに奥床しき郷に生瀬

の鐵泉とは是也。

此所には玉木館といへる旅館のあるばかりなり、山を負ひて川を懐ける此郷に、初秋の風ふき初めて、一時雨降らば木葉の一葉二葉飛びもしなん頃なれども、午過の烈日真向きに、赤土山を照らして暑くろしく、炎天やど、溜ぎながら一句つけたき心地もしぬ、旅は友をこそ、世に情ある岸本氏に名残を惜しみて此所に離別れ、車夫に寫眞機を負せて、とぼく〜と有馬街道に出でぬ。



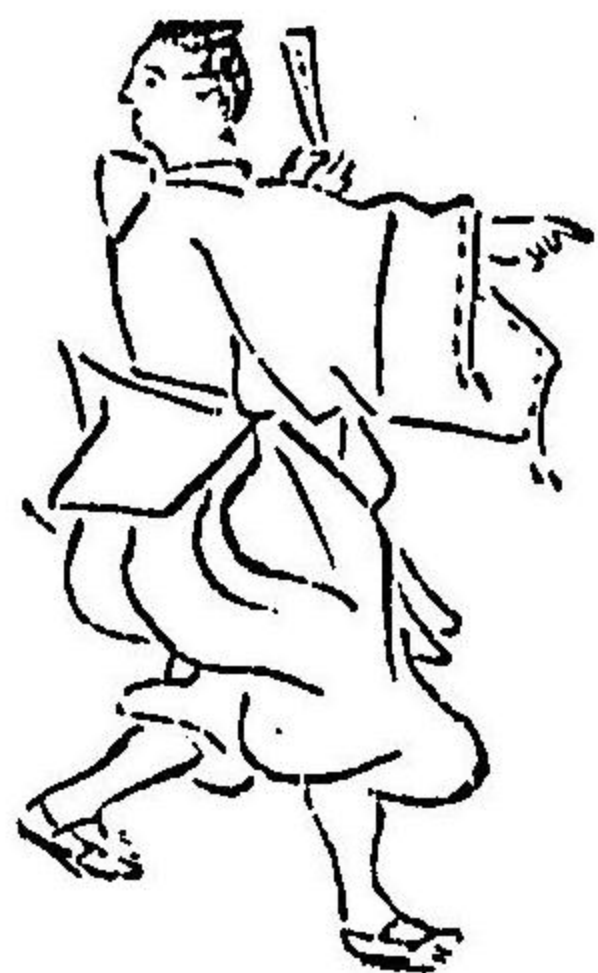
有馬と云へば日本一の名湯なり、此所よりは四五里の道程なれば、手拭肩に、顔から湯氣立て、戻り湯に鼻歌の客にでも逢ふことかと思ひしに、さる陽氣の沙汰にあらず、今年は大甲山の鳴動より以

來、浴客有馬を恐れて、車馬の往來さへ繁げかりし此の街道に、一人の郵便脚夫に逢ひしまでの不景氣に心細く、大方の希望のはづれたる心地して行くに、有繫は名にし負ふ名所とて、坐頭が谷、大多少川、劔山、など名も景色もどうやら地獄變相の圖に見る形をなして恐ろしく、とある山中の村につきしが、戸數五六十戸あるべし、小やかなる村なるが、昔は有馬の湯女といへば、此あたりより出でしものどぞ、茶などすそりて六甲山震動の模様など打ち聞くに、旦那様、御覽なされ、今年の地震であの障子が、あの様に隙いてしまひました、といふに、見れば誠や、柱と障子の一二寸ばかりも隙間をなせる様、其折の有様も思ひ出されて恐ろし。

されば今も猶折々震動して枕高くは寐られずといふに、さても劔香なる温泉かな、情有馬の出湯といふに、世に情なきことを聞くもの

と思ひつゝ不圖傍を見れば、今取り來りし計りと見ゆる松茸の籠に盛られあるに、酒の肴には此上なき品なりと、價を問へば安からねど、旅の勞を慰せんもの、これに増さるはあらざるべし、と不思議の獲物を車上にのせて、此所を立ち出づるに、山はますく禿げて火山の形をなし、草木も生へぬ坊主山の風情なき道を走らせつ。

有馬の温泉



やがて有馬第一の旅館兵衛といふに着きぬ。奥坐敷の一號といへるに通されしも、地震の爲めに客少なき賜ぞとあかしく、どつかと坐して汗を拭へる折しもゆるくと家の揺らぐに、それ地震ぞと飛出

せば、宿の男打ち笑ひて、お客様、そんなことに吃驚なされては、
 とてもこの有馬の湯には入れませぬ、この様な孫地震にびく／＼な
 されずと、しつかり氣を落附けてお出なされ、大丈夫で△ります、
 私が受け合ひますと、天災地變を此男一人が支配する様な云草に
 少しく心丈夫になり、湯女といふ小女に案内させて大湯といへるに
 浴するに、二間四方もあるべき湯槽は底深くして、立てば頸をも没
 する計なり、温度はことに微温くして、半時ばかりも浴せずば汗は
 出でじといふに驚きて、そこ／＼に此所を出づるに、清げなる湯女
 の我浴衣を張番して、うと／＼と居眠る態の罪なげなるも可愛ゆ
 し。

宿に歸れば酒肴の用意も整ひたり、先に買ひたりし松茸を小鳥に配
 して料理させ、其他名物といふものはこと／＼と取り寄せて、した

とかに酔ひつ、少しは上機嫌の足取おかしく戶外に出づれば、不圖
 行き逢ひたる人あり、これは先に關西鐵道に合乗したる一行にて、東
 京のさる料理屋なりといふに、料理屋は何處ぞと物數寄にも後に小
 女に云ひつけて宿帳を調ふるに、八百松の女主なり、八十にも餘り
 たらん、餘生短かき人の命ながら、むかし
 は戊辰のその折柄、堂上の名だくる卿達、
 武家のさるべき人々を、今は瘡せたるその
 諸手にあやなして、八百松の縁は幾千代の
 大黒柱の根を固めたるすぎまし婦人なり
 と知りて、我は男一匹の六尺の身軀を、たはけし旅の秋風に吹かれ
 て、いつしか老ゆる身の耻しさと、今夜は平生になき眞面目の感も
 胸に浮びて、旅のおかしさは無く、そいろに思を人の身の上に馳せ



て、さらば彼の老女が伴ひたる盲目の小見は、その孫なるにや、財は巨萬を重ねれど、世にあはれの不具者を携えて、月花のおもしろさも目に見て楽しむ事の得られねばこそ、供なる女の彼所は山、此所が川などいふを聞きて、僅かに打ち首背づき微かに小歌うたひて旅の心をやる様、目の當りに見る此老婆の如何に可愛からん、など臥床に入りてもさまざまのこと思ひつゝいけぬ。

そも世に名だゝる有馬の温泉は、六甲山脈の北陰にありて、海面を抜くこと千百五十五尺の高きに位し、山の風情、水の流れ、空氣の自づと爽快かなる、風の自然に清き、いづれ人に悪からんはなかるべし、市街は愛宕山を東南に仰ぐ、此あたり丘を負ひ、溪に臨みて建て連ねたる人家の、何れも三層樓いかめしく、清よげなり、浴場は市街の中央なる温泉の涌口に一個あるのみにて、浴室の一等二等

と區別せられたり、湯女は各坊より客に従ひて浴場に來り、衣服履物等を預りなどするものにて、老ひたるを嫁女湯女と云ふ、若きを小湯女といふ、むかしこの小湯女は眉を剃り落して、鐵漿を染め、帯を前結びにして、清げに出装ちたる様、いと趣ありしと云へど、今はさることなし。

温泉の來歴といふを聞くに、いとことくし、有馬の湯は我國温泉の濫觴なりとかや、神代の古、大己貴命、少彦名命の二神の發見し玉へるなりと、これより幾世の久しきが間、諸代の帝此所に行幸の事あり、後鳥羽天皇建久二年の頃とか、和州吉野郡河上高原寺の住僧仁西上人と云へるが此所に飛錫して再興を計り、藥師如來の十二神を祭祀して十二坊舎を建立したれば、今も猶何々坊と云へ



る稱の残り居れり、其後三百餘年の繁昌を極め、享祿及び天正の震
 災に被害甚だしく、殆んど絶滅の姿なりしを、豊公の改築せしめし
 より、今日に至るまで幾變遷の跡ありたれ、湯名夙に天下に名高く、
 今も猶四時の客絶えざれども、一夜に二三度も震動あるに、われは
 安き心もなく、明の朝日のまだ昇らぬに仕度して、さう／＼に籠に
 打乗り此所を出でしが、とある物賣る家に棒を休ませ、有馬名物、
 五色筆、湯花染など買ひ求めぬ。有馬筆は古來よりの名産にて製筆
 に従事せる職工の三百餘名もありといふ、これに次ぐは竹器にして
 近來輸出品の一なりとか、陶器、花山椒、松茸なども名物の一なる
 べし、殊に炭酸水は此地の一名物として名高きもの也、この泉はラ
 ム子と同種のものにして、鐵砲水といふ、藥師堂の後、杉ヶ谷とい
 へる孝徳帝の行宮の舊跡に湧出づ、昔時はこれを毒泉なりとて近づ

くものなかりしが、明治六年内務省司藥場を設置し、これを分拆せ
 しに比類稀なる炭酸水なり、酸味清涼なる藥泉にて諸病に功能多し
 と云ふに、今は美しき休憩所など設けられて、球突、揚弓場など、
 諸人の快を買ふによろしき所となりぬ。

これより有馬名所は、瑞寶寺、大鼓の瀑、
 功地山、穴虫の清水、鳥地獄、血の池、虫
 地獄、有明櫻、鼓ヶ瀑など、經めぐりて其
 由來因縁を聞きたれども、くだ／＼しけれ
 ば此には省きつ、總じて日本第一の名も有



馬の湯なれば、いづれ悪からん筈はなけれど、箱根、熱海を見し目
 にはさまで驚かん程のことなし、思ふに此わたり幾十ヶ國の内に温
 泉に乏しければ、自づと其名の高まりしにや、殊には京坂を近きに

ひかへこのことあれば、世に有難き温泉の如く思へるもさることな
 るべし、と有馬最負の人の聞きたらんには、許すまじき悪口を、歸
 りがけの駄賃に吐き散らして、九十折なす六甲山の坂路を、古めか
 しく籠にうたせて頂上にさしかゝりぬ。

六 甲 山 頂

これを六甲越といふ。山はすべ、としたる禿山にて、日蔭を避けん
 松の一木だになく、芒尾花の秋風にそよぎて此方へと招くが如き様
 もおもしろし、籠を休めて眼を四方に馳すれば、茅海の青波に白帆
 去來し、神戸、住吉の人家手に取る如く、東南は金剛、葛城の諸峰、
 蜿々として、遠く河泉の方に走り、南紀州の水烟に消えんとする様

中々にゆゝしき景色なり。殊に不思議なりしは此山頂に一個の大石
 あるに、墨黒々ど、明治卅二年七月廿三日、午前十一時、水蔭記と
 ありて、一首の狂歌の認めあるを見る、

我もまた六甲山程の高さかも

あたり不二の無きも蔭にて
 とあり、これ我友江見水蔭子の神戸新聞の
 探見隊として、畫工琳雨子を携へ此の山頂
 に來りしものあるを知り、故舊今眼前に在
 る心地して、彼がよの意氣を回想し、その



狂歌を日記帳に記して山を下りぬ。

此の山にはありむしといふ虫多くして、人の肌を刺すと頗る酷し
 日光の奥ぶよに似て五月細きこと限りなく、またてぐさりとはいへる

花、山萩、尾花などの、満山に亂れさきて秋山の色どり美しく、辻の茶屋山椒の茶店を経て、最下なる森安の茶店に澁茶をすゝり、旅の衣を秋の初風に心地よく吹かせつ。

兎角してあるに、この亭の夫婦と云へるは、いづれも似合ひし醜き形して、男は深山の荒熊をさながらの山男、妻は片眼の狼にも似て人をも食はんかど、いと恐ろしきに、近く生れたりといふ其二人が中の愛見を見れば、げに玉をあざむく程に清らかさなり、竹取の翁が娘の再生かど、この男女の中の見にはあるまじき美しさに驚きながら、不圖此方を見れば小山の裾の日向りよき所の草席に、一個の小かなる金網の箱の中になうごめくものあるにさし窺けば、一匹の狸の子の眼光らせたるなり、例の熊男の、おのれが獵に出で、捕へ來れるなりと誇りがに物語るに、われも好奇心のむらくと起りて、

こそ神戸に携へ行かんはおかしき土産なるべし、狸奴に供させて、抜目なき神戸人をたぶらかさばおもしろしなど戯れつゝ、そを一兩にて我に賣らずやと問へば、早速におまけ申しませうとの事に、兎も角も神戸まで携へ行き、動物園に寄附するも滑替なりと、買ひ受くれば、亭主は立ち寄りて、金網より狸ばかりを引出さんとす、見ればその狸片目なり、こは如何にせしぞ、片目の狸を動物園に送らんも無用なるべし、と二の足踏めど、亭主は知らず顔に蜜柑箱の古きを取り出して、それに移し入れんとす、小さけれど野獸の眼光らして我を睨まへたる様の忍氣なれば、狸はやさしき獸かど問へば、どうして〜お容さま、狸は狼についての荒い獸物、申藏を仰しやるな、この尖つた牙で人を



啗まうものならど、誇大に罵るに驚きて、さる恐ろしき獸物を、蜜
 柑箱にて携へんは劍呑なる業なり、其金網も共に我に得させよとい
 ふ我を、熊男は恐しき眼して打ち眺め、いろくの贅澤を云ふ客か
 な、十兩ならば、この箱諸共に賣らんといふ、十兩とは何事ぞ、ま
 して片目の不具物を十兩の金が如何して氣張れるものか、路銀も少
 なき旅人の懐を見て物云へと、破談すれば、亭主中々許さず、兎も
 角も狸を一兩で買ふ約束したれば、今更の變約は片腹痛き業なり、是
 非に買ひ取られよと強ゆるに五月細く、わが變約したる罪として茲
 に五十錢を得させん、それにて勘辨せよと、やうくに狸の縁切の
 一幕を、知らぬ山路の旅茶屋に演じ終り、一笑して此街道を下りけ
 り。

それより御影の小村に出づ、花崗石の出づる所とて、満山花崗石の

みにて疊まれて成り、大岩巨石の磊々たる間に細き道路の通ひたる
 を、恐るく小走に歩むに、今も落ち來らんかと思はるゝ計なり、
 我大黒といふ岩あり、山上に水流を引き、幾多の水車の絶間なく
 廻れる下路を、牧童の小歌うたひて牛牽きゆく夕
 暮の景色、土佐繪などにもあらんさまなり。住吉
 に出で、住吉社に詣づ、住吉社は表筒男、中筒男、
 底筒男の三神を祭る、求女塚、雀松原など云へる
 名所あれど、前途を急ぐ身の神戸へと行き着き、
 此夜は光村利藻氏の家に泊り、武井江見二君を訪
 ひたり。



又 の 逢 阪

十八日は光村、泉谷、八木三氏と共に大阪に乗り込みぬ、其折の日肥の、例の走り書に鉛筆の跡もなく、「われは九州に行く雁、難波江のよしあしは兎もあれ、二三日は「お上りさん」とけつたいなる名を呼ばるゝも旅は氣散じなるこそ好けれど、人々のすゝむるまゝに、有馬からの駕籠を、住吉の社頭にすてゝ、神戸より上り來る汽車に乗り移れば、約を違えず光村氏一行の在るも嬉しく、今越して來た六甲の山を白列車の窓から覗けば、天窓は禿げて襟元からペラ／＼と松の疎生え、藥罐に湯氣の雲の峰、崩れかゝるあたりこそ、北の坊はあるべしなど、昨夜の宿の心地よかりしことども語り合ふ中に、早や梅田にぞ着きにける。

道頓堀近くに知れる家のあるに宿かり、洋服を染浴衣にぬぎかへて細紐の伊達結び、月明く、風少しあるに、冷ましてはど内儀が親切に後から打ちかけくれしは、名も元祿を其儘なる丹前とは江戸でいふ「ドテラ」のことなりき。

難波は酒の都、酔ふては伊丹の劔菱、蟲拳狐拳と色々の藝を仕盡して興に入る通人衆を白眼で見る男山、無藝なればこそ、持ちたる箸は放されず、刺身は鯛の生作り、そのツマも枕もみなにして、椀もり、養肴、とり肴あるがまゝに食ひ散し、便々たる腹を胡坐に載せて、燭臺の彼方に輪に並びたる藝子ハンを見奉れば、舞子が幽禪の振の袂、花どうつらふ火影に、厚化粧の如菩薩、内心は如夜叉かそれは知らぬ



ど、ニツと笑ふ唇に胭脂を濃くさし、かき眉美しう、露も滴るかど
 想ふばかり艶なる髪に、花簪をさしたり、名はと問へば伊丹幸の
 千代鶴、八千代と答ふ、げに戀風は雛より其聲秀れたり、其中に年
 齒や、上の姉様株、目のパツチリとしたるは全じく伊丹幸の千代と
 て、これ南地一番の尤物なりとぞ、次は三榮の梅菊、これも愛嬌こ
 ぼる、口元の、團州が愛娘實子と云へるに似たるも妙に、あとはお
 玉、若久、米鶴、曰く何、曰く何、と有繋に此所は難波江の蘆邊に
 因む鶴の名多く、テコ鶴、ヒキ鶴、それち裙が濡れまする、御用心
 と、我はツンツルテン、テンとたまらぬとは此所等のことなるべく
 や、柔よく剛を制して、如才内儀の小蝶と云へるが鶴の一聲に、ハ
 ツと立ちたる大姉様、お勇と云へば此地での元老、舞に合はする三
 味の手は、こも富田屋のお國とて、お勇とは東西の大關、妙舞天樂、

げに神に入るとはこの事なるべし、今宵は駕籠の疲勞もあり、此所
 が丁度切上げ所と、獨り酒宴の席を遁れて、道頓堀の夜の景色を、
 三龜の二階から見渡すに、未だ浪花座は木戸を閉めねば、天の與と
 一幕覗くに、我當の由良の助、品位と云ひ、性格と云ひ、四十七の
 棟領に、そつくり其儘に粉装て居らぬぞ恨
 みなる。總じて此所の芝居は、仕打コセく
 して、勇士、義人などの大役には、兎角貫
 目の無きが多くあり、一つは土地の人氣に
 も因るべけれど、繪の名人は、墨を惜むる
 のなりと御承知あらば、それにて事は足りぬべし。長見物も一向に
 つまらぬ儘に其所を立出で、月面白う巷に人の影を落すに、また千
 日前をそいろ歩き、播重に女義太夫を聴きに入れば、繁昌は客の蒸



船、げに此所は斯道の本場と感嘆の聲をあげて、少さく隅の方に屈み、一くさり聞きたれど、こも亦興も乗らぬ放れ駒、其儘ふいと馳け出して、的無しに何處ともなく下駄の音響かして、只なる橋の袂にかゝりぬ。川は兩岸の彩燈を落して、紅、白、金色、水は種々の影を醸せば、折節は小舟の來りて、生洲に棹を止むるもありき。酔も醒めたり、興も月の光さへいつしか雲間に隠れければ、いざやこれより宿に歸らんとて、又道頓堀に來かゝれば、高島屋が藥玉の廣告燈に、往來の人の影もよまらるべくなりて、夜も早や更ぬらし、樓に歸り見れば、老妓若妓まだ居残りてわれを旅宿に歸さず、かてゝ加へて化物屋敷に案内せよといふ、今は重圍に陥りたる身の仕方なければ、止むなく諾して其處に行けば、陰雲、慘澹、げに千日前ならでは見られぬ世にも不思議の興行物なり、枯尾花に觸骸の風俗

したる番人の、小暗き隅に怨めしく横はりて、一目見るだに膽もちいみ上る計り、我等が様な小膽者は五鉢慄々と打ち震へるを、これからかうと道を教へ呉るゝまゝ、場内悉く見めぐりたるに、その物凄さ言語の外也、見れば何時の間にかやら我につき沿ふ舞子を見失ひしに、却つて茲に危難をのがれて、無事平穩に宿に歸りぬ。』と即興の筆の跡を此に寫し取りて、詳細しきことは、我胸に忘れじと、概畧のことを書き流しぬ。

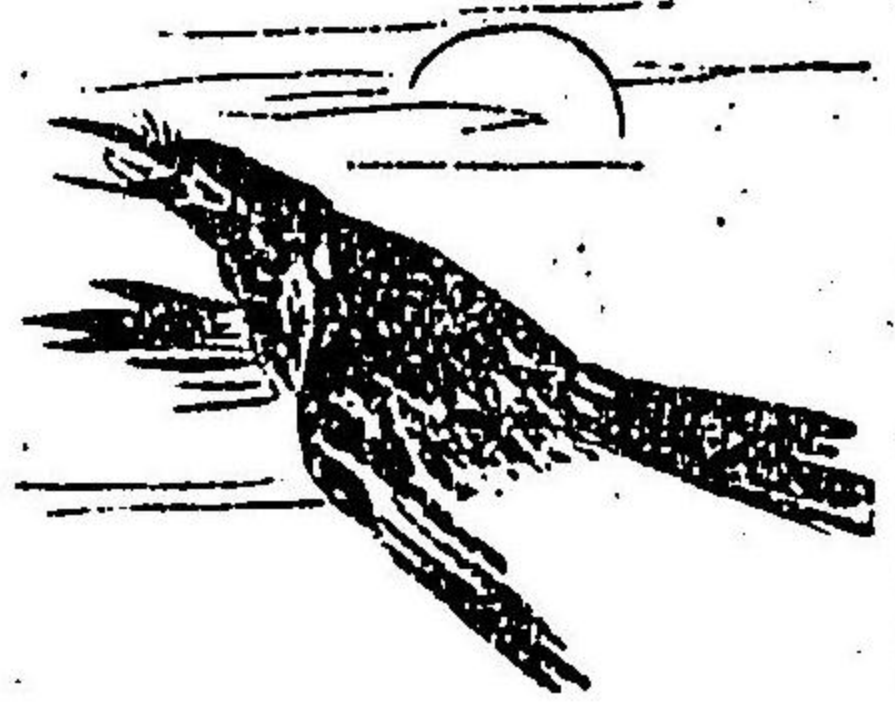


ほ 杏 の 浦

名に逢阪の關路、許さじとどむる袖を引き切りて、是れより紀州

の名勝を探らんものと、今日は早くより難波の停車場に至るに、昨夜より約ある泉谷、八木の兩氏は影も形も見えざれば、我のみ獨り汽車に乗りて天下茶店の停車場に下る、名し負ふ是齋と、林源次郎の復讐のありし所とて知らぬ人もなく、今は公園地となりて、遊人の杖を曳くもの多し、それより住吉街道の東二町ばかりに丸山といふ所あり、兼好法師の舊蹟なりとて、印に石の寶塔の建てるあり、兼好世の亂を避けて、その召使なりし命婦丸が故郷にたより、この安倍野に行吟ひ来て、命婦丸が賤しき業を扶けて餘生を送れりとか、翁が兼好も廷織りけり花の時といふ句はその跡を吊ひしなるべし。是よりまた住吉の停車場に下る、住吉神社の縁起はくたくしければ畧しつ、世に名高かき高燈籠を出見の濱邊に打ち出で見れば、淡路島、播州、紀州の山々遠近に見えて濃淡畫の如し、彼の住吉物語

の姫が其姥と共に糺母のつれなさを避けて、讀經三昧に世を果敢なみしも此わたりなるべし、松ふく風の音にその姫がかなでし琴の音の今も猶のこれるかど昔戀しく、住吉名物と云へる土人偶、麥藁細工、貝細工、ごろく煎餅など購ひ、再び漁車に乗り、塙は車窓よりながめやりて、濱寺に下りぬ。濱寺は一帶の白砂青松にして風景絶佳なり、元享年中三光國師の開創せる大雄寺といへるあり、七堂伽藍高く聳えて世に名高かりしが、今は唯其跡を残すばかりなり。此のわたり一面の眞砂美しく、磯馴松夕根波に洗はれて、往きかふ白帆の青葉が隙間よりほの見ゆるなど、得も云へぬ眺めに、屢しが程はそいろ歩きしつ、猶眼を放てば、西に淡路島、北には須磨明石、一の谷、鐵拐峰、さては南に



紀州の海原、阿波の鳴戸も雲耶山耶の間にほの見ゆるなど、盡きぬ
 趣を、急げる旅なればそこくに見やりつ、嘗つて此の古松をさ
 る企業家の開拓を企て、無慚にも伐採せんとせし折柄、亡き大久
 保公の此地を巡回するに際し、可惜名所の老松を伐らんこととい
 と惜しさよと、

名にし負ふ高石の濱の松ヶ枝も

世の仇浪はのがれざりけり

と一首の歌を咏じて、地の荒廢に打ち嘆かれしに、企業家も實にも
 と思ひて、遂に伐採の企を止めたりとか、されば海濱院の主、仁田
 某と云へる人、大久保公の徳を頌し、濱寺公園に記念碑を設立しぬ、
 まことに世に趣深き美談と云ふべく、大久保公の人爲も今推量ら
 れていと床しき心地す。

停車場に歸りて和歌山行の汽車を待つに、一等室の窓より首を延ば
 して此方を眺むる二人の紳士を不圖見れば、思ひきや、泉谷、八木
 の二氏なるに、互に喜びて共にこれより和歌山に向ふ。
 大津、和田岸、貝塚、佐野、樽井、尾崎、箱作、深日の諸驛を時の
 間に馳せて、和歌山の停車場に着きぬ。

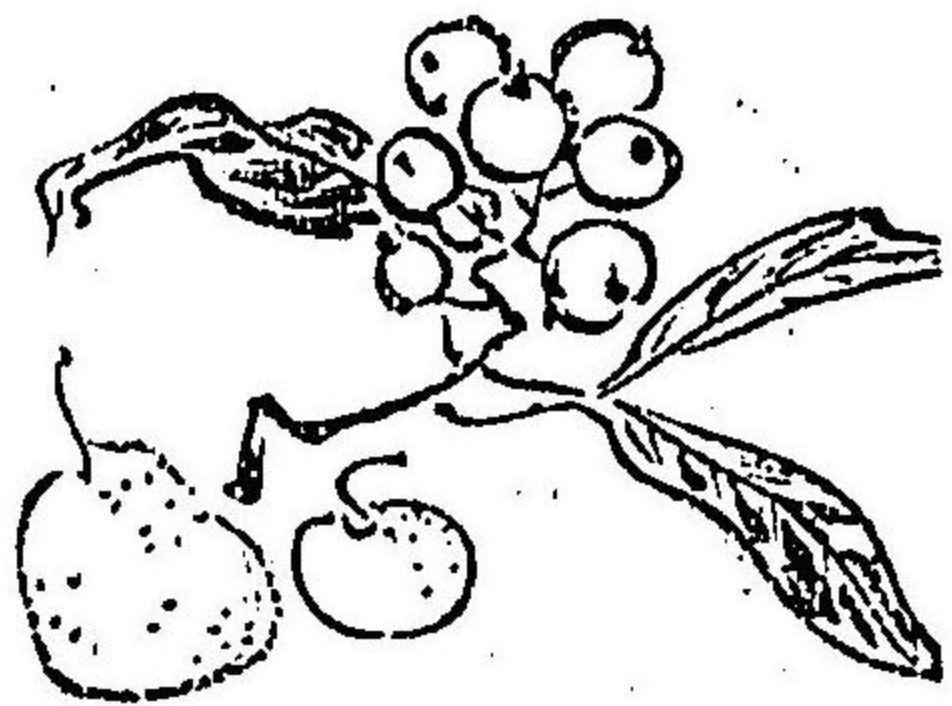
和 歌 山 市



折しも紀の川は過ぎし日よりの霖雨に増水
 して橋落ちしかば、橋跡に年老ひたる老爺と小童との渡船に往來の
 客を乗せて、果敢なげなる浮世の生活に汗水流せるも痛はし。
 乗合の中には、今宵中秋の月を和歌の曲浦に眺めんものと、風流め

かして頭陀袋を肩にせる俳諧師、あるは月にも花にも若き婦女なく
 ては酒ものめじと云ひたげなる、鼻下に八字の旦那殿の舞子携ふる
 ものもあり、いづれも月に浮かれん心のとりくにあかしく観せら
 れて、我も東都を出で、今日此所に紀州の果てまで、三五の月に一
 句を吐かんとてわざ／＼の酔興、腰に一瓢は携へぬと胸に妙句を練
 りて、あれかこれかと考ふる折しも、船はいつしか彼岸に着しが、
 彼方の岸よりも今船出せし其船より、乙羽氏々々と我を呼ぶものあ
 るに、誰ぞと見れば、大坂朝日新聞社の角田浩々氏なり、共に久し
 き逢瀬を此紀の川の流に汲まんことこの不思議に驚きつ、懐かしさの
 眼に物云はせ、手を延ばして久闊の情を遣らんものとあせれど、強
 情なき船は彼方此方に棹を隔て、押しぬれば、早や一町も彼方に過
 ぎ去りて、友の影さへ波に消えなんとするに、泣いて明石の離別な

らねど、いとも名残惜しく、見返り勝に岸に上れば、早や入車に打
 ち乗りて和歌山市へと急がせぬ。
 有繋昔は徳川氏の親藩、今は南海の大都會とて車馬の往來繁し、車
 上より家屋の建築を見るに、多くは二階造りの軒
 低き家並いとよく揃ひたれど、洋館は表通りにい
 ど少なし、町に入りて先づ我等の目に附くは鬘附
 油など賣れる家、及び奈良漬、傘など商ふ家の特
 に多きなり。又彼の紀州チルと云へるメンチルを
 賣る家多く、我等が書生時代にシヤツ、ズボン下
 の原料にとて、少なからぬ蔭を蒙りし此織物は、此所等あたりよ
 り出づるものと、小學校時代の梳白小僧の所を思ひ出でつゝ、京橋
 を渡り、先づこれより紀三井寺へと只管に車を走らせたり。



市端に至れば、戸々互に機織る音の聞ゆ、此あたり塙末ながらもさ
 までに軒傾かず、機をる女の風姿も清げに見にくからぬは、此産業
 の然らしむる所なるべし、さるを昔は嚴めしかりし武家屋敷の今は
 見る影もなく荒れ果て、淺茅ヶ原となりぬるあはれさは、いづれ
 の里も變り易き浮世の習慣なるべし。
 紀三井寺も早や程近き頃、今朝より雨催ひの空、やうく掻き曇り
 て白雨降る村里のわびしさ、門田の畔に孤鴉のそぼぬれて、飛びも
 かはさぬ羽のしめりも見るからにあはれげなり、我はこの雨の景色
 のあかしさに幌も掛けず、彼方の山を打ち見れば、紀三井寺は白雲
 の中に隠くれ、五重の塔のみ杉の木立よりほの見えて、まだ楓林の
 暮ならぬど、音に聞く寒山寺も斯くやど、詩趣胸に踊りて而かも一
 句だに浮び出でず、彼方は和歌の浦波音も静かに磯馴松少枝墨繪に

も描きたらんが如し、やがて車は紀三井寺の麓に着きぬ。

和 歌 の 浦

車を停めて、斜めなる石徑を昇り、本堂の
 此方に腰打ちかけて彼方を望めば、げに天
 下の名所といふ名所を此の山水の間に一つ
 に取りまどめて、更に天工を加へし至妙の
 景を作り出せし如く、一度見ては其風光に
 目を驚かし、再び見ては其景物に手を拍ち、感嘆我れを忘れしこと
 暫らくなり。



げに我一眸の間に入りしこの景色こそ、和歌吹上の全景なれ、そぼ

降る雨に、浦風そよぎて、浪はさながら天女の笑めるが如く、青松の風情、燈塔のさま、雲烟の間に搖ぎ出づらん様にて、人の魂も躍り出で、此の長汀曲浦の邊にさまよはんかと、唯この妙景に打たれて言ふべき言葉も、記すべき筆もあらばこそ、獨り微かに、天下十三福地、此山亦是古靈場、潮音和梵遺洋濶、林樹起花雨露香、昌國一燈傳聖燄、翠屏三井讓清涼、或神魏々金剛窟、幸聞光明秘密藏、と祇南海が遊紀三井寺の詩を低唱す、いまだ絶景の萬一を盡すの思せざれども、唯暫らく思想を玄妙の邊に馳せて、眼を和歌山城の天守、鹽竈、其他あらゆる名所に馳せて果しむなき興を遣り

紀三井寺

紀三井寺は名草山の半腹にあり、紀三井山護國院金剛寶寺といふ、紀三井寺とは其通稱、古義眞言の巨刹にして西國第二番の札所なり、和歌山を去ること一里二十五丁、開山爲光上人一刀三禮の作、十一而觀世音は此の寺の本尊なりとや、其他開山堂、二重塔、鎮守祠、經塚、札納堂、鐘樓堂、大師堂、常行念佛堂、等ありて何づれも壯麗古雅を極む、二王門は大佛師運慶の作にして、金剛力士を兩脇に安置せり、また應同樹と云へるあり、爲光上人の遺物にして四季落葉せず、花無くしてよく實を結ぶ、これを他山に移つせば忽ち枯凋するといへる一珍木あり、又三瀑布と云へるありて、南方なる楊柳水と云へるは本堂の下方、二町餘の所にあり、楊柳觀音の御手より涌出し、中を清淨水といふ、表



門の阪際さかぎはにありて胡瓶こびん觀音くわんおんの御手みてより涌出いっしゅつし、北きたなるは吉祥水きちじやうすいとて本堂ほんだうの北三町きたちやう、大士たいしの徒衆とじゆう吉祥天女きちじやうてんによの管くだるところ也、魯盤ろばんの臺たいにあらねども、仙人せんじんの掌てのひらに凝こるらん白露しらつゆの香かも斯かくやと思おもはれて、清冽せいれつ玉たまをあざむき、玲瓏れいろう氷こほりの如ごとし。

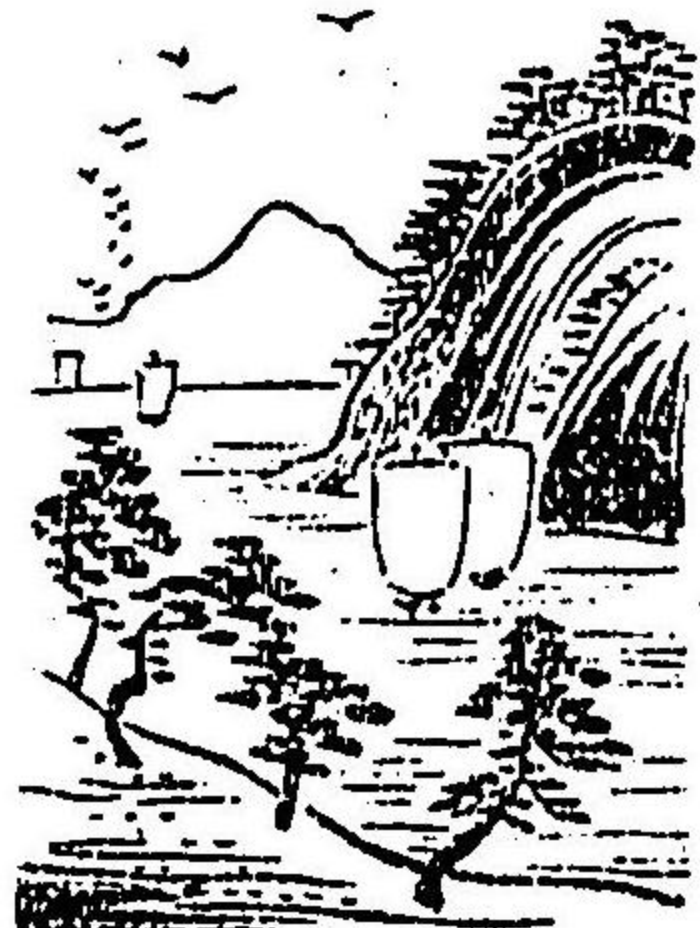
本堂ほんだうは建立けんりつ以來いらい凡およそ三百年さんねんなり、山内さんなんはこれより猶なほ百年ねんの餘古よこしといふ、此寺このてら内ないにて建築けんちくの尤もつとも見るべきは山門さんもんにして佛像ぶつざうは本尊ほんぜんの觀音くわんおん大士たいしと、本坊ほんぼうの本尊ほんぜん、不動明王ふどうめいおう等とうにして、殊ことに人ひとをして感嘆かんだんせしむるは、運慶うんけいが作つくなり、洵まことにこれ鎌倉美術かまくらびじゆつの真相しんさうといふべし、其他その他古迹こせきは本堂ほんだうの良かたの方五町ちやうごを距へたてて、千手谷せんじゆたに、其側そのかたへなる龍燈りゆうとうの松等まつとうありて、いづれも由縁ゆえん正ただしきものあり。

當寺たうてらの開山かいざん爲光上人わうしやうじんと云いふは、唐代たうたいの聖僧せいそうにして、我光仁帝わかくわうにんていの御宇ぎよ、寶龜元年ほうきゆうげんねんに來朝らいちやうし、普あまねく海内かいないの靈場れいじやうを探たづね、遂ついにに此このの地ちに飛錫ひしやくして

一大刹いちだつしやくを建立けんりつしぬ、白衣大士びやくたいしとは即すなはち此聖僧このせいそうのことをいふとぞ。

蘆邊の小舟

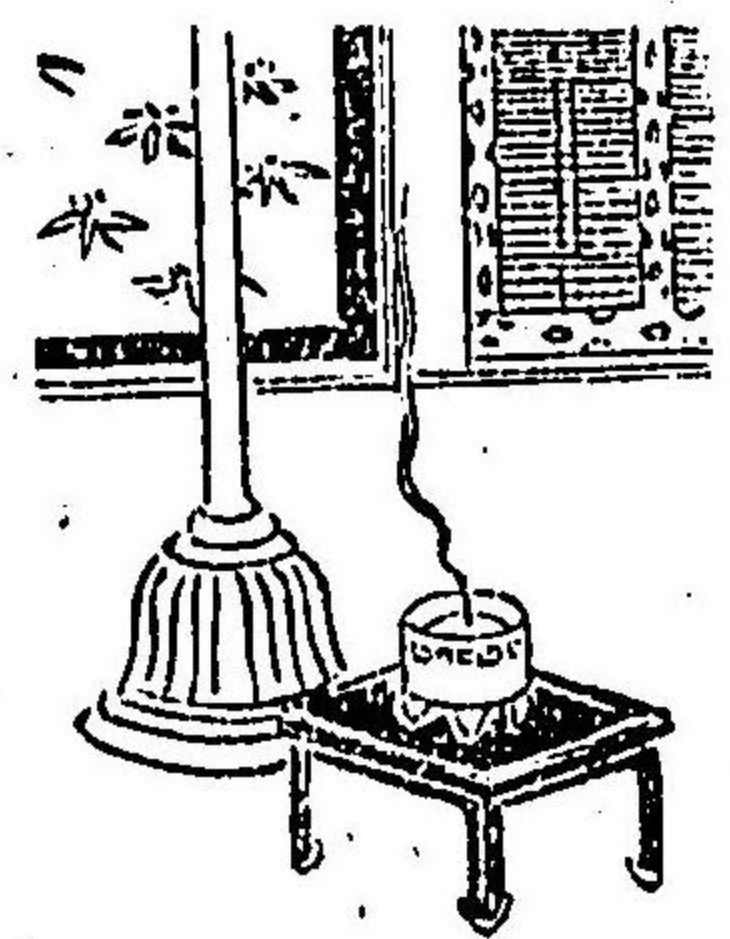
やがて浦邊うらべに下り立てば、少すこやかなる一艘いっそうの舟ふねの我等われらを待まちてるに、豊公ほうかうが、うち出いでし玉津島たまつしまより詠なむればみどり立ち添そふ布引ぬのひきの松まつとよみたりし、その老松らうまつの木影このかげより船ふねを出いし、船子ふねこに權かを操あつらせて揚々やうやうとして漕こぎ出いづれば、傍かたへの汀なぎさに丈たけなすばかりの葦生あしをひしげる、名なに高たかき、和わ歌かの浦うらに湖滿うみみちくれば片男浪かたをなみ、あし邊べをさして田鶴たづ鳴なき渡わたるとは、げに此このわりの景色けしきを詠よみしものなるべし、船ふねはやうく進すすみて鹽釜しほがま



に至る、藻鹽たぐ烟の松ケ枝を縫ひて、夢かどばかり淡き景色の中を漕ぎ行けば、波いと静かにして、折節は小魚の躍る音聞えて、閑寂一入なり、蘆間を距て、妹脊山の見ゆる所に至れば、觀海閣は波間に漂ふが如く、多寶塔は青松の間に建ちて、一帶の山容水態既に名畫の域に入らんとす。

やがて船を觀海閣の下に着けて丘に上り、更に閣に入りて檻外に出づれば、名草の山は烟雨の間に籠められ、紀三井寺は薄墨の一刷毛さつと引きたるが如くかすみて、有耶氣耶の境に動搖するが如く、布引より翠の浦かけて白帆の時雨を避けて去來するなど、皆遊魂をして天外に飛ばしめ、遠くは清水、藤代、鹽津などそれかどばかりほのくど表はれて、低く迷へる水雲の間に浮び、初島は更に淡くして夢の如く、近くは不老橋畔、簗笠の漁人一竿を擔ひて歸り來り、

これよりゆるく突出でたる赤砂の州崎には雨を帯び色ますく濃やかなる松樹のむらしぐれたる、正に四條丸山の大畫幅を眞に見る心地して、到底筆舌の能く盡す所にあらざるなり。



やがて芦邊茶屋に着きて、案内を乞ふ、今宵は仲秋三五の夜、和歌の浦曲の月にあこがれんとて、風流のすざびに一夜を明さんと立ち出でし人も多かりしに、折節そぼ降る雨に空晴れど、無月の嘆にあたら興をさまさんことを恐れて、大方の客は早や家路に就きし後なれば、女中の物さびしげに、柱によりて爪弾の音ちかしく小歌など微かに歌ひて、夕暮の物淋びしさをわぶる姿の趣深し、今宵しも月の明ければ、此樓上に詩人墨客の集るもの數多かるべきに、此の空あひなれ